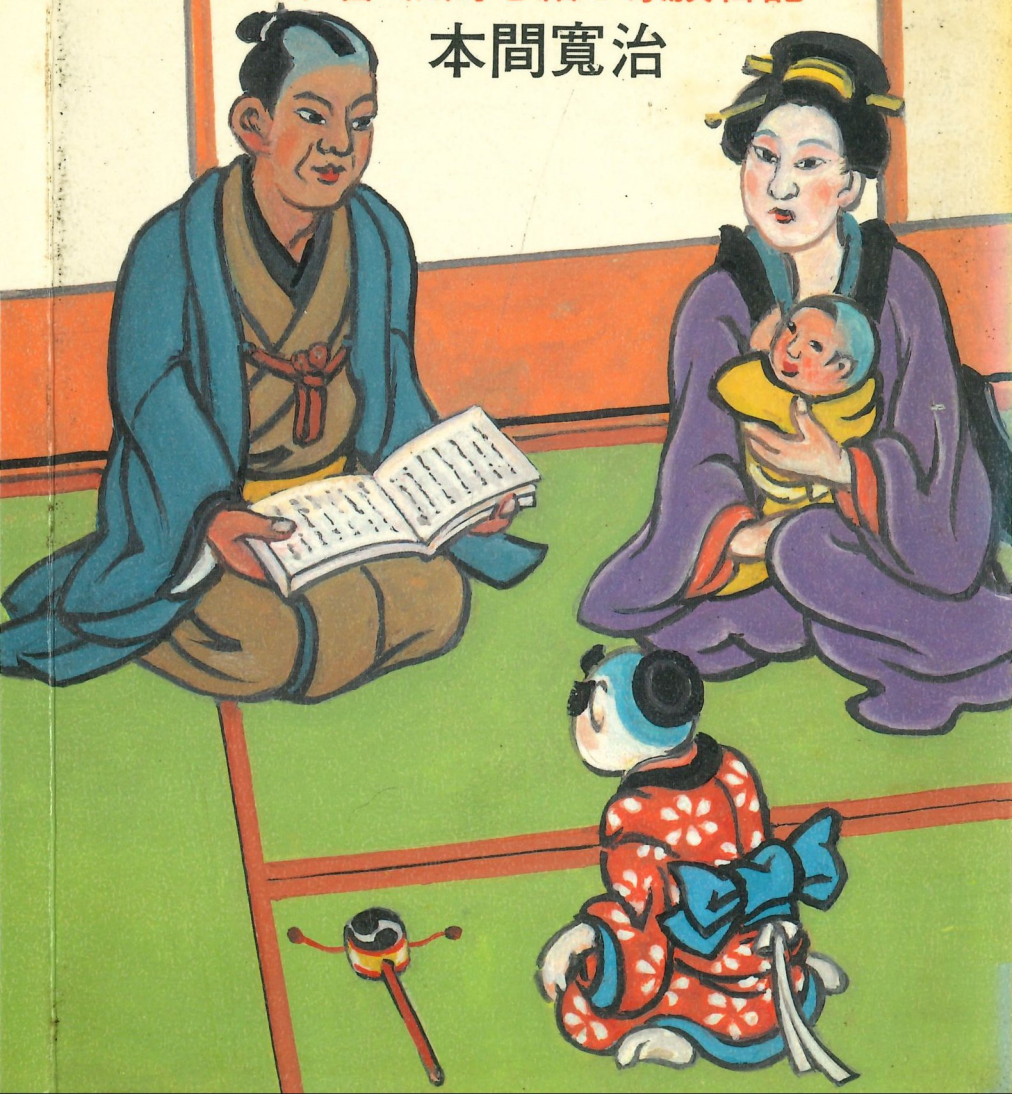
ばくまつおやこでん

幕末父子傳

桑名・柏崎を結ぶ家族日記

本間寛治



ばくまつおやこでん

幕末父子傳

桑名・柏崎を結ぶ家族日記

本間寛治

装画・題字　濱邊萬吉

幕末父子傳

桑名・柏崎を結ぶ家族日記

本間寛治

桑名藩・勘定人渡部勝之助の日記

幕末転勤傳

本間寛治

桑名藩から越後の国柏崎陣屋へ突然転勤命令が出た。渡部家三代の家族が別れ別れになる。転勤は時として平穏な家族生活を破壊する。それに時代の変わりはない。だが、この一家は約二百万字にのぼる「桑名日記」「柏崎日記」を交換し合い、家族の絆を支えていた。

四六・定価1000円（税別）

エフエー出版
定価1030円（本体1000円＋税30円）
ISBN4-900435-77-5 C0021 P1030E

ばくまつおやこでん

幕末父子傳

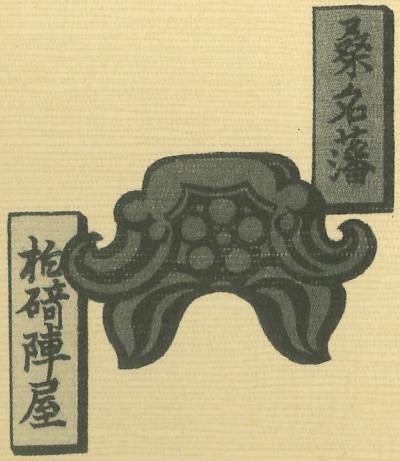
桑名・柏崎を結ぶ家族日記

本間寛治

幕末父子傳（ばくまつおやこでん）

桑名・柏崎を結ぶ家族日記

本間寛治



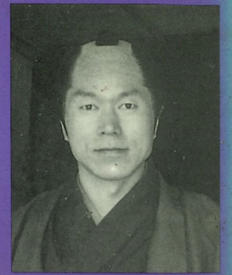
エフエー出版
定価1030円（本体1000円＋税30円）
ISBN4-900435-77-5 C0021 P1030E

NHK総合テレビで全国放映！

NHKスペシャル

突然の転勤命令によって別れ別れとなった父と子は、200万字に及ぶ家族日記を綴った。父から子へ、子から孫へ…。サラリーマンの喜びと悲しみが伝わってくる。

主演レポーター　平田　満



エフエー出版　定価1030円（本体1000円＋税30円）

総合テレビ全国放映！

NHKスペシャル

絶賛発売中！　夕刊フジ・週刊朝日などで紹介、大反響!!

幕末転勤傳

本間寛治

幕末の天保年間、桑名藩、久松松平家の家中に渡部平太夫・勝之助という下級武士の父子がいた。勝之助三十六歳の時、越後の国柏崎陣屋詰めへ、転勤命令が出た。渡部家の三代にわたる家族が別れ別れになる。転勤は時として平穏な家族生活を破壊する。それに時代の変わりはない。だが、この一家は約二百万字にのぼる「桑名日記」「柏崎日記」を十年間も交換し合い、家族の絆をしっかりと支えていた。

★日本図書館協会選定図書

ISBN4-900435-77-5 C0021 P1030E

幕末父子傳

愛読者カード

幕末父子傳

桑名・柏崎を結ぶ家族日記

●ご購読ありがとうございました。
この本のご意見・ご感想をお聞かせ下さい。

●出版ご希望のテーマと、著者がありましたら
お聞かせ下さい。

●この本を何によってお知りになりましたか。

A　新聞・雑誌の広告で（紙・誌名）
B　新聞・雑誌の書評で（紙・誌名）
C　テレビで　　D　ラジオで
E　書店で見て　　F　人にすすめられて
G　小社のＤＭで　　H　その他

●お申込書

（書名）　　冊

（書名）　　冊

小社の本は最寄りの書店でお求め下さい。品切れ等の場合には、書店又は直接小社あてご注文下さい。小社へのご注文の場合には、このハガキと代金＋送料300円（共に切手可）をお送り下さい。
1週間以内にお届けします。

郵便はがき

料金受取人払

名古屋中局
承認
2226

差出有効期間
平成2年9月
30日まで
（切手不要）

460-00

（受取人）

名古屋市中区栄1丁目
22-16（ミナミビル）

ユニコ出版

愛読者カード係行

ご住所　☎（　　）　－	
お名前（ふりがな） （年齢　　歳）	
職業または学校名（所属部署・専攻科名もお書き下さい。）	男・女
お買い求めの書店名 市町 区村　書店	小社から直接

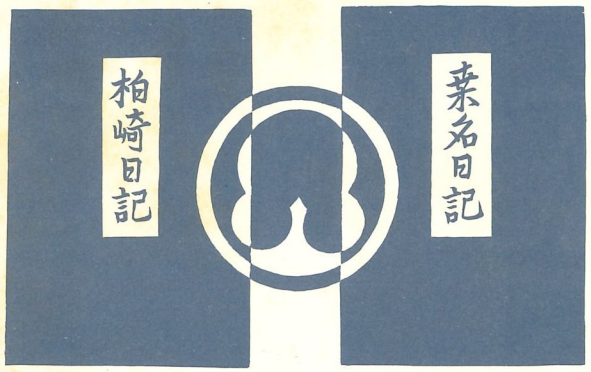
ご購入ありがとうございました。この愛読者カードは，皆さまと私どもを結ぶものとして保存させていただきます。皆さまのご意見をおうかがいいたし，さらに良書の出版に努めたいと思いますので，楷書ではっきりお書きください。

ばくまつおやこでん

幕末父子傳

桑名・柏崎を結ぶ家族日記

本間 寛治



エフエー出版

幕末父子傳／桑名・柏崎を結ぶ家族日記——目次

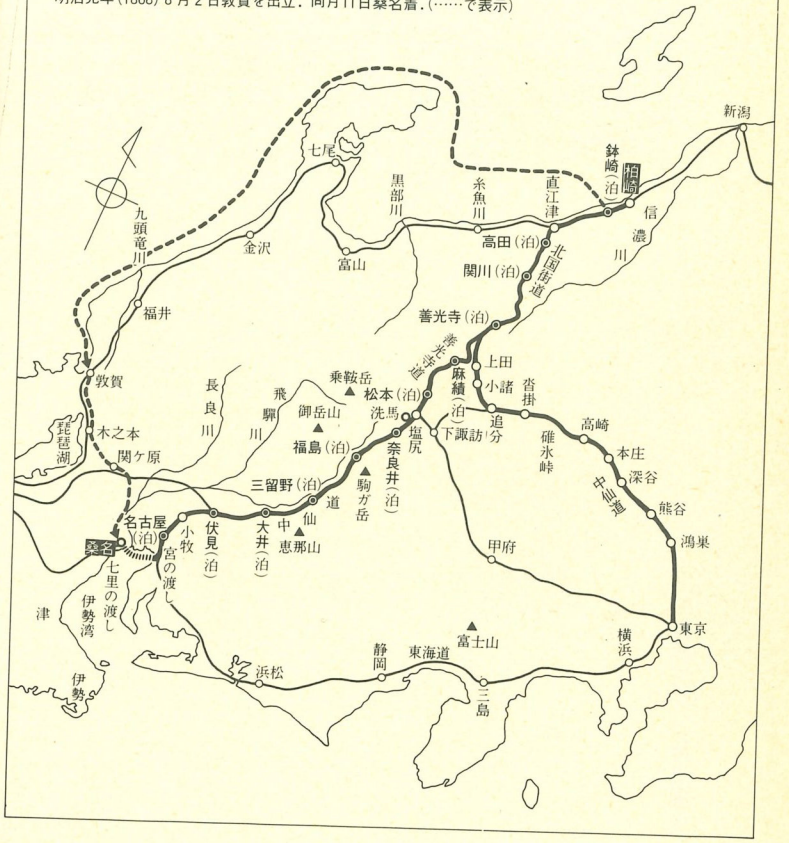
父の海 7
形見の日記 9
真吾の誕生 15
桑名の兄ちゃ(あん) 30
父のまなざし 48
渡部家の人々 60
藩邸門前の別れ 67
江戸から越後へ 74
内助の功 81
幕府終焉の兆し 91
陣屋の人々 96
子供たち 109
上下着の祝い 144
真吾 156
平太夫死す 177
十年目 187
維新の嵐 199
桑名へ帰る 217
その後の真吾 229
あとがき 235
参考文献 238
年表 240

装画・題字／濱邉萬吉

幕末父子傳／桑名・柏崎を結ぶ家族日記

父と子が歩いた道

父、渡部勝之助が歩いた柏崎陣屋への道（天保10年(1839) 5月30日桑名出立．6月12日柏崎着）と、江戸へ公務出張のため往復した道．(ー で表示)
子、真吾が歩いた父の郷里伊勢・桑名への道．柏崎から海路にて敦賀へ．明治元年(1868) 8月2日敦賀を出立．同月11日桑名着．(……で表示)



幕末の天保年間、伊勢の国桑名藩、久松松平家に渡部平太夫・勝之助という下級武士の父子がいた。勝之助三十六歳の時、藩の飛び領地があった越後の国柏崎の陣屋へ転勤命令が出た。勝之助は数えで四つになる長男を平太夫の元へ残し、越後へ旅立った。転勤は時として平穏な家族生活を破壊する。それに時代の変わりはない。だが、この一家は約二百万字にのぼる「桑名日記」「柏崎日記」を十年間も交換し合い、家族の絆をしっかりと支えていた。やがて時代は明治維新を迎える。渡部家も孫の真吾の時代になって……。

父の海

「父上、これが桑名の海なのですねぇ」

伊勢の海を初めて見た真吾は、越後・柏崎から、遙々、持参した祖父と父の形見の「日記」に語りかけた。

渡部真吾は、幕末の桑名藩士だった。

だが、国表の伊勢国桑名城下（現在の三重県桑名市）の土を踏んだのは、この時、明治元年（一八六八）八月十一日が初めてのことである。

真吾の父、勝之助（後の渡部平太夫政醇）が、天保十年（一八三九）正月のお役替えで、桑名城下から藩の飛び領地があった越後国柏崎（現在の新潟県柏崎市）へ転勤して二十九年が過ぎていた。

真吾は天保十三年（一八四二）四月十一日、この柏崎陣屋で、勝之助の二男として誕生した。

父、勝之助は、陣屋の勘定人を務める役人だった。

真吾は初めて「父の海」、伊勢湾を見たこの年は、二十六歳ということになる。

目の前の伊勢の海は、真吾がそれまで育った越後の海とは趣を一変した。
越後の海は深い群青色である。
天気が晴れれば晴れるほど、海の色は、濃くなった。
しかし、冬ともなれば鉛色の怒濤がすさまじい。
身の丈の何倍もある荒波が、「浪の花」を波頭高く噴き上げて、黒い岩肌を容赦なく打った。
それに比べる伊勢の海の、なんと穏やかなことか。
水平線は霞み、水面を夏の陽光がキラキラ走る。
足元の白い砂浜には、小さな波が静かに寄せては返した。
(この彼方が太平洋へ続くとは……)
真吾にはとても信じがたい海の顔である。
潮の香りを胸いっぱい吸い込んで、真吾がつぶやいた。
「父上の海へ、やっと戻って舞りました」

形見の日記

真吾の父、勝之助の「柏崎陣屋勘定人」という役目は、毎年の米の収穫量を調べ、領民の年貢高をはじくのが主な仕事だった。
その一方で、勝之助は陣屋の子弟の教育係と公事方をも兼ねた。
公事方とは、今でいう検事、裁判官の役目である。
勝之助は晩年、「代官格」に昇格した。
だが、「代官」とはいっても、陣屋内の席順は上から四番目。代官の上には、勘定奉行、勘定頭、郡代というお歴々がいたし、下には勘定人(公事方を含む)、郷手代、郷使、定加勢、同心——が続いた。
勘定奉行から上は、今でいう部長、重役クラスということになろうか。
従って「代官格」は、中間管理職、もしくは係の古参のまとめ役というところである。
しかし、「代官格」の勝之助の禄高は、九石三人扶持にすぎなかった。
地方に出ていればこそ、勝之助は「渡部さま」と敬称づきで領民、町人に呼ばれる身分ではあっ

たが、桑名藩の中では舞台格、つまり下級武士の一人である。
「渡部家」は、禄高でいえば下級武士に属したが、家柄は古く、勝之助で八代続いていた。
勝之助が桑名から柏崎陣屋へお役替えを命じられた時、養父の平太夫政通（まさみち）は藩のお米蔵に務めるまだ現役だった。
平太夫夫婦と勝之助夫婦は、同居こそしていなかったが、親子は毎日のように顔を合わせて暮らしていた。それが老夫婦と遠く離れて暮らすことになったのである。
この転勤は、文武に秀れた勝之助の登用ともいえたが、自ら望んでいた訳ではなかった。

平太夫も勝之助も、同じ藩中の「片山家」から出た人である。
片山家の二男だった平太夫が渡部家の養子に入り、男子が成人しなかったため、平太夫の兄の二男である勝之助も、請（こ）われて養子に入った。
片山家からは、藩校「立教館」の教授を務めた片山恒斎という学者も出ている。

勝之助の柏崎転勤は、一族にとっても一大事だった。
平太夫と勝之助は、苦肉の策をとった。
この年、数えで四歳になる勝之助の長男、鐐之助（りょう）（真吾の兄）を、桑名に残すことにしたのであ

る。
桑名の渡部家を守るため、鐐之助に平太夫の跡目を継がせるつもりだった。
柏崎には、妻のおきくと、真吾のすぐ上の姉になる生まれて間もない長女、おろくを伴い、勝之助は赴任した。
祖父母が初孫と桑名で暮らし、若夫婦は二番目以下の子供たちと柏崎で暮らすことになった訳で、実に変則的な家族の別離だった。
若夫婦の別居は、現代でこそ普通になったが、当時、武家の若夫婦が子供たちとだけで暮らすのは希（まれ）である。
勝之助一家は、柏崎陣屋でも珍しい「核家族」だった。

陣屋で懸命に役目を務めた勝之助は、たちまち同役の中心的な存在になった。
幼い真吾の目から見ても勝之助は実に仕事熱心な父親だった。
真吾はそんな父を秘かに誇りに思った。
しかし、柏崎での勝之助とおきくは、毎日、桑名表へ帰参する日を願って暮らしていた。
特に桑名を思うおきくの気持ちは尋常ではない。
縁もゆかりもない他国での暮らしは、おきくを随分とふさぎ込ませた。

そんな若夫婦の胸の内を察したのであろう。平太夫は、勝之助に毎日、「日記」を書くことを命じた。

平太夫もまた、遠く離れて暮らす長男を案じる若夫婦のために、毎日、日記を書いた。

平太夫の日記は、勝之助がひとまず単身で桑名を出立した天保十年二月二十四日から始まった。

勝之助の日記の最後は平太夫が六十四歳で没した嘉永元年（一八四八）の三月二十二日で終わる。

勝之助は柏崎で育つ真吾やおろくの成長ぶりと陣屋の暮らしを、平太夫は桑名城下の出来事と鐐之助の日常を、互いに筆まめに綴った。

双方の日記は、実に十年近く続き、桑名と柏崎の間を行き来する家中の人々に託してやり取りされた。日記が終わった時、柏崎で生まれた真吾は七つになっていた。

柏崎から桑名へ真吾が大事に持ち帰った祖父と父の形見がこの日記である。

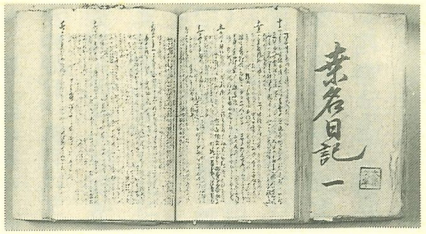
真吾は、祖父平太夫の日記に「桑名日記」、父勝之助の日記に「柏崎日記」と名付けて、大事に保存してきた。

真吾はこの日記を何度、読み返したことだろうか。

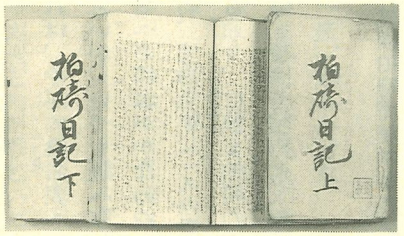
自分の成長の記録でもある「柏崎日記」には、一層深い愛着があった。

柏崎でこの日記を読むたびに、真吾は思った。

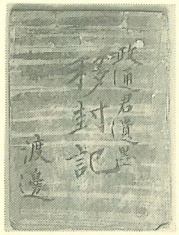
日　記



父・渡部平太夫の「桑名日記」（伊東春夫氏蔵）

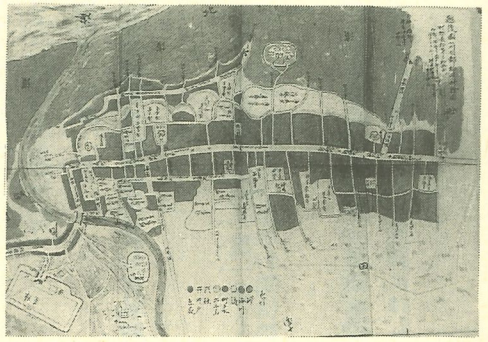


子・渡部勝之助の「柏崎日記」（伊東春夫氏蔵）



孫・真吾がまとめた
祖父平太夫の「移封記」
（不破正人氏蔵）

勝之助の「旅日記」
（不破正人氏蔵）



「柏崎町絵図」勝之助が赴任した陣が左隅に見える。
（不破正人氏蔵）

（一度は桑名表を訪ねてみたいものだ）

父の日記からは、

「役目をきちんと務めておれば、やがて桑名表へ帰参の日は必ずくる」

そんなせつない父や母の思いが、いつも読み取れた。

しかし、その父も母も桑名への帰参がかなわぬまま、柏崎で病没した。

父、勝之助の死は、四年前、元治元年（一八六四）十二月十二日のことだった。

その翌日、真吾は父の遺言通り、亡骸を柏崎の古刹「極楽寺」に葬った。

翌慶応元年（一八六五）六月、極楽寺境内に父の墓を建立した真吾は、万感の思いを込めて碑文にこう刻んだ。

『天保十年奉　命掌聴訴於越後柏崎而兼学事其聴訴・凡廿三年矣時靡有大刑不戮一民……』

「不戮一民」とは――。

「父は天保十年、命を受けて柏崎で教育係と公事方を兼ね、約二十三年にわたって訴えや事件を裁いた。時として死罪に当たるような大きな事件もあったが、父は領民を一人も死罪にはしなかった」

という意味である。

真吾は、この四文字に父、勝之助の生きざまをそのまま込めたと思っている。

それから三年。時代は大きく転じた。

父、勝之助が死ぬまで恋しがった桑名の海を目の前にして、真吾の頭中では柏崎陣屋での半生が走馬灯のように駆け巡った。

わずか四か月前、柏崎陣屋をも襲った明治維新の嵐も、この穏やかな海の前では夢幻の如く真吾には思えた。

真吾は形見の日記にもう一度、話しかけた。

「父上、やっと帰参がかないましたよ。父上が語っておられた桑名の海は、ほんとうに穏やかな海ですねぇ」

真吾の誕生

「桑名を出立の折になぁ。平太夫どのが暇乞いに参ってくれた。お子の鐐之助も一緒じゃった」

天保十三年（一八四二）四月十九日夜のことである。

勝之助は、その日、柏崎陣屋に着いたばかりの品川十四郎宅で、懐かしい長男、鐐之助の消息を聞いた。

着任の歓びに品川宅に出向いた勝之助は、勧められるままに祝いの小宴に招きあげられ、少し酒をご馳走になった。

品川は、先客に桑名話を一くさり語った後で、

「舅どのもお子も達者でのう。お子は賢く育っておったぞ」

勝之助の顔を見やり上機嫌で伝えてくれた。

品川十四郎は、この度のお役替えで、桑名から柏崎陣屋詰めを命じられた一人だった。

陣屋での役目は、勝之助と同じ勘定人である。

品川は、家中でも「切れ者」との評判をとる人物。

陣屋でも着任前から、

「末は代官」

ともうわさされたほどで、今回の人事も一般には「意外なお役替え」と受け止められた。

だが、勝之助には品川のような人物が相棒になるのは、大きな喜びだった。

そんな理由で、品川の長屋の修理やその他、迎える準備を、勝之助は役目柄ばかりではなく、すべて念入りにやっておいたのである。

勝之助が、桑名に残してきた長男、鐐之助の様子を、同僚の口から直に聞いたのは久しぶりのことだ。

勝之助が柏崎陣屋詰めを命じられたのは天保十年のことだから、親子が離れ離れになってもう三年になる。

その間、鐐之助の成長ぶりは舅の平太夫から書き送られてくる「桑名日記」で、手にとるようにわかってはいた。

しかし、同僚の目を通して語られるわが子の消息を聞くことは、特別の感慨を勝之助に与えた。

柏崎に連れてきた長女のおろくが生まれた時、

「お乳、ぼうぼう」

と家の中を駆け回って、みなを困らせた鐐之助のあどけない顔が思い出されてたまらなかった。

翌十日朝。

「品川どのの話では、親父どのも鐐こ(鐐之助のこと)も元気でおるとのことだった。まずは安堵するがよい」

「ほんに。よろしゅうございます」

布団に横たわるおきくの側に座り、腰や背中をさすってやりながら勝之助は妻のおきくに語り

かけた。

この時、おきくは臨月だった。

今日、明日にも三番目の子が生まれるというので、勝之助宅にはおろくの子守娘や手伝いの女衆が何人か、泊まり込んでいた。

勝之助は前夜の、品川宅での着任祝いも四つ（午後十時）すぎにはそっと抜け出し、一晩中、おきくに付き添っていたのである。

日付けが変わって十一日の九つ（午前零時）ごろ、おきくに一度、陣痛がきた。

「すわっ」

と手伝いの女衆が意気込んだが、この時の陣痛は間もなく治まった。

「旦那さま。只今（ただいま）生まれないようでは明朝でございましょう」

柏崎の町から出向いて来た取り上げばばがいうので、勝之助は手伝いの女衆には一眠りしてもらうことにした。

今度の子は、勝之助が四十、おきく二十七歳になる年の子である。

一回り以上若い妻との間に、鐐之助とおろくという二人の子がいる勝之助だったが、柏崎では初めてのお産とあって不安も大きい。

（こんな時、母上らが居て下されば、大助かりなのだが……）

勝之助は気骨が折れた。

転勤族には、

「遠くの親類より近くの他人」

という言葉ほど身に染み入る言葉はない。

勝之助の今の心境がまさにそうだった。

このじぶんの桑名と柏崎は、男の足で約二週間の旅である。

おきくにしても、おいそれと実家の母親に来てもらうわけにはいかなかった。

二番目の子のおろくが桑名で生まれた時、それは賑やかなものだった。

桑名城下は瀬古庚申堂北の侍長屋の一角を占める平太夫宅には、平太夫の妻、おますをはじめ、おきくの母親らが詰めかけ、何かと世話を焼いてくれた。

柏崎に転勤して三年目。友人、知人も増えた勝之助夫婦だったが、転勤族はこんな時、身内と離れて遠国で暮らす辛さをしみじみ味わう。

そんな勝之助夫婦を温かく見守り、いつも助けてくれるのが、向かいに住む竹内のおばさだっ

た。

おばさは、勝之助の長女、おろくより二つ、三つ年上のお民という娘を預っていた、おろくもお民によくなついて始終、行き来していた。

おばさには、運八郎と悠之助という二人の息子もあった。

兄の運八郎は、勝之助の下役の郷手代を務め、れっきとした陣屋の侍である。

弟の悠之助は、まだ無役で、江戸へ奉公に出たり、柏崎で暮らしたり、気ままな二男坊暮らしを続けていた。

勝之助は二人を、

「運公（うんこう）」

「悠公（ゆうこう）」

と呼んで親しくつき合っていた。だが、運八郎には武士としてのキリリッと締まったところがなく、人の良いのが長所でもあり、短所でもあった。

運八郎は、その性格も一因したのか、後に最初の妻おみよと離縁することになる。

しかし、運八郎と悠之助兄弟は、おろくをとても可愛がった。

勝之助夫婦にとってもこの二人は兄弟同様で、おばさは柏崎での親代わりでもあった。

この年、天保十三年の四月十一日。

柏崎の空は、全くの上天気になった。

四月といっても陰暦のことである。桑名では春たけなわの候だが、ここ柏崎ではどの家でもまだこたつを仕舞うわけにはいかない。

明け方、おきくに再び陣痛が来た。

「おきく、生まれそうか」

勝之助は、苦しそうに脂汗を浮かべるおきくを見て、あわてて取り上げばばを起こした。

「旦那さん。まだまだだ。——んだが間近のようだし、今のうち湯づけでも食べさした方がいいのう」

「それに薬も飲ませておくか」

ばばの見立てでは、出産にはまだ間がありそうだ。

しかし、勝之助は少しずつ不安が高まった。

と、いうのも、おきくにはお産の後、「たらつき」といって、一時、気を失うくせがあったからだ。

勝之助は、その時のための薬も用意していた。

なかなか生まれる徴候が現われないおきくに、勝之助の心配がいよいよ募った。

（これは難産になるやも知れんな）
「まだ生まれそうもないかの。こんな時は人参を煎じて飲ませたらいいぜぇ」
そこへお向かいの竹内のおばさがわざわざ人参を持参してくれた。
おばさは手早く人参を煎じ、おきくに飲ませる。
間もなくおきくの陣痛が強まった。
おきくは、ようやく出産の時を迎えた。
五つ半（午前九時）すぎ、生まれた子は、男の子だった。
「おめでとうございます。男の子ですぞ」
隣室の勝之助に伝える取り上げばばの声がはずんだ。
勝之助にも思いがけない男子出生である。
『みなみな大安堵。其の上、女子の積りに御座候所、男子に御座候て、別ても大悦び仕り候』
（天保13・4・11＝柏崎日記）
そのうち近所のカミさん連中が祝いに集まりだした。そこへ外で遊んでいたおろくが戻った。
おろくは家の中に入るや、
「ワァーッ」と泣き出した。

大騒ぎのところへ何も知らず、突然、舞い込んだものだから、おろくは気が動転してしまったのである。
「おとっさぁ」
勝之助の姿を見つけるとおろくがすがりついた。
おろくは泣きじゃくってなかなか治まらない。
「おろくちゃ。姉ちゃになったんだぜぇ」
「もう泣くな。おろくや」
近所のカミさん連中が、あれやこれやなだめにかかった。
おろくはしばらくしゃくりあげていたが、間もなく機嫌を取り戻した。ところが今度はおきくの唇の色が突然、変わった。
「おきくちゃ。どうした」
「どこが苦しいんだ?」
取り上げばばも、竹内のおばさも、おきくの枕元に駆けつけ、必死に声をかけた。
おきくの額には脂汗が浮き出している。
息遣いも荒くなって、その苦しがりようは尋常ではない。
勝之助が最も心配していた「たらつき」の発作だった。

「おきく、これ、しっかりせい」
勝之助は薬を飲ませ、酢に火を入れてかがせた。たらつきによくきくというおまじないだった。
「誰か、医者を呼んでもらえぬか」
「あい」
手伝いの女衆の一人が、たすきをはずしながら駆け出して行く。
柏崎の陣屋は、大窪（現在・柏崎市大久保）といわれる台地にあって、柏崎の町とは鵜川という川をはさんで一・五キロほど離れている。
医者は皆、柏崎の町に住んでおり、陣屋の役人とても、迎えを出さねばならなかった。
この時代、柏崎には町医者が多数いて、毎月一回、今でいう医師会のような会合を開いていたことが、柏崎町会所の「御用留」に記録されている。

汗をふきふき駆け付けた医者は、おきくの脈をとるや丸薬を飲ませた。
しばらくすると、おきくの気も戻った様子で、医者は、
「もう、お気遣いもございません」
と、おきくの手を布団に戻した。医者の言葉に、勝之助もホッと胸をなでおろし、
（ことの他、軽くて済んだ……）

と、ようやく息をついた。そこへ、
「おめでとうございます。栗本からの祝いです」
同役の栗本作助から、二尺五寸もある大鯛が届いた。
「なんとまぁ、みごとな鯛じゃ」
一堂、目を見張るほどの大鯛である。
勝之助はこの大鯛を気前よく潮煮にして酒を出し、医者や手伝いの者に振る舞った。
「運公、済まぬが役所へ届けを頼む」
「よしきた」
運八郎が快く飛び出して行った。
この当時、陣屋の武士はお産があると役所に出仕できなかった。
お産には汚れがある、という考え方が通っており、夫は改めて出仕願を差し出し、上司の許可を待って役目に戻る習わしだった。
勝之助が運八郎に出生届を頼んだのも、そのためである。

合い間に手伝いの女衆が、赤ん坊に産湯をつかわせ、座敷の掃除を済ませていた。
勝之助は座敷の掃除が終わったのを見計らって、同役、近所の中でも心やすい友人に男子誕生

の知らせを回した。
このじぶん、武家には男子の出生ほどの慶事はなかった。
知らせを回したのはごく一部のはずだった。だが、昼ごろには陣屋中の人たちが次々、歓びに訪れる。
勝之助の長屋は、たちまち人でごった返すはめになった。
「なんとまぁ、目の大きな子だこと」
「鼻筋が通って、なかなかの男前だの」
「桑名の兄ちゃにそっくりではないか」
祝い客の褒め言葉は、おきくをもすっかり勇気づけ、喜ばせた。
「おろく、ねんねを抱いてみるか」
「あい」
しばらくグズグズしていたおろくも、赤ん坊を抱いてみて急に可愛くなったのか、ニコニコ顔が戻った。ちょっと遊びに出ては、
「ねんね抱く」
と戻ってきて赤ん坊を離さない。
おきくには見向きもしないおろくを、勝之助は苦笑いしながら眺めた。

そうこうしている間にも歓び客は絶え間なく続いた。
歓び客は家族そろって次々にやって来るので、手伝いの女衆も息を抜く間もない。
そんな祝い客の応対を、一手に引き受けるのもお向かいの竹内のおばさの役だった。
「おばさ、誠に申し訳ない」
「なんの、お産のことは女房どのが誠のご功労者。それに比べればこんなことはなんでもないぜ」
「おかげで夫婦とも誠に心強い思いをしております」
勝之助はきまじめに頭を下げるばかりである。

六日後、勝之助宅でお七夜の祝宴があった。
早朝、勝之助は役所の手伝いの市平に頼んで心やすい者たちへ使いを回した。
「市平、すまんが肴場へ魚を見に行ってくれぬか。あっ、その後でもよいから祝いの触れも頼む」
「何刻にお集まり願いましょうや」
「八つ（午後二時）には膳を出したいものじゃ」
「そんじゃぁ、そのじぶんにお揃い願うということで……」
「そうじゃのう。頼む」

手伝いには、以前、おろくの子守奉公をしたことがあるおゆきと、近所の大竹の娘おとしが朝早くから来てくれた。

いつものようにお向かいのおばさと運八郎の女房、おみよも手伝いに来てくれ、台所をおばさにまかせ、勝之助はいったん役所に出た。

この日の勝之助の帰宅は正午前だった。

勝之助は赤ん坊の月代を剃り、湯をつかわせた後、赤ん坊に「真吾」と命名した。

「真吾さまですか。立派な名前だこと。ねぇ、おみよ」

「ほんに、ほんに」

竹内のおばさとおみよも気に入った様子である。

勝之助は真吾の名を、座敷の壁に貼り出しておいた。

この日の客は、栗本、相沢金太夫、広田領助、吉田八十右ェ門、藤岡、小林、荒井といった同役の面々に、江崎のおたち、大竹のおとしにおゆきら娘たち、それにお向かいの三人と役所の手伝いの市平、角平が揃った。

『座敷の膳は小憎（真吾のこと）、ばば（取り上げばば）とも拾ぜん（十膳）なり。酒の肴は、鯛の浜焼き、平目の切身にふき、大平に竹の子、ふき、かまぼこ葛引、うどのあい(え)もの、青な(菜)、切干、したしもの。膳部は平にわらひ(び)、平目。汁は青なにつミ入。皿うどの鱠、平目入香のもの。誠に粗末の事也』（天保13・4・17＝柏崎日記）

月が変わって五月一日、柏崎はよく晴れた。

だが、風があり、初夏にしては肌寒い一日になった。

勝之助は役所に出る前、真吾を家の前に捨てた。

すかさず物陰からお向かいの竹内運八郎が飛び出し真吾を拾い上げた。

「おッ、捨て子じゃ、捨て子じゃ。子を拾ったぞ」

運八郎は真吾を抱いてそのまま自分の家に入って行った。

真吾は、勝之助が数えで四十一歳の子である。

このじぶん、四十二歳の二つ子は親に災いをもたらすといわれていた。

真吾も勝之助が数えで四十二歳の時、二つになる。

桑名市在住の民俗学者堀田吉雄氏によると、親が四十二歳の時に二歳になる子は、生まれた時、いったん捨て子して誰かに拾ってもらい、親子の災いを避けるという風習が明治まであった。（「桑

名日記民俗抄」桑名市教育委員会発行・桑名の民俗）

天保年間の桑名では、こんな場合、親が年越しを早めて、一つ余計に年を取る風習があった。何よりもこのじぶんには、「捨て子はよく育ち、家の者も幸せになる」という考え方がある。勝之助もこのため、真吾をいったん捨て、運八郎に拾ってもらったのである。

このおまじないがきいたわけでもなかったが、五月十六日、勝之助はそれまでの留方から、公事方を命じられた。

公事方とは、罪人を取り調べ、訴訟事を裁く今でいえば検察官と裁判官を兼ねた仕事である。勝之助は、柏崎陣屋の勘定人という身分だったが、公事方は勘定人の中でも上席と見られていた。

家中でも「切れ者」との評判をとる品川十四郎が同じ係で、勝之助は異例の登用だった。

桑名の兄ちゃ

真吾出生の知らせが桑名八幡瀬古庚申堂北に住む祖父の平太夫のもとに届いたのは、五月に入り、二日のことだった。

真吾が生まれた時、柏崎陣屋に滞在していた家中の者が、桑名に戻り、知らせてくれたのである。

翌三日、平太夫は御蔵が引けた後、おきくの実家である新屋敷の佐藤代右衛門宅へ、三人目の出産を知らせに行った。

「三番目は男の子だったそうでござる」

「それはまぁ。よかった。よかった」

佐藤家では代右衛門の妻が大喜びで平太夫を迎えた。

佐藤家は、おきくの実家だけに鐐之助が毎日のように顔を出していた。

鐐之助は、代右衛門の妻を「新屋敷のおばばさ」と慕い、やってくるといつもわがもの顔に振る舞った。

「して、名前はなんとつけなさった？」

「真吾とつけたそうでござる」

「真吾とは、また、いい名前ですこと。生まれたのはいつの日のことでしたか」

「先月の十一日のようで」

四月十一日の桑名城下は朝から曇りだった。

『八ッ半（午後三時）頃より漸（しばらくちと）些ひまになり、おばばもつぎものしているで、日記を読む。おろくの事くわしくあり、いかさまよくベロがまわりおかしき事あり。おゆき（柏崎でおろくの子守娘だった）、聟（むこ）をとり、なぶられ（からかわれ）て顔あからめ、年に引（ひき）くらべては成程（なるほど）めずらしきおなごなり。おゆき親子ともにろくをかわゆがりよし。かげながらおばばもよろしく礼をいうてたまわるべし』（天保13・4・11＝桑名日記）

平太夫が新屋敷の佐藤家から帰宅すると、柏崎からまた手紙と紙包みが届いていた。

「江川の家に勤めておった者が届けておくれなさった。二日も続けて手紙が届くなんて、これまでなかったことですよ」

妻のおますは上機嫌で、いそいそと紙包みを開きにかかった。

「まあ。なんてみごとなワラビだこと。ほれ、去年のワラビよりやわらかそうじゃ」

大喜びのおますにいわれて、平太夫も手にとってみるとなるほどやわらかい。手紙を読みながら、

「親子四人、変わりなく、おきくのたらつきも軽く済んだようじゃ。まあ、大安心じゃのう」

平太夫はおますにそうは言ったものの、一つ、心配事があった。

それは子供たちの疱瘡（ほうそう）（天然痘）だった。

この時代の疱瘡は、まだ死病である。

この天保十三年は桑名城下でも大流行し、平太夫の周りでも何人かの子供が生命を落としていた。

平太夫はまだ疱瘡にかかっていないおろくを心配して、三月に送った手紙に、城下で聞いた疱瘡の洗い薬の処方箋（せん）も書き入れておいた。

『二十六日の書落とし。先日御状参り候節、おきく封を解き、封紙を片付け置き候ところ、その中より御書付け有り。何やらんと存じ拝見仕（つかまつ）り候えば、疱瘡の洗薬の法書なり。是（これ）は能（よき）もの御遣（おつかわ）し下され候とて、それより所々へも写し、貸し遣（つかわ）し申し候』（天保13・3・27＝柏崎日記）

平太夫のこの洗い薬の処方箋は、柏崎の陣屋内ばかりでなく、町方でも大いに役立っていた。

四月二十五日のことだ。

柏崎陣屋の勝之助宅へ柳橋のおばば（子守奉公にきていたおゆきの母）が真吾の出産祝いにやってきて、ちょうど居合わせた勝之助に得意顔で尋ねた。

「旦那さま。疱瘡の洗い薬はご存知でしょうかの。御上（おかみ）よりの御触れがございましたが、おろくちゃはもうお洗いなされましたか」

「それは桑名の本宅よりわが家へ遣わされたのじゃ。それを御上が御触れにして出したのだぞ」
「あれ、まぁ」
柳橋のおばばは目を白黒させて驚いた。
「さすがうちの旦那さまだのう。ひとところで洗い薬をお使いになるばかりではなく、町方にまで教えて下さるとは……。町方ではもう大変な評判で、どんなにありがたがっておることやら……」
勝之助には柳橋のおばばが戻ってから、近所の者へ吹聴する姿が見えるようで、思わず苦笑した。

その洗い薬の効能があったのか、柏崎のおろくも真吾も疱瘡はまだだった。
だが、桑名では十月に入っても猛威をふるっていた。
『土瓶へ湯をあけ、表の掃除に出る。その内おばばも鐐(鐐之助)も起きる。鐐、目が回って歩かれんと言う故、背中を押さえて手水(便所)前に連れて行くと黄水を吐く。夫より茶の様なる小用通す。急ぎこたつを拵うて寝せ、一角丸五粒用い、さつまいも食べぬか、とおなか持って来てやる。一口食うていや、と言う。そんならおまんま食べるかと問えば、給べようと言う故、持ってきて給べさせれども一ぜん給べていやじゃ、と言う。是迄熱あっても寝て居た事なし。此度はよく〳〵の事にて大弱り。もしや疱瘡になろうかと甚心配なり』(天保13・10・12＝桑名日記)

「おとっさが、せっかく柏崎から届けてくれた菓子じゃ。鐐こは食べないのかえ」
天保十三年十月十二日、この日は、朝からズーッと鐐之助に付き通しだった平太夫が、声をかけた。
柏崎の勝之助夫婦は、もちろん鐐之助が疱瘡の前兆であることを知る由もない。久しぶりに桑名へ送り届けた手紙と菓子が、鐐之助にちょうどよい見舞いになるとは夢にも思わなかった。
だが、鐐之助は、父親がはるばる越後から届けてくれた菓子も、コンペイトーを二粒ばかり食べただけだった。
(熱さえなければ大喜びですぐにむしゃむしゃ食べるものを……)
平太夫は、こたつに寝かせた孫の額にソーッと手を当ててみた。
熱い。
ついさっき帰った医者の見立ては、
「八、九分は御疱瘡の熱と見えます」

とのことだった。
（これは間違いないな）
平太夫は覚悟を決めた。

七つ（午後四時）じぶんに、新屋敷の佐藤の長男、留五郎に嫁に行った平太夫の娘おせんから、ぼたもちが届いた。
「鐐こや、ほれ、ぼたもちがきたぞ。食べなさえ」
「あい……」
だるそうに起き上がった鐐之助は、少し食欲を見せたのだが、食べたのは小指の頭ほどを二口。枕元に飾って置いた柏崎からの菓子には、もう見向きもしなかった。
「うんこが出たえ」
「そうか、そうか、おじいさんが連れて行ってやろう」
「あい」
「どれ、おんぶしてやろかいのう。……おっと。重たいの鐐こは……」
「おじいさ、うんこはええ。もうよくなってしっこばっかり出そうだ」
鐐之助は、だいぶ長いこと小便をしていたが、寝床へ連れ戻ってもぐったりして顔を布団につ

けている。
「鐐こ、どうした？」
「おじいさ、目が回ってならん」
「おまんまを食べぬからだ。食べるがええ」
「おまんまも目が回って食べられん」
「そんならおじいさが食べさせてやろう。目ふさいで居て食べやれ」
「あい」
茶漬けに溜まり醤油をちょっと落としてやり、平太夫が食べさすと鐐之助は軽く一ぜんを食べた。
（これなら少しは大丈夫だな）
平太夫は少し安心して、うつらうつらしている鐐之助の枕元に座り込んだ。
暮れ六つ（午後六時）の鐘が、走井山のあたりから聞こえてきた。
「おじいさと寝よう。おじいさ寝なぇ」
熱のせいなのだろう。鐐之助はいつもよりずいぶん早く寝ようという。
「よしよし」
平太夫は抱いて寝たが、鐐之助の体はいよいよ熱い。

（これはならん）

医者が置いていった煎じ薬を飲ませ、四つ半（午後十一時）すぎにも救命丸を二粒、飲ませた。

翌十月十三日、桑名の空は上天気だが、鐐之助の熱はなかなか下がらなかった。

「おじいさ、しっこが出たえ」

明け六つ（午前六時）ごろ、鐐之助が一緒に寝ていた平太夫を揺り起こした。

鐐之助は、この朝も小便の量が多い。

平太夫は「薬のせいだろう」と思っていたが、後になって考えてみるとこれが鐐之助の疱瘡にはどうも幸いしたようだった。

「おじいさはもう起きなぇ。おれは一人で寝て居る」

（なんと、こしゃくなやつめ）

平太夫は、意外にしっかりした口をきく孫に、思わず苦笑いした。

「一人で寝られるかの。そんじゃ、おじいさは起きるぞ」

「あい。おれは一人で寝る」

平太夫の物音で、妻のおますも起き出した。

鐐之助は、近ごろ、このおますとは一緒に寝ない。

三年前、勝之助とおきくが桑名から柏崎に転勤してから、鐐之助の面倒は一切合切、おますが見た。

今日は相撲だ、明日は神楽だ、祭りだと、おますは鐐之助をよく連れ出した。

それですっかり「おばあちゃん子」になってしまった鐐之助を見て、当時の平太夫は、

「このごろ、ばばに甘えくさって困る」

などと日記に書いて柏崎へ送ったものだ。

数え年で七つにもなった近ごろでは、男親を必要とするのだろう。おますにはあまりくっつかない。

「鐐こ、今晩はおばばと寝なぇ」

たまに平太夫が声をかけても、

「嫌じゃ」

と、鐐之助は首を振る。

「どうしてじゃ」と問えば、

「おばばはいやらしい。くさい」

このごろでは、朝方、こたつに火を入れるまでの間、おますの寝床に入って来ることがあっても、平太夫が、

「鐐こ、こたつに火が入ったぞ」
と声をかければ、
「あい」
とおますの寝床を飛び出して、こたつに丸くなるのだった。
毎日、肌におぶって町中を歩き回っていたじぶんが、おますにはたまらなくなつかしい。
「おばばとなかなか一緒に寝ない鐐こにも困ったものだぞ」
平太夫もいつの間にか、こぼすようになった。
「そういえば、柏崎の日記を読みますと、おろくもおとっさとはなかなか一緒には寝ないようですねぇ」
「まるで鐐こととおばばのようだ」
老夫婦が慰め合った。

鐐之助の熱は、平太夫が登城する時刻が近くなっても下がらなかった。
だが、見た目には前日よりも元気な様子で、朝は茶を飲み、ミカン半分と焼きたてのおにぎりを一個食べた。
「鐐こ。行って参るぞ」

平太夫は五つ（午前八時）すぎ、出勤した。

この日、鐐之助は一日中、床の中でおとなしくしていた。しかし、
「鐐こ、少し寝なぇ」
と、おますが言っても目は開けていた。
夕食のじぶんになっても鐐之助は床から出ず、夕食は床に腹ばいになって肘をつきながら一人で食べた。
ところが半分も食べない。
「もう、ええ」
途中で投げ出しかけた鐐之助を、平太夫夫婦や同居している平太夫の娘たちが寄り集まって褒めた。
「鐐こはいい子じゃ」
「これはえらい食べるは、食べるは……」
「それでは明日はよくなるはずじゃ」
その効果があってか、鐐之助はすっかりおだてられて一ぜん、食べてしまった。
五つ（午後八時）前、

「おじいさ、寝なんかぇ。寝なぇ、寝なぇ」
この夜も平太夫に一緒に寝ようと言い出した。
「よし、よし」
平太夫は抱いて寝た。が、鐐之助の体はまだ熱い。
鐐之助の熱は、夜半まで上がり続け、それから明け方に向かって少しずつ下がり始めた。
『小用をやり、蠟燭の火にて顔手足を見候処、少しずつ疱瘡らしく赤く見える。(略)鐐之助、熱さめて候故、さつまいもの大きいのをおまゝの上へあげてくんなぇと言う故、のせておく。間もなくもうよかろう〳〵とさいそく也。漸く能く蒸し候に付、茶をあたゝめ呑せて直にさつまいもをやる。漸く一切半程食べてやめるゆえ、あの様にたべる〳〵と言ってたって、それ斗給べて是は埒のあかぬ事だと言えば、どうしてそんなに給られようさ、こんなに御皿に山もりだもの抔と言訳するやうにげんき出る』(天保13・10・14＝桑名日記)
平太夫が鐐之助の異常に気付いて三日目。熱はようやく治まった。
翌四日目に応診にきた医者も、
「もはやこれより熱は出ますまい。お軽くてお幸せでございます」
といって帰った。

鐐之助は、といえば、食欲もあり、外へ出たがった。
「風に吹かれるとナ。疱瘡が引っ込んで死んでしまうぞ」
平太夫は、なんとかだましだまし、外には出さなかった。
鐐之助の疱瘡の発疹の盛りは、それから十日あまりしてからだった。
平太夫は鐐之助の発疹の出具合いを丹念に調べて、柏崎へ書き送っている。
『疱瘡出方、凡けし(頭の真ん中の意味)の中に四つ五つ、項に五十斗、額に四十五、六。鼻の真ん中に二つ、小鼻に一つ、口の回(周)りに十斗、眼の上に三つ四つずつ、頬に五つ六つ、えりに四つ五つ、右の目の玉白眼に一つ、腮に一つ、左の乳の上に一つ、肩より背中尻っぺた迄三十斗、両腕より指迄四、五十ずつ、掌(手)に二つ、指のはらに三つ斗。鐐言う。どうしてこんな所へまめが出来たろうと言うゆえ、まめではなえ、疱瘡がうんだのだと言えば、フウンと言って見ている。小腹に二つ三つ、股より足の先迄左右とも四、五十粒ずつ、足の裏に二つ三つ、先凡右の通り也』(天保13・10・26＝桑名日記)
これでも鐐之助の疱瘡は軽い方だ、というので、平太夫宅には佐藤のおばさをはじめ、近所や親類から毎日のように見舞い客がやってきた。
鐐之助はかゆみを堪えて疱瘡がカサブタになるのを待った。

月が変わって十一月の桑名城下には、「珍しき事」が続いた。

武家では、縁づいたばかりの若い夫婦の離縁が、四、五件たて続けにあった。みな女の方が悪いというわさである。

町家では、大変な美人の妻を持ったかざり職人の夫婦が、口づけをしているうち互いに舌を食い切ろうとして二人とも重なりあって気絶した、などという話が、平太夫の勤める御蔵までも聞こえてきた。

十一月とはいえ、春のような上天気が続く桑名城下での珍事だった。

十一月十五日。鐐之助の全快祝いが行われた。

平太夫夫婦は赤飯を炊き、朝から近所や一色町、新屋敷の親類縁者、それに医者まで都合三十六軒に配り、午後からは親類縁者を招いて膳を出した。

新屋敷のおじいさとおばばさ、浅野のおじいさ、平太夫の実家新地・片山家の均平、稲塚四郎兵衛、郡のかか衆、新屋敷の留五郎らが客である。

『折あしく肴（魚）少なく鰡（鯔）二本差身（刺し身）とし、中平め（ヒラメ）こまかに切り大平のっぺいに入れる。三枚は鉢肴（はちざかな）にする。（略）鮒（ふな）のこんぶ巻一鉢、ならあい、おろし大根にえび、どじょう汁、右の通りの肴也』（天保13・11・15＝桑名日記）

宴は五つ（午後八時）前に一度済み、それからは若い者が集まった。

平太夫には、おこん、おかね、おせん、おなかという娘四人がおり、若い男女がよく集まった。

侍長屋の若衆宿といったところである。

この時も鋳八郎、五蔵、武八、官蔵、平治、紋兵衛に留五郎、郡のおせんという若者たちが集まった。

皆、鐐之助の面倒をよく見てくれる者たちだった。

平太夫は、昼の客の残り酒と料理を出す。

座はたちまち賑やかになって、昼から居残った郡のかか衆は歌い出すやら、若いものは俄（にわか）狂言（芝居）の真似などを出して大騒ぎである。

若者の宴は九つ半（午前一時）すぎまで続いた。

留五郎などは親類という気もあって朝方まで酔いつぶれていた。

平太夫は鐐之助の疱瘡がこんなに軽く済むとは夢にも思わなかった。

この日の大盤振る舞いは、平太夫の芯（しん）からの嬉しさの表われだった。

だが、組内ではこの日も清水の末っ子が疱瘡で死んでいた。

天保十三年は疱瘡が桑名ばかりではなく、越後、柏崎でも流行した。
この年、柏崎からの最後の日記が届いたのは、暮れも迫った十二月二十二日である。
この日の桑名は終日大吹雪だった。
朝方、裸でしっこに行った鐐之助は、縁側の雨戸を開けて、
「やっ、大雪だ、大雪だ」
踊り上がって喜んだ。
しっこも縁側から済ませ、おばばの布団に珍しくニコニコ顔でもぐり込んだ。

御蔵に出た平太夫のもとに、昼すぎ、柏崎からの日記が届いた。
夕刻、御蔵から帰宅した平太夫は、
「おばば、柏崎より手紙が届いたぞえ」
「それはそれは、なんと書いてあります」
「おろくも真吾も疱瘡にかかったようだが、どうやら二人とも軽く済んだと申し越しているわい」
「まあ。よろしゅうございました。大安堵ですわ」

こたつに丸くなっていた鐐之助が、平太夫夫婦の話に口をはさむ。
「おとっさ、おかっさはどんな顔だろうねぇ」
「鐐は忘れたか」
「忘れた。おろくも真吾もどんな顔だか、見たいなぁ」
「そんなら越後へ行くがええ」
「だれが！　おじいさもおばばもおば(平太夫の娘たち)も行くなら行くぅ。おればかり誰が行くもんだ」
「殿さまが越後へおとっさをやりなさった。鐐はおとっさの子だから行くがええ」
「なにしニィ。おじいさの子だ。おばもおじいさの子だ」
「なにさ、鐐は越後のおっかさが産みなったのさ」
「そうでなぇ、そうでなぇ、そうでなぇ」
平太夫のちょっとした意地悪に、鐐之助は真剣に首を振った。
このごろ鐐之助は、すっかり元気を取り戻して、やんちゃぶりも近所で一、二番だった。
あまりやんちゃが過ぎると平太夫は、
「鐐、越後へやるぞ」
としかりつけた。すると鐐之助はピタリといたずらを止めた。

桑名の兄ちゃにとっての柏崎は、まだ怖いところだった。

父のまなざし

桑名の鐐之助の疱瘡が軽く済んだことを知らせる平太夫の手紙と日記は、約半月後の天保十三年十一月三十日に柏崎に届いた。

この年は前半、柏崎の勝之助一家に慶事が続いた。

四月に二男真吾が生まれ、翌五月には勝之助が公事方へ昇格したのである。

だが、それまで順風だった勝之助一家にも、夏から秋にかけては難題が相次いだ。

まず、夏場におきくが体調を崩す。

もともと、おきくは病弱な体質だった。

真吾を生んだ時「たらつき」の後遺症とも思われなかったが、おきくはたびたび高熱を出して寝込んだ。

その度、勝之助が台所に立って子供たちの食事をつくらねばならなかった。

おきくの病は秋までズルズル続いた。

勝之助は役所でも家でも身の休まる日がなかった。

役目を十二分に果たそうとする勝之助には、妻の病気は大変な重荷だった。

（これでは単身赴任も同然じゃ）

勝之助に思わず愚痴が出た。

しかし、真吾は、まず、順調に育っていた。

『真吾、小便は些と油断すれば、無調法致し候えども、夜分はめったになし。大便は十日に一度もむつき（おむつの意味）抔よごし洗う事なし。尻癖はよろしく御座候』（天保13・9・27＝柏崎日記）

真吾は勝之助から見ても育てやすい子供だった。

しかし、数えで四つになった長女のおろくはやんちゃ盛りで、親を手こずらせた。

真吾の誕生が、おろくのやんちゃに輪をかけたようだ。

それまで自分にだけ向いていた親や近所の人々の関心が、真吾に移った変化がおろくにもわかったのだろう。

おろくは親に怒られると、向かいの竹内のおばさへ駆け込んだ。

天保十三年九月。柏崎も秋たけなわである。

月半ばからは秋晴れの日が続き、陣屋では非番の者が毎日のようにキノコ狩りに精を出した。おろくはこのごろ、竹内家へわが家同然に入りびたっている。夕食も竹内家でよばれる日が多かった。

竹内のおばさは、

「まぁ、いいぜ、いいぜ」

と言ってくれているが、おきくにはたまらなく嫌なことだった。

「おろくをしかってやって下さい。お向かいに甘え過ぎです」

その都度、おきくが勝之助に訴えた。

だが、勝之助には手の下しようがなかった。だいたい、このごろではさっぱり父親に寄りつかないのだ。

たまに、

「おろく、おとっさと一緒に寝ようか」

と誘っても、

「おとっさと寝るのはいやだ、いやだ」

と大駄々をこねた。先達(せんだつ)ても、夜、おきくが広田へ茶に呼ばれたので、四つ（午後十時）ごろまで勝之助がおろくを抱いていたが、間もなく目を覚まして大駄々をこねた。

おろくのあまりの泣き声の大きさに、隣のばあさまが飛んできて連れて行ってくれた。

いつもこの調子で、おろくが駄々をこねると近所の女衆がなだめに駆け付け、最後はお向かいに行くのがおろくの手だった。

この夜も、しばらくしておろくが一人で戻ってきた。

知らんふりして寝ている勝之助の枕元で、しばらくグズグズ言っていた。夜中だというのにそれから外へ出ようとするではないか。

「どこへ行くのじゃ」

「広田へ行く」

「ほんなら行きやれ」

勝之助が突き放すと、おろくはお向かいから五軒も先の広田領助の家へスタスタ入って行ってしまった。

勝之助はあきれてものも言えなかった。

そして数日後のことだ。

この日も柏崎は上天気で、役所から七つ（午後四時）すぎに戻った勝之助が、おろくを銭湯に誘った。

「おろく、湯へ参ろうか」
「あい」
珍しく二つ返事でおろくが答えた。
「真吾もお連れ下さいませ」
台所からおきくが声を掛けた。
「おう、運公も誘って行くとしよう」
この当時、柏崎陣屋では役人といえども銭湯へ行った。
勝之助宅にもふろはあったが、水汲みが重労働だった。
天保十五年ごろの陣屋絵図（本書の見返しの図参照）を見ると、陣屋内には共同で使う井戸が四か所に見える。
一か所は、陣屋の最高責任者である「郡代」の役宅の西側にある。
二か所目はやや東南寄りの三軒長屋の脇で、この二か所は陣屋の東側約半分に住む藩士たちが使った。
三か所目は、御預役所の南側で、もう一か所は陣屋西側の中間部屋の北にあった。
勝之助宅は、陣屋西側の三軒長屋の真ん中である。この中間部屋北の井戸が一番近かった。
それでも炭部屋、刈羽役所の前を越えて行かねばならず、そう毎日、ふろをわかす訳には行かなかった。

近所でふろをわかしたところがあると、じぶん時に必ず誘いがあり、勝之助たちも「もらい湯」した。それ以外はもっぱら陣屋の外にある銭湯へ行くのである。

勝之助は真吾を抱いて陣屋の門を出た。後ろから運公がおろくの手を引いて従う。
道々、真吾をあやしながら行くと、八百屋がシメジを店先いっぱい、山盛りに並べている。
「おお、みごとなほどだなぁ。運公」
「今年はキノコが豊作のようです。この前、山へ行きましたが、これほど仰山（ぎょうさん）は採れませんでした」
あまりの量の多さに見とれていた勝之助に、
「あっ、渡部さま」
おませという店の女主人が気付いて声を掛けてきた。
「この間、おろくお嬢さまと島橋の坊ちゃまが店においでになり、ナシ一つくれ、とおっしゃるから、一つずつおあげしました。銭持って来なすったかと申したところ、ないとのことで……。六文の掛け売りがございます」
「それは、それは……。とんだ事をした。これからは、一人で参っても決して預けてくれやるな」

おろくが「つけ」で買い食いしたというのである。勝之助は顔から火が出るような恥ずかしさで六文を支払った。

「おろく、あの店でナシを買ったのか」

「あい」

「そのナシはどうした」

「島橋の二階で食ってしまったさ」

おろくはケロリとしたものである。

勝之助は銭湯もそこそこにして陣屋に戻り、

「おきく、おきくはおらんか」

と妻を呼んだ。

「銭湯で何かございましたの」

「銭湯ではない。おろくのやつめ、この先の八百屋でナシをつけで買い求めておったというのじゃ。おませがそういっておった」

「まあ、なんということを……」

「おろくや、それは真実(まこと)のことかえ」

「うん」

「島橋のところにもおろくと同じ四つになる男の子がいるそうだな。運公が言うには、これがおろくと大の仲よしで、時々、姉に連れられて八百屋へ果物や菓子を買いに行くとのことじゃ。おろくはそれを覚えて二人だけで参ったようだな」

「おろくには菓子、果物などは不足にさせてはおりませぬのに……。島橋の子に誘われたものと見えまする」

「四つの歳で借金などしておっては、後でろくなものにならぬ。おろく、これからは決して御門の外へ出てはならぬぞ。わかったか」

「あい」

きつくしかりつけたが、おろくはこの夜もお向かいの夕飯によばれて行き、泊まった。

十月に入って、おろくと真吾も心配していた疱瘡にかかった。ところが、二人とも桑名の鐐之助同様に、実に軽くて済んだ。親にとってこんなありがたいことはない。

陣屋内では、一度に子供を二人も疱瘡で亡くした家もあった。

「渡部さまのところは、お二人とも本当にお軽くて、よろしゅうございました」

出入りの町方のものにまでうらやましがられた。

勝之助夫婦も、心の中から喜んだ。

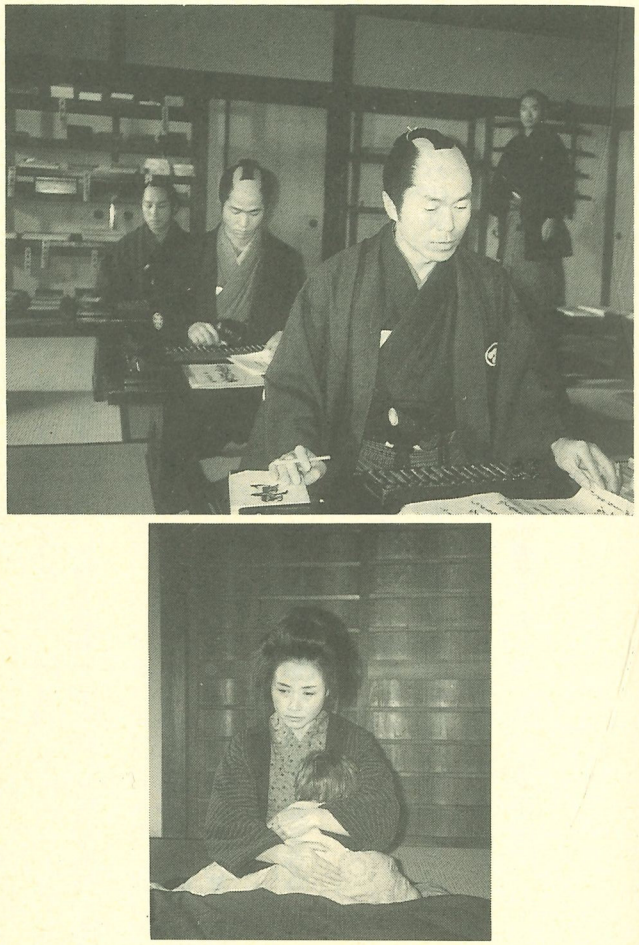
桑名から鐐之助の疱瘡は軽く済んだ、との知らせが届いた時、勝之助はしみじみとわが子たちの幸せを味わった。

『七つ（午後四時）前、御預所の小使い善七、御状御届けました、という。（略）直にありがたく拝見仕り候。（略）次に鐐之助軽く疱瘡致し候段、委細仰せ下され、誠に大安堵仕り候。此方の子どもは兎も角、兄斗は何卒御方便にも軽く致させ度と兼て念じ居り候所、三人とも軽く致、殊に百里隔ち候ても、兄から順に致し候事は、誠に不思議な事也』（天保13・11・30＝柏崎日記）

疱瘡は軽く済んだ真吾だったが、この手紙が届いた時はひどい胎毒のため、体中に吹き出ものが出て大いに苦しんでいた。

『左の目のぐるりより耳のあたまへかけ岩の様に成り、甚痒ゆがり、両眼より泪出、首をくるしみもだえ、時々、大だだ起し、起て居候内、昼夜泣き声止む時なし。おきく懐へ入立通し。め し給べ候間も立て居候位也。脇のもの迄共々骨身も削らるる様也。実にむごくも有り、餘りだだおこし候時は、にくらしくも有り、か様に困り候事は初て也』（同）

真吾の胎毒は、相当たちが悪いものとみえ、年が明けて天保十四年の二月になっても完治しなかった。



NHKスペシャル「幕末転勤物語」より（NHK提供）

それぱかりではない。
帯を解く間もなく抱いて看護を続けていたおきくにも、うつってしまった。
床に寝かせるとすぐに泣き出す真吾を抱きかかえ、おきくは柱に寄り添ってうつらうつらするだけの夜が年の瀬までも続いた。
おきくの看病は、端から見ても涙ぐましいものだった。このじぶんの女房の身だしなみであるお歯黒も消えて、娘のような白い歯に戻ったままで、少しのひまを見つけては山とたまった洗たくものに取りかかった。
天保十四年の正月、おきくは髪を櫛けずる事もなく、真吾の看護を続けた。
(おきく、すまんのう)
勝之助は阿修羅の如く立ち働くおきくの姿に胸を痛めつつ、役目をこなした。
暮れには公事方の仕事が続けざまにあったし、正月は正月で陣屋の正月行事があった。
勝之助は暮れにおさとという通いの子守を頼んでいたが、この子守娘はよく休んだ。
お向かいの竹内のおばさもたびたび食事や掃除の面倒を見てくれたが、勝之助は、
(このままおばさに頼ってばかりもいられぬ)
と、自ら台所に立った。
おろくの子守娘で、今は久治という夫がいる柳橋のおゆきも、たびたび顔を見せて家事を手伝った。

おゆきの母もおろくの子守に来てくれた。
勝之助とおきくはその都度、息をつくのだった。
転勤族の勝之助夫婦は、互いに助け合わなければ、この窮地は乗り切れなかった。

真吾の胎毒がようやく快方に向かったのは、天保十四年三月も半ばを過ぎてからである。
しかし、看病疲れが重なったおきくは、いよいよ病弱になった。
そのうえ歯痛みが続き、寝込むことは相変わらずだった。
身も心も疲れ切った夫婦を元気づけるのは、桑名の平太夫から届く日記と手紙である。
『只今、山崎善作、伊藤忠治着之由。内(家)へ一寸帰り直に行く。小林へ着にて未わらじがけ也。先久々にて対面。大慶。桑名皆々様御別条なしと承り大安心。御状受け取り拝見、見仕候。善作届け相済む。夜五つ(午後八時)頃小林へ帰り、夫より酒になる。色々桑名咄し承り、鐐之助の咄しも委敷承り、四つ(午後十時)頃帰り、山本へ忠治の悦びによ(寄)り又壱口給べ帰り申し候。おきく寝て居り、日記は明日の楽しみ(に)致し候。何よりの半衿おろくに下され置き、おきく大悦び。おろくも嘸明朝、朝は悦び申す可く。たわいなく寝て居り、直に抱いて寝

る』（天保14・3・28＝柏崎日記）

渡部家の人々

渡部家の初代平太夫が系図に現われるのは、元和、寛永年間のことである。

初代平太夫は、主家の久松松平家三代目当主になった定綱公が、まだ山城国紀伊郡淀領三万五千石を治めていた時、淀城門番小頭を務めた。

久松松平家は、将軍徳川家康の異父弟、久松定勝を遠祖とする譜代の名門である。

三代定綱公は、元和三年（一六一七）、兄の定行と父、定勝が、共に掛川から桑名十一万石に移封になった後を受けて、翌四年、遠江掛川三万石の城主になった。

元和九年（一六二三）、定綱公は淀三万五千石に移封される。さらに寛永十年（一六三三）、美濃大垣六万石へ移り、寛永十二年（一六三五）、兄、定行が伊予松山へ移封になった後の桑名城へ入った。

桑名移封後の定綱公は、城を修理して「街道の名城」とうたわれたほか、藩内の産業振興に努め、「名君」として尊敬された。定綱公は「鎮国大明神」として、後に久松松平家が生んだもう一人の名君、松平定信（守国公）と共に、今も城内にある鎮国守国神社に祀られている。

初代平太夫は、定綱公に従って淀から大垣、桑名へと移り、久松松平家四代定良、五代定重に仕えて貞享元年（一六八四）十二月六日に没した。

次の二代目から四代目まではいずれも「平太夫」の名を継いだが、四代目は晩年に「伴左衛門」を名乗った。

渡部家初代の禄高は不明である。

二代目は「新城玄関番七石二人扶持」と藩の記録に残っている。

微禄の徒士といえども渡部家の家系が、今日まで延々と残っているには理由がある。

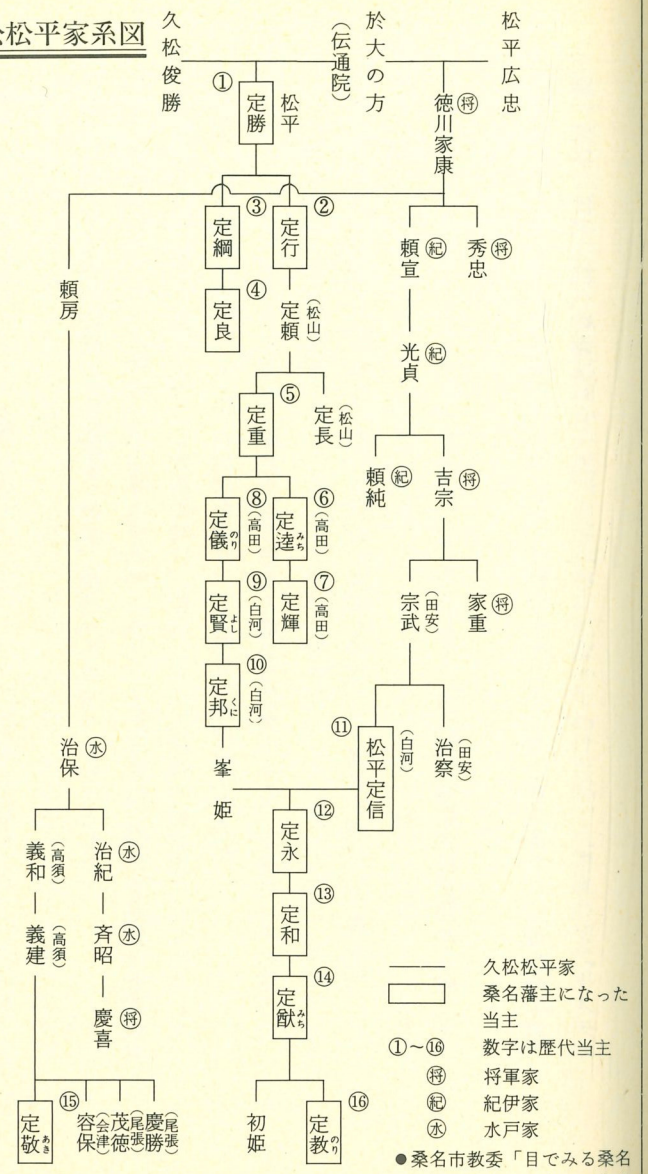
久松松平家は桑名から越後高田（現在の新潟県上越市）へ、さらに奥州白河（福島県白河市）へと、移封に次ぐ移封の命令を受けた。

その都度、藩士も大移動したわけで離散する者も多かった。奥州白河十一万石の城主から老中首座になり「寛政の改革」を行った松平定信は、三代定綱を特に敬い、

「鎮国公（定綱）の御代に召し出されしものの家系を探索せよ」

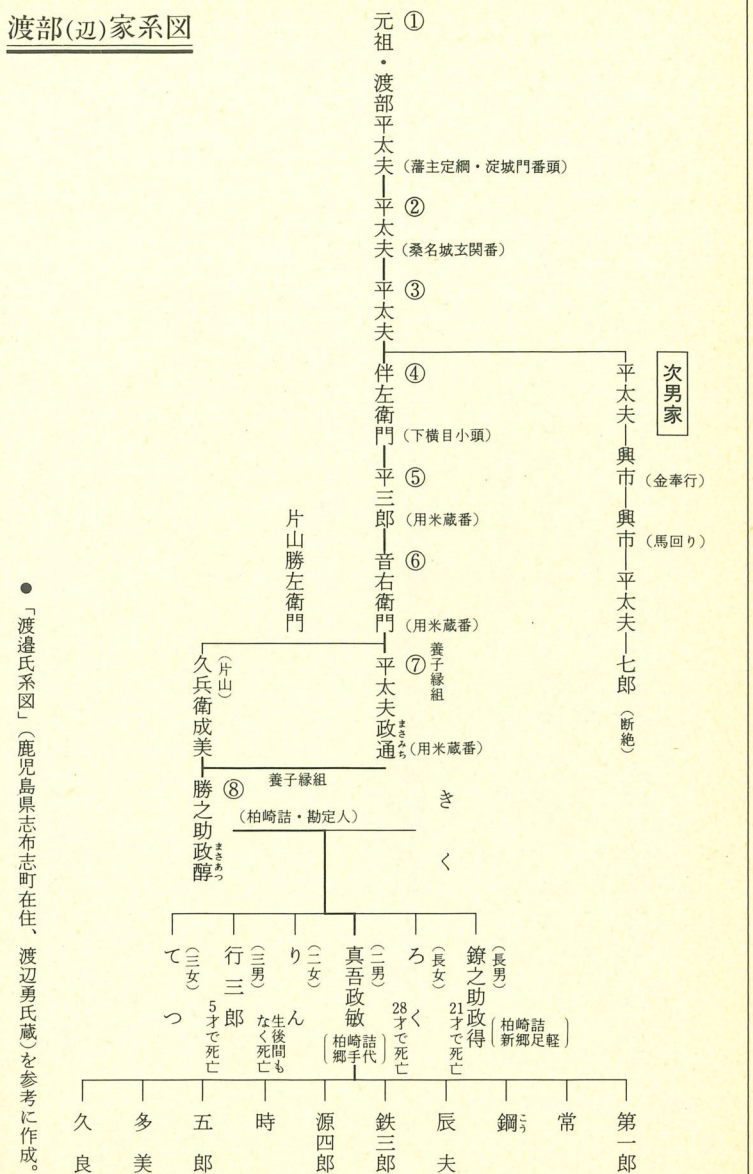
と、命じたことがあった。渡部家もそれに該当したわけで以後、該当した家は藩中でも特別の待遇を受けた。

桑名・久松松平家系図



●桑名市教委「目でみる桑名の江戸時代」を参考に作成。

渡部(辺)家系図



●「渡邉氏系図」（鹿児島県志布志町在住、渡辺勇氏蔵）を参考に作成。

渡部家も「藩祖」といわれた定綱公以来の家柄を誇りにした。後に八代目平太夫を継いだ勝之助は嘉永二年(一八四九)、鎮国公二百年祭に当たって、定綱公の時代に召し出された家の者二十一人と協力してお宮に石の手水鉢一基を献納している。

渡部家も殿さまの移封に従って伊勢から越後、越後から奥州へと転々とした。

桑名から越後高田へ移ったのは三代目平太夫の時である。その子の伴左衛門を名乗った四代目平太夫は優秀な人物で、桑名で藩主が定重の時代、禄高七石二人扶持で持筒組に召し出された。

その後、高田移封に当たって一石の加増を受け、「下横目」を仰せつかった。

「横目」とは、城下の治安を守り、風紀を取り締まる最高責任者である。下横目はその輩下で、今でいう警察の役目を務めた。

四代目平太夫は高田で、さらに一石一人扶持の加増を受け、「下横目小頭」に昇進した。

渡部家四代目の時は、兄弟そろってできた。

正徳五年(一七一五)、二男も高田で持筒組に召し出される。藩主は、遠祖久松定勝から数えて六代目の定逵の時代である。

二男家の初代になった伴左衛門の弟は、兄の改名により「平太夫」を名乗り、定逵から定輝、定儀、定賢、定邦と四代の藩主に仕えた。

松平家は定賢の時代、越後高田から奥州白河へ移封になったわけだが、二男家の初代平太夫はこの間、仲間小頭、地方掛り勘定人、蔵奉行、道奉行を経て勘定奉行に抜てきされ「上級武士」にとり立てられた。

「奉行」とはいっても地方の藩では人数も多かった。だが、徒士とは違い、今でいえば立派な管理職である。二男平太夫は、その後の安永五年(一七七六)に藩財政検約のため馬回り役を命じられたが禄高は十八石三人扶持で兄を凌いだ。

二男家は二代目から与市を名乗る。三代目まで馬回り役を務めたものの、四代目、五代目と不品行があり、天保三年(一八三二)、五代目の時についに断絶した。

長男家の五代目は「平三郎」といった。

藩主が九代定賢の時代、越後高田で新郷足軽に召し出され、奥州白河に移った後、月番中(家老職)の用使、つまり御家老の下働きを務めた。

平三郎は上司に可愛がられ、宝暦二年(一七五二)、表坊主になる。おそらくかなり気配りに長けた人物だったのであろう。その上、筆もたった。宝暦十年には家老の祐筆係を務め、後に筆の才能を生かして用米蔵番になった。以後、この用米蔵番が渡部家の役務となり、六代目音右衛門、七代目平太夫政通も家督を継いだ際、この役職も継いだ。

七代目平太夫政通こそ、繚之助と真吾らの祖父で、「桑名日記」を残した人物である。

平太夫政通は、同藩の片山勝左衛門の四男で、母は同藩小林茂助の娘で豊といった。

豊は六代目音右衛門の妻、幾世の母親でもあった。つまり平太夫は姉婿の養子に入って渡部家の七代目を継いだわけだ。

平太夫には男子が誕生しなかった。

娘ばかり四人（おこん、おかね、おせん、おなか）が生まれた。

平太夫は渡部家の次代を考えて文化十四年（一八一七）、実家の兄、片山久兵衛成美から当時十五歳になる二男の勝之助を養子に迎えた。

平太夫は勝之助に、同藩の佐藤代右衛門秀當の三女、おきくを嫁らせて渡部家の行末を託した。

平太夫が実の娘を勝之助に添わせなかった理由はよくわからないが、娘たちがまだ幼かったと考えられる。

勝之助とおきくの間には、長男繚之助、二男真吾、長女おろくの他、二女おりん、三男行三郎、三女てつと合わせて六人の子が生まれた。

平太夫は幼名を鉄蔵といった。

藩がまだ奥州白河に在った文化十一年（一八一四）、当時、すでに白河藩の飛び地になっていた越後柏崎の隣藩、村松藩で百姓一揆が起きた。

柏崎にはすでに白河藩の陣屋ができており、まだ「鉄蔵」を名乗っていた平太夫にも柏崎陣屋警備の命が下った。

この時の白河藩主は、老中になった松平定信の嫡子、定永である。

平太夫は大筒役の一人として約一か月半、柏崎陣屋に滞在した。

平太夫は、この柏崎陣屋に八代目平太夫を継いだ勝之助が赴任し、幕藩時代の最後をこの地で迎えようとは夢にも思わなかったであろう。

藩邸門前の別れ

天保十四年（一八四三）閏九月十七日夜、桑名藩柏崎陣屋勘定人渡部勝之助は、中仙道鴻巣宿（埼玉県鴻巣市）に在った。

この一か月、江戸藩邸に公務出張していた勝之助は、越後へ戻る途中の宿を宿場にとったのである。

この年の九月、幕府から突然、桑名藩に「越後御領分村々の五か年均調べ」を差し出すよう、下命があった。

これは桑名藩の飛び地である越後領の五年間の米の出来高を差し出すようにとの命令である。

桑名藩では、越後領を支配する柏崎陣屋から勝之助ら勘定人を、幕府への説明役を兼ねて出府させた。

その役目も前日までに滞りなく済み、勝之助は藩の御貸人、福松を伴って七つ半（午後五時）すぎ、この鴻巣宿に入ったのである。

「鴻巣宿は泥人形が名物とのことでございます。江戸に集まる雛人形の大半がここの産といわれておりますとか……」

どこで聞き込んだのか、旅装を解いた勝之助に福松が鴻巣宿の説明を始めた。

福松は旅が苦手と見え、足腰も弱かった。

供としてはあまり気の回る方ではなかったが、勝之助は極めて正直な心根が気に入った。

「この宿の周辺には渡部さまゆかりの神社仏閣も多数ございますとのことです」

宿の番頭か主人が勝之助の氏素性を知って教えたのか、福松はその受け売りとも思われる宿場の説明を続けた。

鴻巣宿の近くには、平安時代中期の武人で、源頼光の四天皇といわれた渡辺綱を祠った「綱八

幡宮」や、綱が開いたという寺があるというのだ。

勝之助に伝わる渡部家の系図は、「洲浜」の定紋と共に、

「渡邊氏出自河原左大臣源公融舊住津國渡邊因以為氏……」

と、始まっている。

つまり、渡部氏は嵯峨天皇の皇子、源融から出て、摂津国（大阪府と兵庫県の一部）渡辺の地に住んだことから、渡辺（部）を姓にしたというのであった。

その嵯峨源氏の末裔で、最初に摂津国渡辺に住んだのが渡辺綱といわれる。

渡辺綱は、大江山の酒顛童子を倒し、羅生門の鬼退治をしたという伝説を持つ。

勝之助にとって遠い祖先かも知れない綱ゆかりの地が、御府内を出て最初の宿だった。

「渡部さま、明朝、お子さまに泥人形など土産にお求めになってはいかがです。宿の主もそう申しておりました」

「土産か。江戸でもあれやこれと求めて参ったのじゃが、荷は後で来る同僚と一緒じゃ」

「渡部さま、お子さまは……」

「三人おる。桑名に一人、柏崎に二人じゃ」

「お子さまは別々にお暮らしなのでございますか」

「そうじゃ。長男が桑名、柏崎には二男と長女が一緒だ」
「ご長男は桑名でございますか……。お寂しいことでございます」
「もう四年になるかのう。別れてから……。その間は一度も会っておらん」
「一度も……で、ございますか」
「うむ、もう慣れたが、桑名にはなかなか戻れん」
勝之助は前日、江戸藩邸門前で別れた桑名衆を思い浮かべていた。

この度の江戸出張では勝之助らに、
「各義、御高帳調べ方、昼夜、骨折り巨細に調べ出来候」
と、御勘定頭から褒美三百疋ずつが下されていた。
藩邸での別れの宴席でも勝之助ら柏崎陣屋組は、桑名組と互いの職務を無事に果たせたことを喜び合った。
別離の宴を終えて藩邸の門前に立ったのは、前日の八つ半（午後三時）だった。
伊勢国桑名へは藩邸門前を南へ行く。
越後国柏崎へは門前を北へ行く。
この門前は本国へ行く桑名衆との別れ道でもあった。

（南へ行けば鐐之助がおる桑名へ東海道の旅だが……）
意気揚々と上機嫌で本国へ引き揚げる桑名衆を見送る勝之助に、四年前に別れたきりの長男の笑顔が浮かんでは消えた。
藩邸門前での南北の別れ。柏崎から一緒に出府した同僚二人が、荷駄と共に後発となったため、勝之助はただ一人、北へ向かった。
この夜の宿は、中仙道の一番目の宿場、板橋だった。
供の福松ともここで待ち合わせた。
このじぶんの慣例で、江戸で暮らしている縁籍の者が二人、板橋宿まで見送りに来てくれた。
宿ではさっそく別離の小宴が開かれ、勝之助はだいぶ遅くまで杯を重ねた。
勝之助の酒はそう強くはない。
酔えば眠くなる酒だった。
しかし、桑名から雪国の越後・柏崎に転勤して、少し手が上がったような気もした。
柏崎ではすべての藩士が陣屋の塀の内で暮らしている。
しかも寒い雪国である。
陣屋のつき合いに酒は欠かせない。
陣屋では同役振る舞いや女振る舞いなど仲間内の小宴が、毎月のようにあった。

勝之助は、「子供客」などという子供のための宴まであるのには、さすがに驚いた。だが、招き、招かれるこの小宴が陣屋内の和を生み、人間関係の潤滑油になっている事にもすぐ気がついた。

金がかかることではあった。

しかし、これをやらないと陣屋では暮らして行けないのである。

この度の江戸出張は、陣屋の暮らしにどっぷりつかっていた勝之助にとって、大きな刺激になった。

なにより収穫だったのは、初めての江戸で天下の政変を目の当たりにしたことである。

江戸を出立するわずか四日前のことだ。

天保の改革で厳しい「検約令」を布いた老中水野忠邦が罷免された。

天保十四年閏九月十三日、水野邸には「御役御免」を知った江戸市民が大勢押しかけた。老中の立ち退きを一目見ようというのである。

勝之助は同僚と丸之内界隈を見物がてら水野邸前を通りかかったのだが、人々のあまりの多さにすっかり度肝を抜かれた。

集まった老若男女は群となり、口々に老中の悪口、雑言を叫び、「倹約令」に圧迫された庶民の怒りを水野屋敷にぶっつけた。

その群集を目当てに物売りまで出るありさまで、勝之助らには見るに堪えられなかった。

水野家では、それでも群集を追い払おうともせず、門を固く閉じたまま静まりかえっていた。

(御公儀へのご遠慮からであろうが、敗者の末路とはなんとみじめなものよ)

勝之助は盛者必衰の理をまざまざと知る思いだった。

「倹約、倹約と庶民を押さえつけた張本人が失却すると聞いては、悪口の一つも言いたくなろうよ」

「それにしてもこのようなありさまは前代未聞の事じゃ」

勝之助らはこの日の立ち退きはない、と知って水野邸前を早々に引き揚げた。

「渡部さま、昨夜の板橋宿ではかなりおすごしになられたご様子でございましたが、今宵はいかが致しましょうか」

江戸での強烈な思い出に浸っていた勝之助は、福松の声で我にかえった。

昨夜の板橋宿での宴も老中の解任劇がもっぱらの肴だった。

江戸が持つ巨大なエネルギーが、知らず知らずのうちに勝之助を興奮させていたのである。

江戸から越後へ

天保十四年閏（うるう）九月十八日朝、鴻巣宿には雲一つない青空が広がった。

このじぶんに江戸と越後・柏崎を結ぶ街道は二通りあった。

一つはこれから勝之助がたどる碓氷峠を越えて中仙道追分宿から北国街道へ入り、小諸、上田、善光寺と北信濃の宿駅を経て日本海へ抜ける碓氷峠越えである。

もう一通りはそれより手前の高崎宿から三国峠（みくにとうげ）を越えて越後国魚沼地方へ通じる三国街道だった。

三国峠越えは、越後縮（ちぢみ）を背負った行商人がよく通った。

柏崎は縮行商人が多い町だ。

柏崎から三国峠越えの道は、途中で越後縮の産地の一つ、十日町を通ることから、江戸へはこの街道の方が便利だった。

だが、公務出張の勝之助は、宿継ぎがより整備されていた碓氷峠越えの街道を選んだ。

鴻巣宿を六つ（午前六時）前に出立した勝之助と供の福松は、関東武士ゆかりの熊谷、深谷、本庄の宿を経てこの夜は新町宿泊まりにした。

本庄宿（埼玉県本庄市）からは、宿はずれの古戦場、神流川を渡り、暮れ合いに新町宿（群馬県多野郡新町）に着く。

神流川の古戦場は天正十年（一五八二）、織田信長の武将滝川一益が、小田原の北条氏と闘って敗れたところである。

勝之助はこの江戸から柏崎への旅では、簡単な道中日記をつけながら旅を進めた。

翌閏九月十九日、勝之助は新町宿を七つ半（午前五時）すぎに早立ちし、倉賀野宿（群馬県高崎市倉賀野町）の手前で夜明けを迎えた。

倉賀野宿には、中仙道と日光へ向かう例幣使街道の追分があった。利根川にそそぐ烏川に沿ったこの宿場は、信州方面からの物資を運ぶ水上交通の要所でもあり、倉賀野河岸は信州方面や周辺諸藩の米の積み出しで繁栄した。

ここから二里ほど行けば高崎の城下である。

高崎宿は中仙道でも一、二を争う宿場だった。

このじぶんは松平（大河内）右京亮の城下町で、勝之助は上州木綿縞（しま）一反を一分一朱で買い求めた。

この日は碓氷の関所越えを予定していた。次の板鼻宿を過ぎ、安中、松井田宿を抜ければ碓氷の関所である。

横川の関ともいわれたこの関所は、中仙道では木曽福島の関と並ぶ重要な関所で、信越方面から江戸に入る旅人の関門だった。

公用の旅である勝之助は、藩の切手を差し出し碓氷の関所をなんなく通り抜け、この夜は坂本宿に泊まった。

坂本宿は碓氷峠のふもとで、この夜は強い風が吹いた。勝之助はこたつで暖まりながら道中記をつけた。

このじぶんの暦は陰暦である。

天保十四年のこの年は、九月と十月の間に閏月があった。

閏九月は秋とはいっても現代の暦に合わせれば、秋もかなり深まった季節である。

翌朝、碓氷峠を越える勝之助は、綿入れ二枚、袷(あわせ)の木綿一枚、綿入れ半天(はんてん)一枚を重ね着して坂本の宿を出立した。

それでも寒かった。

峠道は三里余り。一里ほど登ったところで夜が明けた。

立場(たてば)、立場（宿駅間の休憩場）で火を炊き、人足たちが暖をとっていた。

峠を下れば軽井沢宿。この朝の冷え込みは相当きつかったらしく、道端の水たまりにはまだ氷が張っていた。

勝之助は次の沓掛宿で昼食を取り、追分宿から北国街道へ入り、小諸を目指した。

雲一点もなく、噴煙を空高くあげる浅間山を見ながら小諸城下に入った。翌閏九月二十一日早朝、勝之助は月明りの中を灯ろうを頼りに上田宿へ急いだ。

上田宿は松平伊賀守の城下。「名物上田縞」と看板がいくつも下がった城下を抜けて坂下から八代(やしろ)へ着く。

ここから北へ三十丁ほど行くと篠ノ井の追分である。

篠ノ井追分は、北国から京、江戸へ出る分岐点であった。

勝之助は四年前、桑名から柏崎へ赴任する時もこの篠ノ井追分を通った。

ちょうど尾州津島（愛知県津島市）祭へ行く途中に善光寺へ参詣する関東者の団体と一緒になり、善光寺宿では予定していた宿がとれずに困った記憶がある。

ここから先は勝之助のかって知ったる道である。

二十一日夜は篠ノ井宿から二里ほど行った丹波島に泊まり、二十二日は善光寺から牟礼宿、野

尻宿、信州と越後の国境いになる関川の関所を越えてから宿をとった。
善光寺では、柏崎で待つ真吾の土産に小さな太鼓を一つ買った。
関川宿から柏崎へはあと二日の道のり。
二十三日、関川宿を暁八つ（午前二時）時に出立した勝之助は、関山宿で夜明けを迎え、松崎、新井を越えて昼すぎ、高田（新潟県上越市）の城下に入った。さらに春日新田を通り、この夜は黒井宿泊まりになった。
明二十四日は柏崎である。勝之助は黒井宿から慣例による先触れを陣屋に出した。
陣屋への到着予定時刻をあらかじめ知らせておくのである。

二十四日は今にも降り出しそうな天気になった。
勝之助は黒井宿を暁七つ立ち（午前四時）した。
柿崎からは砂道の難所になり、勝之助は供の福松も馬に乗せた。
二里ほどの砂道を乗りきって鉢崎（新潟県柏崎市米山町）に着いたのは四つ半（午前十一時）ごろだった。
柏崎へはもう一足である。勝之助は鉢崎で昼食を取り、鯨波（くじらなみ）宿までの途中の茶屋で力餅を手土産に買った。

鯨波までくれば陣屋は目と鼻の先になり、勝之助と福松はこの宿で髪、月代（さかやき）を整えることにした。
そこへ高原のばあさんと、加藤の後家が通りかかった。
「あれ、渡部さまではございませぬか」
「只今、江戸からの帰りでござる。お二方はどちらまで」
「番神参りでございます」
「それは、それは。わが家の者は達者でござろうか」
「皆さま、お変わりもなくお帰りをお待ちですよ」
「それを聞いて大安堵致しました」
上機嫌の二人と別れ、勝之助は徒歩で陣屋へ向かった。
この旅は公用でもあり、駕籠に乗ることが多かった。だが、陣屋までの道には出迎えの衆もあり、歩くことにしたのである。

「あっ、オトッサだ」
陣屋に程近い中浜まで来た時、竹内運八郎に手を引かれて出迎えに来たおろくの姿が見えた。
「オトッサ、お帰り」

「勝之助さ、ご苦労さまでした。お疲れでしょう」
おろくと運八郎がニコニコ顔で交互にあいさつした。
「おろくも迎えに来てくれたか。運公、礼を言うぞ」
「なんの、なんの。江戸表の様子はどうでした。土産話もたっぷりあることでしょうな」
「おう、いろいろあるぞ。まず、家に戻ってからじゃ」
七つ（午後四時）すぎ、勝之助は無事わが家へ着いた。
おきくには先触れが伝わっていなかったらしく、ふろをたてるの、酒肴の用意だのとにわかに忙しくなった。
その間にも帰参を聞きつけた品川十四郎らが顔を出した。
「まず、御頭、御奉行へ届けに参る」
役所では、御横目から奉行、勘定頭と陣屋のお歴々のすべてが勝之助に目通りを許し、江戸の様子を詳しく尋ねた。
そのあとで勝之助は同役宅をすべて回り、長屋へ戻った時には、座敷が帰参の喜びにかけつけた人たちでいっぱいになっていた。
水野老中の失脚の様子など、勝之助は江戸の土産話を我ながらうんざりするほど繰り返し、繰り返し語った。

喜びの客はなかなか腰を上げず、この夜の祝宴は四つ半（午後十一時）すぎまで続いた。

内助の功

勝之助のおろくへの江戸土産は、飯事の包丁、屏風、真田の夏帯に絵など盛りだくさんだった。
数えで二つの真吾には、善光寺の小さな太鼓である。
江戸出張の大役を果たしたこの天保十四年の師走は、柏崎の雪が珍しく少なかった。
十二月八日。勝之助の長屋の前に残っていた雪も溶けて、黒土がひょっこりのぞいた。
「勝之助さ。この節に黒土が見えるなんて誠に珍しい。なんか吉事の兆しかな」
向かいの運公、竹内運八郎が、真吾を抱いて泊まり明けの勝之助との交替に役所へ出て来た。
「今日は桑名におる鎌之助の誕生日だよ」
真吾をあやしながら勝之助がこたえた。
「もう、いくつになられます」
天保七年（一八三六）生まれの鎌之助は、この年が七回目の誕生日だった。
「離れてもう四年になるのかのう。桑名からの便りでは、このごろは手習いもずいぶん上手になっ

たとのことだったが……。これ、真吾、危ない、危ないぞ」

運八郎の腕から下りた真吾が、尻をピンと持ち上げ、役所の座敷を這い回り始めた。

真吾は長かった胎毒もようやく回復し、このごろではわけのわからない言葉でよく話もする。這う速さもかなりのものだ。勝之助と運八郎が追うと、いよいよ面白がって広い役所の座敷を右へ左へ逃げ回る。

「こやつは寒さもいっこう堪えんのじゃ」

ようやく捕らえた勝之助が、嫌がる真吾を無理やり着物の懐に抱き入れた。

「男の子はそれぐらいの方がたくましく育ちましょう」

お世辞がヘタな運八郎が珍しく気のきいた言い方で真吾を褒めた。

「昼すぎには小豆めしも出来るだろう。おばさにもお出で願うことにしておる」

「ありがとうございます。母も喜びます」

勝之助は、柏崎に赴任して以来、鐐之助の誕生日には毎年、必ずおきくに小豆めしを炊かせ、御神酒と一緒に神棚へ献げた。

桑名では養父母の平太夫とおますが祝ってくれている。だが、勝之助は越後に赴任してから遠く離れて暮らす親の役目として毎年、鐐之助の無事を祈り、お向かいのおばさらを招いて誕生日

を祝った。

この天保十四年の誕生日には、お向かいのおばさとお民、おろくと同年の品川の娘のお八重が客だった。

小豆めしにおぼろ豆腐の葛煮というご馳走である。

勝之助も御神酒を一杯いただく。

夜になって同役二人が夜話しに現われ、勝之助の長屋はこの年の誕生日も四つ（午後十時）ごろまで賑わった。

三日後の十二月十一日のことである。前日来の雪が陣屋の長屋の屋根に二尺（約七十センチ）ばかり残り、それを強い風が吹雪のように吹き落とした。

おきくは正月に間に合わせようと機織りに忙しい。

だが、風は吹雪となって終日、吹き荒れた。

一歩も外へ出られない真吾は腹を立てて、おきくの邪魔ばかりする。おきくの機織りはいっこうはかどらないまま七つ時（午後四時）になった。

「渡部さま。只今、御金飛脚が戻りました。お手紙をお届け申し上げます」

表の方から役所の下働きの声がした。

八つ半（午後三時）すぎに帰宅していた勝之助が、その声を聞いて玄関に飛び出す。
「おう。待ち兼ねておった。待ち兼ねておったぞ」
下働きが届けてくれたのは、桑名の平太夫の手紙と日記である。それに勝之助の実家の新地・片山家からの手紙も一緒だった。
「桑名からのお手紙でございますか」
おきくも真吾を抱いて表に出た。
「奥さま。お待ち兼ねの桑名からのお便りです。渡部さまのところにはお便りが多く、陣屋中で誠にお羨ましいと、評判でございます」
お愛想を言いながら役所の下働きが引き揚げて行った。
勝之助とおきくは、そのままこたつのある間に入って封を切った。
「鐐こ、まず達者にてご安心のほど……」
勝之助が声を上げて読み出す。おきくも真吾を抱いたまま夫の手元をのぞき込んだ。
「桑名は皆さま、お変わりもなくご達者なようだ」
「あい。ほんによろしゅうございます」
「なになに、鐐之助の清書を同封したと」
届いた手紙を確かめると見慣れぬ文字を書きつけた手習い紙が何枚か添えてあった。

「まあ、これを鐐こが……。ついこの間までお乳を欲しがっておりましたのに……」
その一枚を手に取ってジーッと見入っていたおきくの目は、ついに堪え兼ね、見るまに涙でいっぱいになった。
鐐之助の習字は、勝之助が見てもなかなかの出来ばえである。
「誠に天晴れ見事なものよ。のう、おきく」
勝之助も思わず目頭が熱くなった。

桑名市在住の民俗学者堀田吉雄氏によれば、鐐之助が書き写した「天和藩列記」という写本が桑名市内の旧家に保存され、市の民俗文化財に指定されている。鐐之助はなかなかの能筆家だった。

「鐐之助もはやこのような字を書けるようになったとはなあ。月日の過ぎるのは早いものじゃ。これもひとえに桑名の父上や母上方のお陰じゃ。誠に有り難いことだ。のう、おきく」
「ええ、本当に有り難いことでございます」
おきくは涙を拭きながらこたえた。
鐐之助と離れ離れになってから四年と七か月余り。柏崎に住む勝之助とおきく夫婦にはほんの

ひとときのように思われた。
しかし、この歳月は子供たちを着々と成長させていた。

十二月二十五日。
陣屋の役所仕舞いである。
この日は陣屋詰めの藩士全員が役所に出る。
勘定頭から「御目録」という名目で、内々のお手当てが出るからだった。
幕藩時代の武士の給料は、「三季のお切米」といって春と夏に禄高の四分の一ずつ、冬に残りの四分の二が渡された。
これとは別に毎月、扶持米が出た。
この方は家臣の食費で、一人扶持の場合は一日玄米五合の勘定で支給されるのが普通だった。
年の瀬に内々で出るこの「御目録」は、今でいう年末の勤勉手当のような性格もあった。
勝之助には留方として三分、兼任の公事方として二分の合わせて一両一分が下された。
この日は「御目録」と同時に酒肴も出る。
この年は仕事が多かったこともあって、御目録が出たのは夜になった。
勝之助が慣例の諸役所への礼回りと、同役との酒宴を済ませ、帰宅したのは九つ（午前零時）を

過ぎてしまった。
それでもおきくがそば切りをつくって待っていてくれた。
「おお、そば切りか。ちょうど空腹を覚えていたところじゃ。ありがたい」
勝之助は大喜びで箸を取った。
「お役所仕舞いにそばを食べるのは実に久しい。この柏崎に来て五年目にして初めてだ」
「五年目にして初めてでございますか。それは存じませんでした」
おきくは意外だ、というまなざしで夫を見上げた。
「そうなのじゃ。桑名ではお役所仕舞いの折には、同役がそろってそばを食べた。柏崎の陣屋にはその習慣がなく、これまで毎年、なにか物足りないお役所仕舞いじゃった」
「そういえば柏崎では大晦日にもそば屋が町に出たという話を聞きません」
勝之助が五年も仕事仕舞いのそばを食べていないことを聞いて、おきくの胸は熱くなった。柏崎にも大分慣れたと思っていたのだが、夫の口からこういう話を聞こうとは思ってもみなかった。夫の辛さもまだまだ知らぬことが多い。おきくは越後という異国に居る悲しさをしみじみ感じた。
「明日からは例の鬼が参る。今宵はもう休むとするか」
勝之助は先に床に入ったがこの夜はなかなか寝つけず、遠くで拍子木が八つ（午前二時）を打つのをはっきり聞いた。

天保十四年も余すところ六日。越後の師走の夜は、拍子木の他に物音一つなく更けて行く。

翌二十六日は快晴。

勝之助は久しぶりに朝寝を楽しんだ。

越後の冬の朝は寒い。真吾は勝之助の綿入れの中に入り込んで、

「アッタケ、アッタケ」

とうれしがった。勝之助はそのまま真吾を肌におんぶしてゆっくり起き出すと、こたつにもすっかり火が入っていた。

このごろの真吾は、こたつに火が入るとジーッとしてはいない。

誰かにおんぶしてもらっていても、すぐに下りてこたつにあたり、一人でよく遊んだ。

そこへおろくが邪魔をしに入り、決まってけんかになる。

この朝方は、子守娘のお弓の母親が、歳暮にコンニャク三枚を持って訪ねて来た。

真吾はお弓の母親におんぶしてもらい、外へ出て大喜びで、この朝はおろくとのけんかもなかった。

勝之助は、お弓の母親にコンニャクのお返しにカズノコを一升遣す。

それにお弓の給金二朱も渡した。

「まあ、これはこれは旦那さま、奥さま。ありがとうございます」

お弓の母親は大喜びで帰って行った。

「そろそろ鬼どもが参るころあいじゃのう」

お弓の母親を送り出した後で、勝之助が台所仕事に忙しいおきくに声をかけた。

「心得ております」

おきくが気丈な答えを返した。

鬼どもとは掛け取りのことである。

柏崎陣屋では、日常の買い物をほとんどツケにしていた。

これを盆、暮れと一年に四回ある節季ごとにまとめて支払うのである。

「節季払い」といって、掛取人たちはお役所仕舞いの翌日あたりから陣屋内を回る。

初めてこの柏崎に赴任した天保十年の暮れには、勝之助もツケの多さに目を丸くした。

味噌、醤油から毎日の菜のものまでツケは二十五、六軒にも及び、締めて約十三両にもなった。

おきくも目をつり上げて翌年の正月を迎えたが、この頃では言い訳も達者になり、掛け取りなど一向に恐れぬ様子だ。

「貧乏暮らしがすっかり板についたのう、おきく」

などと勝之助が冷やかしても全く動じなくなっていた。

この天保十四年は、勝之助の江戸出張もあって、なにかと物入りの多い年だった。
その上、勝之助の平日の小遣い銭に困り、豆腐一丁、箸一ぜんまですべてツケにしたため、掛取先は五十軒もあった。
ところが、おきくはこの掛取人を翌二十七日の夕方までにすべてどうにかこうにか承服させ、年の瀬の払いを済ませてしまったのである。
「おきく。足りたのか」
夕方、借金の支払いを心配して一日中、家の中に籠(こも)りっきりだった勝之助が恐る恐る声を掛けると、
「ええ、なんとか済みました。ご心配はいりませぬ」
おきくは明るく応えた。
「掛け取りに見えた皆さんには、すべて何がしかの金子(きんす)をお渡し致しました」
五十人もの掛取人にいったいどんな手を使ったのであろうか。
五十軒の借金をすべて払ったのでは足りないことは勝之助にもわかっていた。
おきくはなかなか言わなかったが、聞き出してみて勝之助は驚いた。
おきくは「今回はこれだけでお願いします」と、三分の一払いや中には十分の一払いで済ませたというのだ。

おきくがこれほど掛け取りのあしらい方が上手になるとは……。
勝之助は考えてもみなかった。
その夜もおきくは、真吾の洗濯ものを夜中すぎまでかかって、夜なべ仕事に精を出した。
おきくのその姿に勝之助は心が痛くなり、この夜はついに早寝をすることになった。

幕府終焉の兆し

天保十五年（一八四四）は、十二月二日に「弘化」と改元された。
弘化年間（―一八四七）は、アメリカ、イギリス、フランスなど欧米の列強が、鎖国を続ける幕府に対し、開国の門をたたき始めた時期である。
弘化元年となった天保十五年の三月、琉球にフランス船がきて、幕府に通商を求めた。
その影響か、翌四月二十三日、越後の柏崎陣屋にも「海岸固め」の命令が出た。
越後の海岸線は長い。
柏崎陣屋では、北は三島郡の寺泊海岸の少し北から、南は鯨波まで、五十キロ近い海岸を守備することになった。

固める場所は、柏崎海岸四か所、鯨波一か所、三島郡寺泊海岸二か所、大和田村海岸一か所、野積村海岸一か所である。

このほか、佐渡往来の要所、出雲崎へは警備の助勢一手を繰り出し、柏崎の町に一手、陣屋内にも居残り一手を配置するという警備計画だった。

勝之助は、陣屋の真向かいに当たる虚空蔵後ろ山の御台場に配置されることになった。

勝之助の持ち場は、須藤正五郎を責任者に、士分の者は山本助三郎、江崎与租八、それに勝之助のわずか四人だけだった。

武器は二貫目筒一丁、百匁筒一丁、十匁筒四丁が配備された。これを士分の者が交替で撃とうというのである。

御頭奉行衆から示された「海岸固め」の図を見て勝之助は思った。

『場所によりて人数多少之有り候えども、一向少なき事也。出雲崎、柏崎御手当ては他の人数なるべし。広大なる海岸、わずか百人にも足りぬ人数にては、何の足りにもなりそうもなし』（弘化1・4・23＝柏崎日記）

（わずか百人ばかりの人数では、いざという時、何の役にも立ちそうもない。出雲崎や柏崎へは別の人数が行くが、陣屋に近いだけ私はまだいい方か）

こう思いつつ、勝之助は御頭奉行衆の指示に従った。

この事があってから柏崎陣屋では、「武器類調べ方」がひんぱんに行われた。

三日後の四月二十六日には、御頭奉行衆から表方同役全員が出て、まず火器の点検があった。

柏崎陣屋では、勝之助が赴任する前の天保八年（一八三七）六月、大阪でこの年二月に起きた「大塩平八郎の乱」に刺激を受けた生田萬という浪人が、農民と一緒に切り込みをかけるという事件があった。

「生田萬の乱」といわれる事件である。

陣屋で武器類の大がかりな点検をするのは、この時以来のことだ。

土蔵から運び出された鉄砲玉や松平家伝来の火矢を書院に運び、数を丹念に調べたうえ、札を付けて再び土蔵に収めた。

その二日後の四月二十八日には、具足、旗類の点検があった。

武器類の調べは、六月に入っても毎日のように続いた。

暑い最中の六月八日にも騎馬具足や旗指し物の調べがあった。

六月といっても陰暦のことなので、北国の柏崎でもうだるような暑さになる。

酷暑の中で重い馬具類を土蔵から持ち出し、点検するのは、なかなか重労働だった。

これにはさすがの勝之助もすっかり閉口した。

陣屋はまるで今にも外国船が越後海岸に現われるのではないか、というような騒ぎだった。

陣屋が「海岸固め」の武器調べ方でザワついている最中の五月十日、江戸城本丸が炎上した。

勝之助はこのニュースを四日後の五月十四日、村境い論争の実地検分のために出張先の長岡藩領で聞いた。

長岡城下まであと一里という街道の立場で、居合わせた長岡の商人が声高に話していたのである。

「昨夜、江戸より早飛脚がご城下に参ったそうですよ。なんでもうわさでは千代田のお城が火事で焼け落ちたとのことでございます」

弁当を遣っていた勝之助は、思わず箸を止めた。

「それは誠か」

「いや、よくは存じませんが、長岡ではもう大変なうわさでございました」

勝之助には思い当たる節があった。

この日の四つ（午前十時）すぎ、井伊兵部少輔の城下である与板宿を通りかかった時のことだ。

宿場から少し行くと渡し場に大勢の人が出て掃除の最中だった。

「何ごとか」

「明日、大守さまが江戸へ御発駕になるのでございますよ」

なにやらあわただしい様子で人足頭ふうの男が、さもわずらわしそうにこたえた。

（このうわさがもし実のことならば、恐ろしいことだ）

そう思いつつも勝之助は行列を長岡へ向けて急がせた。

この辺りは信濃川とその支流が入り組んで、渡し場が多い。

長岡から江戸へ出るには三国峠越えが普通である。与板藩の井伊兵部少輔はこの三国越えを行くらしく、長岡城下の入口にも仮の番所を建て街道を掃除の最中だった。

この江戸城本丸の炎上が柏崎陣屋に正式に伝えられたのは六月八日のことである。

諸家からの献金情報も一緒に届き、その額は五十万両余もあるとのことだった。

桑名藩でも「二万両も献納しなければならない」などとのうわさも流れた。

柏崎陣屋では三日前にも千五百両を江戸表に送ったばかりである。

勝之助ら勘定人には甚だ心配なことだったが、陣屋でのうわさはその後、立ち消えになった。

しかし、幕府はこの江戸城炎上から崩壊への速度が徐々に早まって行く。

幕府終焉の兆しは、この柏崎にもジワジワと寄せて来ていたのである。

陣屋の人々

世の中のザワめきが少しずつ柏崎陣屋にも伝わり、海岸固めの陣容が発表になった弘化元年四月二十三日は、勝之助一家の親代わりにしているお向かいのおばさの息子、竹内運八郎の結婚式でもあった。

運八郎は再婚である。

前妻のおみよとの間に子供がなかったため、勝之助の長女おろくと二男の真吾をよく可愛がった。

そうしたこともあって、勝之助はおばさに運八郎の父親役を頼まれていた。

運八郎は勝之助が赴任した天保十年（一八三九）は郷手代格だった。

郷手代は勝之助ら勘定人の下で民政を補佐する役である。

領民と接する機会が最も多い役どころで、領民に「御支配」と呼ばれた。

陣屋が支配する刈羽、三島、魚沼の三郡に、それぞれ一人から二人がいた。

領民にはめったに姿を見せない代官よりも怖い存在だった。

勝之助は運八郎を「運公」と呼んで目をかけていた。

だが、なかなか「格」が取れず、本役にはつけなかった。

現代でいえば、「見習い」がとれない社員候補とでも言おうか。

（運公ほどの気のいい奴はおらぬ。しかし、もう少し失敗を少なくしなくてはなんともならん）

勝之助は常々、考えていた。

ところが、勝之助が公事方を命じられた天保十三年五月のお役替え、つまり内部異動で、運八郎は郷手代格のまま寄合番になってしまった。

寄合番は全くの無役である。

陣屋では高齢の者や、よほど力のないもの以外には、めったにない役どころだった。

この人事があった時、勝之助は、

（運八郎の力のなさばかりが原因ではないのでは）

とも思った。

（妻との離縁も上役にはよく思われなかったのかも知れん）

同情はしてみても、いったん発表された人事がなんともならないのは、この時代も今も変わりはない。

婚礼の日、勝之助は九つ（正午）に役所から戻った。
お向かいをのぞくと、午後からの婚礼の準備で大忙しだった。
おきくも朝から手伝いに行った。
おろくと真吾も一緒である。
「勝之助さ。まず昼めしを食べてくれちゃ」
おばさは上機嫌で迎えた。
「おろくや真吾まで申し訳ござらぬ」
「なぁーに。二人増えようが、三人増えようが同じだ。それより勝之助さ。今日は私の亭主代わりをよろしくお願いします」
まるでわが事のように張り切っているおばさの姿に、勝之助も苦笑した。
仲人は郷使加藤才輔である。
七つ（午後四時）前までに料理もすべて出来あがる。
「ではそろそろ参ろうか」
加藤才輔にうながされて勝之助ら三人が嫁の家、江崎与租八宅へ向かった。聟入れの儀式のためである。
このじぶんの陣屋の婚礼では、まず聟が嫁の家に行って、嫁の親と固めの盃を交わした。

嫁の家では、親類縁者を招いて祝宴を開く。この宴に出る聟方は、仲人と親代わりの勝之助、それにおばさの三人だけである。
嫁入り道具も婚礼当日に運び込まれた。
『重箪笥、葛籠、夜具は風呂敷にて来る。夜着ふとん皆、新しく出来る。その外鏡台、針さし等いずれも見事にて、急度したる支度也。重だんすの中に、何が在る事かは知らず。人の噂に先の嫁に劣らぬ支度と申す事也』（弘化1・4・23＝柏崎日記）
「なかなかご立派な道具じゃのう。前の嫁入りの時に負けぬ支度じゃ」
竹内家の縁者たちがしきりに感心する。
竹内家から使いを出すこと七つ半（午後五時）。御輿入れは六つ半（午後七時）になった。
この輿入れがあって初めて聟と嫁の固めの盃が交わされるのである。
輿入れの嫁方の客は、江崎与租八夫婦と倅権平の三人だけ。それに聟と嫁、竹内家の客を含めると八畳間の座敷には十五、六人があふれた。
江崎与租八親子は、聟入れの酒ですでに大酔いの上機嫌で輿入れして来た。
「さあ、舅どの、これにて親類固めの盃を」
「これは、これは。誠に結構な婚礼ですなあ。いただきますぞ」

竹内家の縁者が差し出した大杯を、二、三ばい、グイッと飲み干すと、江崎親子はすっかり酔いつぶれてしまった。

そこへ珍客の乱入である。

男根に似せた大きなマッタケを持った若者たちが押し寄せたのである。

柏崎陣屋では、婚礼の席へ若者たちがこの大マッタケをこしらえて持ち込むことが慣例だった。

婚家では、この若者たちへ酒肴を出してもてなすしきたりだった。

「まあ、なんとみごとなマッタケ！」

女たちの歓声で座敷はたちまち盛り上がった。

大マッタケの祝いを受けて、運八郎の婚礼は、いよいよ佳境である。

唄が出るやら踊り出すやら大さわぎになった。

親代わりの勝之助が解放されたのは、八つ（午前二時）を回っていた。

運八郎の新妻の評判は実によかった。おきくも、

「お向かいのお嫁さんは大働き者で、極めて倹約好きでございます。おばさは誠にお気に入りのご様子。嫁に参り四日目から機織りを始めて、はや二反も織ってお金を一貫も稼いだそうです。それゆえおばさも一心不乱に糸をお引きですとか。運八郎どのも写し物でお金を稼いでおられ、何も稼がないでおるのはお尻ぐらいのものです」

と、羨ましがった。

この竹内家の人々が、思わぬ事件のとばっちりで別長屋に引っ越すはめになった。

弘化元年六月十九日のことである。

この日は朝から曇り空で蒸し暑い天気だった。

役所には珍しく御郡代衆がそろった。

郡代は陣屋の最高責任者である。禄高も二百石以上の上級武士で、陣屋の常勤ではなかった。

勝之助はこの日、安田村の土地争いの訴訟を調べる予定だった。

ところが、呼び出しをかけておいた安田村の者たちが出頭しておらず、しばらく待つうちに御勘定頭西垣武右ェ門が厳しい表情で役所の御帳部屋に姿を現わした。

（何か、様子がおかしいなぁ）

御帳部屋には普段、あまり出仕しない郷使の連中まで顔をそろえていた。

（これは何かあるぞ）

勝之助が不審に思っているうち、御帳部屋の一角が屏風で囲われてしまった。こういう時は、秘密の御用向きがある。

屏風の向こうでは、なにやら郡代と西垣らの動きがあわただしい。そのうち役所の下働きが呼ばれ、駆け出して行った。

「誰ぞ、しめ上げられる者がおるのではないか」

同役が小声でささやいた。

「いや、いっこうにわからぬ」

「こんな事は、これまでなかったことじゃ。御郡代、西垣さまの表情を拝見するとただ事ではなさそうだ」

勝之助ら公事方も気が気でない。

四つ半（午前十一時）になって、安田村の者一同が勢ぞろいした。

しかし、御帳部屋の屏風の内は、まだ緊迫状態が続いている。

（これでは調べもならん。もう少し様子を見るか）

勝之助が心に決めて間もなく、郷手代島橋助八郎が呼び出されたことがわかった。

「助八郎は御蔵に出ており、在宅してはおらぬ様子だ。今、迎えに行ったようだ」

「助八郎がいったいどうしたのじゃ」

公事方の勝之助らも当初、何が起きたのか、わからなかった。

だが、賄い方郷使加藤才輔が羽織り袴（はかま）姿で現われ、ようやく出仕した助八郎に、

「御扶持召し放ち。御領分御預所内に住むことも立ち入ることもまかりならぬ（追放の刑）」

と、申し渡したことがわかった。

郷手代、郷使の何人かの横領容疑事件の発覚である。

勝之助らにも他人事ではなかった。

そこへ今度は長屋が隣の渡部軍右ェ門へ、呼び出しの使いが出された。

軍右ェ門には、

「御役不応に付き、御役御免、二石減少寄合番に仰せ付けられ候」

との沙汰である。

（なんと気の毒千万なことか）

勝之助はようやく気を取り直して吟味を始めたが、一向に気が入らない。

そのうち役所の向かいから、女子供の泣き叫ぶ声が聞こえて来た。

役所の向かいは島橋助八郎宅である。

女子供の泣き叫ぶ声は、まぎれもなく助八郎宅からであった。

「なんという哀れな。まるで胸が張り裂けるような思いでござる」

勝之助は出頭してきた安田村の者たちの吟味もそこそこに、暮れる前に帰宅した。

隣の軍右ェ門宅へ回って見たところ、さすがにひっそりと静かである。

勝之助宅ではお向かいのおばさと運公が来ており、この日の一件をおきくと話しの最中だった。
「勝之助さ。聞いておるだろう。今回の一件」
「ああ、聞いた。何とも気の毒なことになったものじゃ。その話の前にまず行水じゃ。おきく用意を頼む」
勝之助が行水を終えたところへ、栗本作助と品川十四郎がやって来た。
二人とも同役の勘定人である。
「今、島橋の見舞いの帰りだ」
「いやはや、女子供たちは泣き叫ぶや、親類の者たちは怒るやら大混雑じゃった。お主も見舞いに顔だけ出したらいいだろう」
「そうするとしよう」
島橋宅を訪ねると陣屋中の者が次々に見舞いに訪れていた。
島橋一家の立ち退きはこの日の六つ半（午後七時）との沙汰だ。
同役や親類の者たちが、島橋一家を送り出すまでを見とどけるには耐えられず、勝之助は早々に引き揚げた。
「葬式よりも哀れだったのう」

「言われる通り。尤もじゃ」
品川と栗本うなずいた。
「助八郎本人はかまわぬ。哀れなのは子供たちじゃ」
「四人おったが、なんと致すことやら……」
「子供には甚だ、むごいことじゃ」
勝之助も全く同感だった。
それにしても島橋はいったいどうしてこういうことになったのか。
発端は去年の暮れだった。
お役所で、秋の内に納められているはずの欠米の代金が、未納になっていることが発覚した。
欠米とは、年貢米の俵に余分に入れておく米のことである。年貢米を運ぶ時、心ず米が俵から漏れて減るため、あらかじめいくらか余分に米を加えておくのである。
欠米は一俵につき、三升から五升を加えるのが普通だった。
柏崎陣屋では当時、越後領の米の一部を陣屋で入札し、現金に換えていた。
一俵から出る欠米は、時としてかなりの量になる。その分の米代も落札した肝煎から、郷手代、代官を通じてお役所に納められることになっていた。
その代金が届いていないことが勘定人の調べでわかった、というのである。

「勘定人からお代官に掛け合ったところ、お代官も驚いてすぐ郷手代と大肝煎をお調べになったそうだ」

「ところが大肝煎が申すには、昨年十一月初めごろ、確かに島橋へ四十両余りを上納したとのこと。受け取りもちゃんと有るとの申し開きだった」

品川と栗本が交互に説明した。

それからの二人の話を合わせてみると、島橋はお代官からの問い合わせに対し、

「その節、すぐにお代官へ納めました」

とこたえたらしい。

だが、お代官が手元を調べてみても、島橋から欠米の代金を納められた様子はなかった。

お代官が内々に島橋や同役をそれぞれ再び事情聴取したところ、一か月もたってから島橋の供述が、

「あの時の金子を段々思い出してみましたところ、御用に取りまぎれて夕方になってしまい、お代官へは明日にお納めしようと思って夜に帰宅致しました。その途中で取り落としてしまいました。あの四十両はさような事でありました」

と、変わった。

島橋は「ぜひ私に弁償させて下さい」と申し出た。お代官は島橋の言い分を入れ、島橋当人はもちろん、親類の衣類、諸道具までを売り払って金をつくり、その場をつくろった、という。

「しかし、金子を落としたのなら、その時、騒ぎ立てねばならぬはずではないか。それによくよく考えてみると、一か月も過ぎてから落としたと申し立てるなど全くおかしい」

勝之助の疑問に二人もうなずいた。

「いや、うわさによればこの他にも郷使の時、御普請方や賄い方などといろいろあったらしい」

「それも昨年、御頭御奉行衆がお調べになったようだ。だが、あまりにも昔のことで、年月が経っているからと不問にされたという」

「私が柏崎に引っ越して参った時は、確か郷使であった。されども子供の身なりといい、食べるものといい御陣内に及ぶ者なし、という様だった。それから郷手代になり、昼夜の飲食、仲間内ではまるで殿さまのようじゃった。ふだんも女一人と子守を一人置き、なに不自由なし、といった様子でのう。虫干しに三日もかかるほど衣装持ちだったとか」

島橋の豪勢な暮らしぶりは、陣屋内でもよく知られていた。引っ越し以来、貧乏暮らしが続く勝之助には、そんな金がいったい、どこから出て来るのか、不思議でならなかった。

小役人の不正は暮らしぶりから分かる。

渡部軍右ェ門もそうだった。

軍右ェ門の不正は、御帳部屋から江戸へ送った金の割戻金のピンハネだった。
この割戻金自体、「刎金」と呼ばれ、郷使、郷手代のピンハネ分のお金という性格があった。
だが、この刎金は個人にではなく、御帳部屋へ納める習わしだった。
ところが、軍右ェ門はそれを行わず、三十両余りを納めていないことがわかった。
いわばピンハネのピンハネである。

『渡軍四年前までは食べる事もならぬと申すぐらいの難渋、(略)私方よりも又一段上手の様子なり。然るところ御手代に相成り候えば、俄かに勢い出、この節は何一つ不足これなし。只今隣家にておきく申すには、この頃、かか衆の分だけの虫干しこれ有り。重ねたんすに一つこれ有り。座敷より庭へ出し、目の覚める様なりと申す。何程郷手代内入よろしきと申しても、わずか四年の間に右様の体になられ候ものではこれ無し。先ずこれまでの大借財これ有り。其の上、自分の勤め道具第一の事。なかなか家内、子供の形などへは及ぶものではこれ無し。おそるべしおそるべし』(弘化1・6・19＝柏崎日記)

郷使、郷手代は、在方の村々や町方の者と最も深くかかわる役どころである。
接待や貢ぎ物はつきものだった。
よほど身持ちがよくないと、誘惑には勝てなかったであろう。

勝之助のように引っ越し貧乏が長く尾を引く者には、島橋や軍右ェ門宅のような暮らしは、決して真似ができなかった。
たとえ余分な金が入ったとしても、自分の仕事のために使う勝之助である。
まして女房や子供たちの衣類までにはとてもまわらなかった。

この騒動があった翌六月二十日、運八郎は長屋替えを命じられたのである。
長屋も役どころやその家の格式で与えられていたこのじぶんのことだ。運八郎一家にとっては、とんだとばっちりだった。

子供たち

弘化元年九月二十三日、越後・柏崎は、昼前降っていた小雨が午後になってやんだ。
桑名藩柏崎陣屋の勘定人渡部勝之助は、二週間余りにわたった三島郡の検見を終え、陣屋へ戻る駕籠に揺られていた。
前夜、寺泊の宿から「明二十三日帰陣」と先触れを出しておいた。

先触れを受け取ると、同役や近所の人たちが迎えに出るのが、このじぶんの陣屋の習わしだった。

柏崎の北に位置する三島郡から帰陣する場合は、柏崎口の閻魔堂あたりまで迎えに出た。

（おろくと真吾もこのあたりまで迎えに出ておるはずなのだが……）

勝之助は駕籠の中から、街道に目をこらして進んでいた。

だが、二人の姿が見つからないまま、勝之助ら検見の一行は夕刻、陣屋に着いた。

「おきく。子供たちはどうしたのじゃ。迎えに出さなかったのか」

自宅に戻るなり勝之助がおきくに尋ねた。

「ええッ？」

おきくは合点がいかない様子で、

「昼すぎ、守りと三人でお迎えに出ましたのに。途中で会いませんでしたか」

夫に問い返した。

「なんと。昼すぎに迎えに出たと――」

「はい。おとっさがお帰りになると大喜びで、真吾は守りにおぶさって出かけました。このじぶんになっても戻らぬとは……。こりゃあ、大変！」

おきくが顔色を変えた。

「まず、お民に守りの家に行ってもらえ。三人であるいはおるかも知れん」

お民は、向かいの竹内家の預り娘。おろくより四つ年上の遊び友だちである。

お民はすぐ飛び出して行った。

真吾の守り娘は十二歳になる。

おろくより七つも年上だが、少しゆったりとしたところがあり、

「おろくちゃと同じぐらいじゃ」

と、近所の女衆はいっていた。

「陣屋の外へは子供たちだけでは出すなとあれほど申し付けておいたではないか」

勝之助は旅装束のまま、おきくをしかりつけた。

その声を聞いてお隣や向かいの竹内のおばさらも駆け付けて来た。おばさは、

「なぁーに。おろくちゃはしっかりしとる。おっつけ戻って参りましょうぞ」

と、おきくを慰めた。

しかし、おきくは堪え兼ねて、ちょうちんを持ち出すや、長屋を走り出た。

勝之助は御頭奉行衆へ帰陣の報告もまだだったことに気付き、さっそく着替え、検見に同行した江崎与租八と共に届けに出た。

帰陣のあいさつを済ませ、長屋に戻ってみても、おきくは帰っていなかった。

（まさかのことはあるまいと思うが、いったいどこへ行っておるのやらあの三人は……）

勝之助は土間の上がり縁に座り込んで案じた。

外には再び小雨が、シトシトと降り出していた。

家の中に明りは一つもない。

（なんと致したるものや）

すっかり暗くなった土間に、しばらくたたずんだまま、勝之助は思案した。

そこへ、おきくが雨に濡れて戻った。

「居ったか」

おきくは黙って首を横に振る。

「座り地蔵のあたりまで行って見ましたが、見つかりません。……雨は降って来るし、ローソクもなくなり……戻って参りました」

泣き声で報告した。

おきくの話では、おろくの子守だったお弓の兄八十七と、守り娘の家でも母親が探しに出てくれているという。

勝之助も、閻魔堂まで出迎えてくれた向かいの運八郎と、役所の下働きの宇之助に尋ねてみることにして家を出た。

だが、二人とも、「おろくちゃと真吾には会わなかった」、とのことだった。

（もう間もなく御門の定刻も近い。いかが致すべきだろう）

柏崎陣屋は五つ（午後八時）に門が閉まる。

このじぶん、武士はたとえ陣屋の下級武士であっても外泊することはない。

公用で外泊する場合でも、きちんと届け出て、許可を得る習わしだった。

勝之助とおきくが思案にくれていると、外で子供たちの声がした。

「おう。戻ったか」

二人はあわてて外へ飛び出す。

おろくと真吾が、守り娘の母親や八十七に連れられて、刈羽役所の前をこちらに向かって来るところだった。

真吾は守り娘の肌におぶさっているようだ。

「おとっさ。おとっさ」

勝之助の姿を見つけたおろくが、駆け出して抱きついた。

「おろく、どこへ行っておったのじゃ。おかっさも心配して、泣いておったのじゃぞ」

「申し訳のないことで、旦那さま」

子供たちに代わって守りの母親が頭を下げた。
おろくと真吾は、最初、閻魔堂の前で勝之助が来るのを持ち受けていたのだという。
ところが、なかなか姿が見えず、もう少し先の四ツ屋のはずれまで出向いた。
そこで待っていたが、どこでどうすれ違ったものやら、検見の行列には出合わなかった。
待ちくたびれて戻る途中、探しにきた守りの母親らと出合った、ものとわかった。
「そうか、そうか。暗くなるまで待っておったか。それはご苦労じゃった。おきく、三人に土産の柿をむいてやってくれぬか」
勝之助は、子供たちを叱りはしなかった。
おろくと真吾、守り娘も土産の柿をもらって大喜びである。
おきくもホッと胸をなでおろした。
「さあ、めしにしよう。おきく、用意を頼む」
「あい」
夕食の準備どころでなかったおきくが、愛想のよい返事をして台所に立った。
「めしを終えたら、ご近所へあいさつに行かねばならんのう」
「はい。誠にお騒がせ致しましたからねぇ」
検見帰りのとんだ一日だった。

それから二か月後。
十一月十五日のことである。
陣屋のあちこちの家で、男子の元服や三歳児の髪置きの祝いがあった。
髪置きは、それまで短くしていた子供の頭髪を、初めて伸ばす儀式である。
平安時代から始まり、現代の七五三にもつながるという。男の子も女の子も数えで三歳の十一月十五日に行った。
勝之助宅でも真吾が髪置きの儀式を行う歳になっていた。
このじぶんは陰暦だから、越後の十一月はもう冬である。
柏崎陣屋にもこの日、北からの季節風が吹き、寒い一日になった。
「今日は栗本さまや金子さまのお宅でも元服なされるようです。真吾の髪置き祝いはいかがなされるつもりなのです」
おきくは春ごろから勝之助に頼んでいた。
そのたびに勝之助は、
「初節句の折、初幟（はつのぼり）さえ致さぬものを髪置きなぞやらんでいい。七つの上下着の節は桑名に参って賑々（にぎにぎ）しくやろうぞ」

と、なだめて来た。

この日も「またか」とうんざりした勝之助だが、

「さようだのう。客を迎えることはとてもできぬが、内輪だけで祝うとしようか」

と、昼に赤飯を炊くようおきくに言い付けた。

長男の鐐之助を桑名に残して来たおきくにとって、真吾は柏崎の長男である。

「鐐この祝いは、この柏崎ではやりたくてもできませぬ」

このようにかきくどかれて、勝之助もさすがにおきくを哀れと思ったのである。

「神棚にもお神酒を上げておこう」

勝之助がお神酒の用意をする姿を見て、おきくの機嫌も戻った。

勝之助も実は、髪置きといわず、初幟もきちんとやりたかった。

だが、引っ越しの際、借金した二両余りの返済もままならない貧乏暮らしでは、どうにもならなかった。

（髪置き祝いとなれば、真吾に上着の一枚も新しく拵えてやらねばならん。それも出来兼ねる財状では内輪だけで祝うしかないわ）

陣屋長屋の窓越しに他家の元服祝い、髪置き祝いの歓び客の、声高な口上声が聞こえてくる。

勝之助はそれを聞き流して、神棚に手を合わせ、気を取り直すように、

「おきく、真吾の上下着の時は、父上や母上も一緒に精一杯やろうぞ」

台所に立つおきくの背へ声を掛けた。

「あい」

おきくも米をとぐ手を休めて、ニコッと笑顔を返した。

そのおきくのほおには涙がつたっていた。

目が合った勝之助も辛い。

堪らなくなって、

「おろく、真吾。昼は赤ままだぞ。きょうは真吾の祝いじゃ」

座敷を走り回っていた二人を、照れ隠しぎみに呼び寄せ、力いっぱい抱きあげた。

勝之助が真吾の髪置き祝い、おろく七歳の帯解けの祝い、それに二女おりんの七夜祝いの三つを、まとめて行ったのは、翌弘化二年（一八四五）十一月十一日のことである。

おりんはこの年の九月五日に生まれていた。

勝之助とおきくは、生涯に三男三女をもうけている。

長男が桑名に残した鐐之助、長女は桑名で生まれた後に柏崎へ連れてきたろく、二男の真吾以下二女りん、三男行三郎、三女のてつはみな柏崎で生まれた。

勝之助は子煩悩な父親である。

検見の帰りには子供たちへの土産を欠かさなかった。それもおもちゃと食べ物を必ず一緒に買ってきた。

勘定人といえば、町方の大店の主人や町役人、在郷の大庄屋らとの交際もあり、うま味のある役どころである。

だが、勝之助はそういう人たちとのつき合いは大事にしながらも、賄賂や心づけを受け取るような役人ではなかった。

領民を裁く公事方を兼任するようになって、それがいっそう厳しくなった。

三つの祝いをまとめてやった弘化二年の年も、貧乏暮らしが相変わらず続いていた。

子供たちの晴れ着は近所のお古。肌着は、おきくの着物を解き、仕立て直して着せるというありさまだった。

七夜祝いのおりんにだけは、

「生まれ児にお古では……。あまりにもかわいそうじゃ」

と、お向かいのおばさが晴れ着を祝って下さった。

当日、勝之助宅は朝から大変な賑やかさだった。

おろくの子守だったおゆき、役所の下働きの市平、福松らが料理の手伝いにやってきた。

客は栗本、山本、金子、品川、渡軍のカミさんに、吉田のお袋、竹内のおばさと嫁、取り上げばば（お産婆さん）、医者ら十二人。

その四日後の十五日には、子供だけを招いた。

「子ども客」というこれも柏崎陣屋の習わしだった。

いつも遊んでくれる近所の子供たちを招待するのである。

このほか、陣屋には「同役振る舞い」や「女客」といった同様の習慣があった。

狭い陣屋内で、毎日顔をつき合わして暮らす生活に、メリハリをつけ、心を通わせ合おうという陣屋社会ならではの知恵とでも言おうか。

費用もかかったが、このつき合いを欠かすわけにはいかなかった。

さて、子供客の方だが——。

この日もおゆきが早朝から手伝いに来てくれた。

客の子供は、品川の息子五郎作らの兄弟二人と小林の娘、竹内のお民の四人である。栗本の子も呼ぶことにしていたが、同様の祝いがあって互いに遠慮した。

だからという訳ではないが、おろくの子守りだったお弓とその兄の八十七、お駒、竹内のおばさと出入りの女たちも客に招いた。

おろくと真吾は昼前、近くの諏訪神社と金毘羅さまへ参詣した。
小雨が降り、寒かったが、二人は古着の晴れ着でも大喜びで、元気に帰ってきた。
子供客のお膳には、
〈こわめし（赤飯の類）、おぼろ豆腐、鱠（カマスに似たカマボコ用の魚）、ハタハタ、ハタハタの魚でん、ニシン、ダイコンの煮付、カボチャの煮付、ダイコンのあえもの〉が並んだ。
勝之助も一緒にお神酒をいただく。
大酔い。
真吾と五郎作が大騒ぎする中、勝之助はずっかり酔いつぶれて、こたつに寝込んでしまった。
夜は夜で、子供たちの親が詰め掛けた。
昼の献立のほか、カマボコとネギの鍋ものに大豆いりも出る。
一寝入りした勝之助はまたも酔いつぶれてしまった。
嬉しかったのである。

『七つ（午後四時）前に子どもは帰る。それより品川夫婦のうち、手分けして参られ候様申す。かか衆、栗本、十四郎見え候。小使八平、宇の助。渡軍のかか衆、お隣のおきの、志田のお袋皆々暮れ合いごろより見える。新町今井屋の親父も来る。又酒初め（略）皆々機嫌にて大分賑々敷成

る。真吾共々騒ぎ付ける。（略）四つ半（午後十一時）ごろまでに追々引ける。おゆきと女は内々にて泊まり貰う。夜具はお隣のお預りものこれ有るを借用致す。先々大安心也。ろくな着物も出来申さず、馳走と申せばこの如く也。されども大分かかり候。諸方より祝い貰う。お隣より真吾、天神さまの箱入れ貰い大喜び也』（弘化2・11・15＝柏崎日記）

だが、この喜びも勝之助一家にはつかの間のものになった。
この九日後、おりんが急死したのである。
陣屋には一メートルもの雪が積もり、寒い日だった。
おりんは七夜祝いのころから、咳がひどく、元気がなかった。
この日も激しく咳こみ、痰が詰まったのが原因だった。
役所に出ていた勝之助が、
「オトッサ。ちょっと来てくんなぇ」
と、迎えに来たおろくと駆け戻った時には、すでに息を引き取った後だった。
おりんの葬式は哀れだった。
深い雪の中で、小さな棺が凍りついた土の中に埋められた。

「冷たかろう。冷たかろう」
と、おきくが綿入れと厚い袢衣（半てんのこと）をおりんに着せてやった。
おりんの顔色は生きている時と少しも変わりがなかった。
「まるで眠っているようだのう……」
入棺に立ち会った竹内のおばさがつぶやいた。
その夜、おきくは乳が張って仕方がなかった。
「真吾、飲んでおくれ」
「イヤだッ。イヤだ」
いくらおきくがなだめても、真吾は飲んでくれず、おきくは仕方なく絞り出した。
ところが三日もすると、真吾がおきくの布団に入って乳を飲むようになった。
（これまでそんなことはなかったのにのう。あれほど飲めといっても嫌だとダダをこねていたものが……）
勝之助も不思議に思った。
真吾は、昼はいつもおきくに寄り付きもしない。
だが、夜になるとおきくにくっついて乳を飲む日が、十二月に入っても続いた。
ある夜、

「真吾、お前はいつまで甘えくさっておる。毎夜、乳を飲むなど横着ものののすることだぞ」
勝之助がしかり付けた。
「おれは最早、兄ちゃではないぇ。おりんが死んだから、おれがまたネンネになったのだ」
真吾の言いぐさに勝之助は二の句が出なかった。
（こやつ。何もかも承知して甘えておるわい）
勝之助は、おりんの死も二人の子供を着実に成長させていることに初めて気付いた。

弘化三年（一八四六）の年が明けて、おろくは数えで七つ、真吾は四つになった。
桑名の鐐之助は九つである。

元旦。
柏崎では明け方、雪が吹きかけた。
だが、日が高くになるにつれ、太陽も照るまずまずの正月日和りになった。
真吾は相変わらずおきくと一緒に寝て、朝になっても乳を飲んだ。
妹、おりんの死で、
「おれはもう兄ちゃじゃなぇ」

と、放っておけばいつまでも乳を放さない。
無理に起こそうとすると大駄々をこねる。
目覚め切れば、実におとなしくなるのだが……。
勝之助にはそれが不思議でならなかった。
この朝も、ひと騒ぎあった。
ようやく収まって雑煮を祝い始めた時だった。何を思ったのか、
「桑名の兄ちゃも呼びたいなァ……」
突然、真吾が言い出した。
「……どうした真吾。桑名の兄ちゃのことなどを……」
思わず箸を止めた勝之助とおきくが顔を見合わせた。
「……」
おろくも弟の顔をのぞき込む。
(あれで、ちゃんと鐐之助を思っておるわい)
勝之助とおきくの箸がすっかり進まなくなった。
「……なんでもなぇ」
みんなに見つめられて、真吾がかぶりを振った。

真吾がなぜ、鐐之助のことなどを言い出したのか。
勝之助には思い当たる節があった。
それは昨年(弘化二年)暮れのことだ。

「勝之助どの。そなたにも桑名から手紙が届いておるぞ」
同役の一人が、役所で御帳部屋から手紙を持って来てくれた。
(この節に手紙とは……。桑名でなんぞあったか)
勝之助は一抹の不安にかられた。
「本日、川澄どのが着陣した。その荷駄と一緒だったようじゃ」
十二月十一日。桑名から着いた上役の荷物の中に、平太夫からの日記も一緒に入っていたのである。
このじぶんは、今のような郵便制度はない。
飛脚に頼るか、同じ藩士の足に頼るしか、手紙を運んでもらう術はなかった。
平太夫は、勝之助の上役が柏崎に赴任すると知って、ことづけを頼んだのである。
七つ(午後四時)すぎ、帰宅した勝之助はさっそく日記に目を通した。
「おお、品川の弟ごが御下横目に取り立てられた。さっそく知らせてやらねばなるまい」

同役としてつき合いのある品川十四郎の弟、川瀬六之助の出世を、平太夫が日記に書いていた。

品川宅は、年の瀬のスス払いの最中だったが、

「これは寝耳に水。まったく知らなんだ」

と、喜んだ。

「ちょうど、スス払いの祝いを始めるところだった。勝之助も一杯やって行け」

無理に酒を勧められて、二、三杯、勝之助はご馳走になった。品川宅には手伝いの衆も大勢いて、

「渡部さま。桑名からの御手紙、日記が届きましたか。後ほど日記拝聴に上がりたいものです」

「おう。参れ〳〵」

「勝之助。それがしも後で参るぞ」

「お待ちしております」

夜に入って勝之助は向かいのおばさも呼んで日記読みを始めた。

三枚ばかり読んだところで、

「どうだ。面白いところかな」

と、品川の声。一緒に何人かの者がドヤドヤ上がり込んできた。

「やッ、栗本、長瀬、広田か」

「いやあ。今、川澄の帰りでのう。桑名からの手紙が届いたというので、寄った。すまんのう」

「なんの、なんの。今、お茶を入れます。それから、それから。今、読み始めたところですゆえ」

「それは有り難い」

今ではすっかり陣屋の名物になった勝之助宅の日記読みだった。

陣屋の武士たちは、遠く離れた桑名の情報を、この平太夫の桑名日記に頼った。

手紙が届くと勝之助宅のいろり端は、いつも近所の人たちでいっぱいになった。

「十月十二日、上天気。おばば又、キノコ狩りに誘われ、横村のカミさん、長谷川萬司のカミさん、九蔵才領にて子供も二、三人ついて行く。……繚之助手習いより帰り、凧を張ってくれと言うゆえ、ぶか凧を張ってやり候ところ、寛世紙が欲しくてならぬとて平治に貰い候……暮れ合いまでに六間（約十メートル）余、かんぜよりにして、明日から風があるとて仕舞うておく……」

勝之助が張りのある声で読む。

「これはこれは細かい。目に見えるようだのう」

品川が感心した素振りで一堂に語りかけた。

「さよう。繚之助の喜ぶ顔が浮かんでくるぞ」

栗本も上機嫌である。

勝之助が日記読みを続ける。

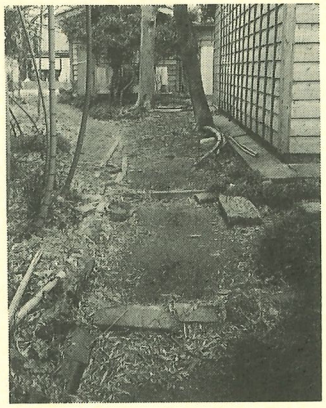
「十月十六日。天気。少し西風あり。暖かなり。……八つ（午後二時）すぎ、鐐之助、この間張ってやり候凧を揚げに、太糸で揚げに行くと言うゆえ、そんな小さな凧があるものか、細い糸で揚げやれと言えば、糸が強く、くびりこうって（くびれて）揚げられんと言うゆえ、よりを戻してやると揚げに行き候えども、風吹くかと思えばやむ。やむと思えば又吹く。風定まらぬゆえ、ろくに揚がらぬとてやめて帰る。……出産これ有り候ても真吾おとなしく、母の側へ行かぬよし仕合せなり。おろく、真吾に食べさせる姫まんじゅう買いに行く。真吾にばかり食べさせ候よし。おとなしき事。当方鐐はそれに引き替え一人じめ。……朝起きると戸棚を探すゆえ、余っぽどよく隠しておかぬと見つけ出し、一気に食うて仕まう。毎度言うてきかせるには、柏崎に居て見ろ、三人の兄じゃとて、なんでもなかなか手前の口へは入りはせぬは。それになんでもかも伯母（平太夫の娘のおなかのこと）にもやらず一人じめにする。悪いやつと言われても、何と言われても平気でいる。越後からな、鐐が言う事きかずば、と言うと、頭を振り立て、大きな声してジャ〳〵ブシャ〳〵〳〵ヤイ〳〵などと聞かぬ振りするなり……」

「まるで鐐之助がここに居るようじゃのう。栗本どの」

品川が声を掛けると、栗本も、

「ほんに、ほんに見えるようだ」

日記読み——NHK スペシャル「幕末転勤物語」より（NHK 提供）



現在の柏崎陣屋跡
（柏崎市大久保）

と、すっかり感心した。この夜の日記読みは四つ半（午後十一時）すぎに終わった。

その翌十二日夜のこと。

勝之助はこたつでおきくと久しぶりに桑名の思い出話を語り合った。

そこへ、

「桑名？」

と、真吾が聞きつけて来て、

「おらも桑名へ行きたい」

「なぜだ。真吾？」

「兄ちゃに凧揚げてもらうは」

「真吾め、昨夜の日記のうち凧のところを聞いていたとみえるのう」

「あい。ほんにかわいらしいことでございます」

勝之助はおきくと、目を細めて真吾を見やったのだった。

この元旦、勝之助はその時のことがフッと頭に浮かんだ。

「真吾め。あの時の日記読みを思い出したのであろう」

「真吾にも日記がわかるのでございますねぇ」

「そうだのう。血というものは不思議なものじゃ」

勝之助はすっかり冷えてしまった雑煮をすすった。

「うむ。越後のもちはうまい。鎌こにも食べさせたいものだ」

「ほんに」

勝之助とおきくは、遠く桑名で暮らす鎌之助を思いやった。

柏崎で大晦日の年取りの膳を囲んだ時もそうだった。

（この席に鎌こが居ったら、どんなに賑やかなことか）

（桑名でも、おじいさ、おばあさと年取りの膳を囲んでいることでしょうが……会いたい、会いたい）

勝之助とおきくは、お互いそう思った。

離れ離れになってもう八年になる。

親が胸の内にしまっていた気持ちを、突然、真吾が口に出したので、二人はすっかりまごついてしまったのである。

勝之助は気を取り戻し、箸を置きながらいった。

「間もなく六つ半（午前七時）の触れが参る。早く済ませて子供たちを着替えさせようぞ」

「あい。おろく、真吾。正月の晴れ着に替えましょう」
「うん」
子供二人は大喜びで膳を立ち、座敷に駆け込んだ。
晴れ着といっても例のお古を仕立て直し、火のし（現在のアイロンのこと）を当てたものである。
（今年こそ新調の晴れ着を着せたい）
と、おきくは思ったのだが、年末の掛け取りが多く、一両近く足りなかった。
子供たちの晴れ着までは、とても手が回らず、古いものを取り出しておいたのである。
それでも晴れ着は晴れ着である。
子供たちは大喜びで着替えた。
真吾も桑名の鐐之助の事など、すっかり忘れたように座敷をはね回った。

この弘化三年の正月、桑名の平太夫は十五日のお役替えで、御足米一石加増の上、御破損奉行格に昇進した。
奉行といっても地方の藩ではそう高い身分ではない。
奉行格といえば、係の最古参といったところである。
御米蔵役人の最古参である平太夫には、むしろ遅すぎた昇進であった。

この弘化三年は、二月六日に仁考天皇が崩御し、孝明天皇が践祚（せんそ）した。
黒船の到来はいよいよ激しく、四月五日にはイギリス船が琉球に渡来した。
その二日後の七日にはフランス軍艦が渡来し、五月十一日には同じフランスの船が琉球に来て通商を求めた。
五月二十七日にも、アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルが軍艦二艦を率いて浦賀に現われ、国交を請う。
ペリーの到来より七年も前の事で、幕府は国交樹立の願いを却下した。
また、六月にはフランス軍艦が長崎へ、デンマーク船が浦賀へ渡来し、八月にもイギリス軍艦が琉球の海陸を測量するなど黒船の渡来が相次いだ。
桑名でも異国船の話題がひんぱんだった。
紀州沖や遠州沖に現われた異国船の話がもっぱらだったが、七月三日には桑名とは対岸の三州（三河国）渥美半島沖に黒船が出現し、騒然となった。
この日の桑名は、明け方から雨だった。その雨も平太夫が御米蔵に出るころには上がって、日も差す天気になった。
「平太夫どの、三州渥美郡奥村と申すところの沖合い三、四里ばかりで異国船を見たとのことじゃ」

「田原さま（田原藩三宅備前守）のご領分で、海岸固めに大わらわだとか」
「なにぶん御人数が少ないところゆえ、猟師、あるいは百姓どもまで呼び出して竹やりなどを持たせているとのことだ。岡崎さま（本多家）へも御助勢を頼んだそうな」
同僚が船留番所あたりで仕入れたのであろう。黒船の情報をツバを飛ばしながらまくしたてた。
「岡崎さまも御難じゅうなことじゃ」
平太夫の反応を待ち兼ねていたように同僚の一人が、
「それよ。それよ。岡崎さまほどのご家中でも、具足（鎧）、その他武器はみな質に入れておられたとのことじゃ」
「それで御城下は上へ下への大騒ぎというわけか？」
「そうじゃ。ようやく人数がそろって、さあ、これから繰り出そうとしたところ、黒船はもう東の方向へ見えなくなりました、と田原さまより断りの使者が着いたとか」
「なんとしたことじゃ。岡崎さまともあろうお家が……」
「そうは言っても、この桑名城下でも似たようなものじゃ。して、その異国船だが……」
「おお。なんでも千石積みの船が三艘、通りかかったそうじゃ。その三艘とも引き寄せられ、うち二艘は二日も止めおかれたという」
「その折、遠くから見ていたという船頭が戻ってきて言うことには、異国船の大きさは日本の千

石積みが伝馬船ぐらいに見えたそうじゃ」
船留番所で武八という船乗りから聞いた話だった。
平太夫は、この前、鐐之助が異国船の話を聞いて怖がっていたことを思い出した。
大人たちの話を聞いていた鐐之助が、
「異国の船はどんなんだ？　オラおっかねぇ、おっかねぇ」
と、平太夫に抱きついてきたのだった。
「ここまでは来ないから、安心だ。怖がることはないぞ鐐こ」
「そんでもオラ、おっかねぇ。本当にここまで来ないかぇ」
鐐之助は信じられない様子だった。
「ああ、大丈夫だ。もし来なったらおじいさが追っぱらってやる」
「本当かぇ、おじいさ？　そんならオラ安心だ」
「そんならもう寝なぇ、寝なぇ」
平太夫の力強い言葉を聞いて、ようやく床に入った鐐之助だった。

弘化三年（一八四六）六月八日。
柏崎は祇園祭りの最中だった。

祇園社は八坂神社ともいった。
陣屋と柏崎の町を隔てる鵜川の河口東にあり、海風、川風が吹き寄せ、夏はなかなか涼しい。
祇園祭りの時は、柏崎の花街である新町あたりから灯籠が軒々に出て、祭り気分を盛り立てた。
花火もこの祭りの名物で、子供相手の花火売りもたくさん出る。
子供たちは火縄の火種を持ち、ところどころで花火を打ち上げては、歓声をあげた。
十日の夜は、陣屋の若者たちが祇園社に出て、本格的な花火を上げた。
真吾もこの花火見物が大好きだった。
この日も七つ（午後四時）ごろから、
「つれて行きない。つれて行きない」
と、勝之助にせがんでいた。
夕方、おろくも連れて見物に出る。
二十本ばかり見たところで直吾が、
「もう帰りたい」
と、言い始め、勝之助は浜風の涼しさを楽しみながら陣屋に戻った。
それから一週間たった。
六月十七日。

真吾が昼ごろから熱を出した。
勝之助が腹を見たところ、体がだいぶ熱い。
「真吾、しばらく寝ていやれ」
「熱、なんにもなぇ」
と、勝之助を振り切って、腹がけ一つで七夕の船を拵う小屋へ駆け込んだ。
勝之助があわてて追いかけたが、真吾はいっこうに気にしないで走った。
（そうか。今年から真吾も七夕の仲間入りじゃった。寝てはいられぬわけか）
柏崎の夏は、七夕が子供たちの大きな楽しみの一つだった。
五文、十文と銭を集め、それで子供たちは大きな七夕の船をつくった。
真吾はこの七夕の仲間入りがよほど嬉しいとみえ、二、三日前から、
「おれも七夕祭りに交ざった。もう大きくなったからだねぇ」
と、おきくと勝之助にしきりに自慢した。
「真吾はそれでも乳を飲むのはどういうものだ？」
「えっ……。おとっさの馬鹿めがなぁ」
顔を赤くしながら食ってかかった。

その夜、真吾の熱は次第に高くなった。
一角丸を飲ませたが、真吾はうわ言ばかり言って、おきくは明け方まで眠れなかった。
真吾の熱は二十六日までも続いた。

蒲原へ出張していた栗本が戻って、勝之助宅にあいさつに来たのは二十日のことだ。
勝之助も夕方、無事帰陣の歓びに栗本宅を訪ねた。その時のことである。
「勝之助さ。松前沖に異国船が三艘現われたそうじゃ」
平太夫の日記で異国船が出没していることは勝之助も知っていた。
だが、それは太平洋側のことばかりと思っていた。
日本海にも異国船が現われるようになると勝之助たちも無関心ではいられない。
「なんでも昨日、松前から戻った出雲崎の者の話では、この者が松前を出る時、城下は異国船騒ぎで大変だったそうじゃ。南部、津軽あたりへ飛脚を立てるやら、江戸表へ注進するやらで大騒ぎだったそうだ」
「して、どのあたりに異国船は現われたと申す?」
「それが松前のはるか沖合いとのことだ」
「長崎の港やら遠州沖、房総沖などでは時々、見たという話は聞く。御大名方も御暇をとって帰

国なさっているとも聞いたがのう。松前の沖あたりへ現われるとなると、この柏崎あたりへも……」
「そうだ。いよいよ心配なことじゃ」
栗本宅から戻った勝之助から、この黒船の話を聞いたおきくは青くなった。
「あなた。ご当地は心配ありませぬのか」
「そう心配するまい。柏崎の港に異国船は入れぬ」
「それでも……」

こんな事があって、柏崎は七月に入った。
真吾の熱も去り、一日には待ち兼ねた七夕の船づくりが始まった。
『今夏より七夕の人数に真吾加わり、先ごろより度々五文、十文ばかりづつ銭集めに参る。麦わらにて大船拵い、中へ七夕さまの御宮これ有り。船の頭へ鎗の馬れんのと申すもの銘々子どもの分持ち寄り飾り立て申し候。なかなか立派也。真吾も両三日以前に馬れんを運公に拵うて貰い、大歓びで船へ立て置き候。(略)石取り(桑名の夏祭り)の様に四方八方にて太鼓たたき立て甚騒々しき事也。真吾の太鼓は江戸土産に善光寺より買うて参り候(略)七夕の太鼓、たたき

様は皆一様にて、子供よく覚え居る。真吾もいつか覚いてよくたたき申し候』（弘化3・7・1＝柏崎日記）

桑名の石取祭りは、「日本一やかましい祭り」と異名をとる。

現在では八月一日の午前零時から鉦（かね）、太鼓をたたき出し、夜っぴいてたたき続ける。

桑名で暮らす鐐之助もこの祭りが大好きで、平太夫にばちを作ってもらっては町内の太鼓をたたきに行った。

柏崎でも真吾が七夕祭りの太鼓に夢中になっていたのである。

七月の柏崎のもう一つの楽しみは盆踊りだった。

この弘化三年は、検約令もなく誠に派手な盆踊りが行われた。

まず衣装だが、「ちりめん、絹類届け次第」で許され、「三味線、太鼓、鼓（つづみ）なども勝手次第」となり、各町内で揃いの浴衣（ゆかた）をつくって大張り切りだった。

おきくにも花街の新町今井屋から、紫ちりめんの襦袢（じゅばん）と踊り浴衣五枚ほどの仕立ての注文がきた。

町方の浴衣を武家の女房が縫うのである。

だが、一枚七十文の仕立賃は、おきくにとって有り難い現金収入だった。

さて十七日は陣屋も御門留、つまり門限が無くなった。

この日は、町方の踊りが御門先まで繰り出す。陣屋の人たちも夜、遅くまでこれを見物に出るからである。

おきくも、おろくを連れて見物に出た。

見事な揃い衣装で町方の者が、十人、二十人と連をつくり、御門先へ繰り出して来た。

品川宅に呼ばれて一杯ご馳走になり、大酔いして戻っていた勝之助に、おきくが興奮ぎみに報告した。

「今年の盆踊りは、みなさん、桑名の石取祭りよりも見ごとな身形（みな）りでございました。あのような衣装は見たことがございませぬ」

「うむ。町方の者たちの心意気であろう」

酔眼もうろうとして手枕を楽しんでいた勝之助へ、おろくがとんでもない事を口にした。

「おとっさ。あのな、御門先に来た踊りの中に、江崎の例さが入って行きなった」

「……例さだ……」

「みんながあれ、例さだ、例さだと声かけなったら、手拭いで顔隠して行きなったぜぇ」

「……」

びっくりした勝之助の、手枕がはずれた。

「例さ」とは、勝之助が親しくする江崎与租八の五男例之助、十七歳である。

素行が甚だ悪く、このごろでは新町の傾城（女郎屋）通いもしていると、勝之助も聞いている。

例之助は、縫いくるみの襦袢を着て、緋ぢりめんの女ものの帯を締めていたというのだ。

勝之助はすっかりあきれ返った。

（もちろん、家からは袴をつけて出たのであろう。いずれかの家で支度替え致したと思うが、与租八はこの年、悩みのタネが尽きぬようだ）

不肖の子を持った同僚を思うと、勝之助の酔いもさめる思いだった。

例之助の踊り姿に気付いたのは、おろくばかりではなかった。

「例さの姿、ありゃ、いったいなんだ」

陣屋では翌日から、例之助のうわさで持ち切りであった。

（大事にならねばよいが……）

二日後の七月十九日朝。

勝之助の心配が当たった。

江崎与租八が思い詰めた顔で勝之助宅へやってきた。

「五男例之助の身持ち宜しからず、昨夕、勘当に致した。届け出を差し出すゆえ、お聞き下され」

「……」

すっかりうなだれた与租八の姿に勝之助は言葉もなかった。

グレた息子を持った親の心痛はいかばかりか。

現代もあまり変わりはない。

こういう息子を持った父親は、自分自身を恥じ入るしかなかった。

聞けば例之助は、新町の今井屋から反物を騙り取っていたとのこと。今井屋のおかみは、

「例さに騙られた反物は二反もあるのに、勘当になってしまってはこちらが大損です。なんとかなりませぬか」

と、勝之助に相談に来た。

「盗賊に逢うたとあきらめられよ」

勝之助も如何ともし難かった。

このじぶん、子を勘当した親には、いっさいの責任が無くなるからである。

例之助には、今井屋の他からも反物を騙り取っており、その上で親に内証の借金もかなりあることがわかった。

子育ての難しさにも時代の変わりはなかった。

上下着の祝い

弘化三年十一月。

「真吾の上下着は桑名で祝おうぞ」

と、言い続けていた勝之助だったが、この年も桑名へ帰れる見通しはなかった。

おきくもこのごろでは、あまり「桑名」「桑名」と口に出さない。

それだけに勝之助は辛かった。

冬至入りの五日、

「勝之助さ。例の通り占いを頼みますぞ」

陣屋の者が一年の吉凶占いを頼みに来た。

勝之助は占いの修行を正式に積んだわけではない。

だが、どういうわけか、勝之助の占いはよく当たった。

毎年、検見に出て天候と作物のでき具合いの関係は、熟知している勝之助である。

そんなところから、特に豊作、不作の占いは当たったのであろう。

しかし、自分の人事だけは、占うこともままならなかった。

春ごろからおきくと真吾に責められていた上下着の祝いを、柏崎でやると決心するまでにはずいぶん時間がいった。

いつあるかもわからない桑名表へのお役替えを考えると、なかなか決断できなかったのである。

この年の九月二十三日のことだ。

桑名の平太夫から小包が柏崎に着いた。

中を開いてみると、日記と真吾の紋付が入っていた。

「真吾の上下着は柏崎でやるしかないのう」

との、平太夫の心遣いである。

真吾は大喜びで、

「おとっさ。おれの御祝いはいつだぇ」

と、この日も祝いを勝之助にしつっこくねだった。

その夜、勝之助宅では竹内のおばさを呼んで恒例の日記読みがあった。

ところどころに桑名の鐐之助の話しが出て、そのやんちゃぶりに一同、ため息をついたり、大笑いしたりの連続だった。

「鐐之助とは誰の事だい？」
黙って聞いていた真吾が突然、勝之助に不思議そうに尋ねた。
「桑名の兄ちゃのことさ」
「フゥーン。兄ちゃにも名が有るかえ」
一同、顔見合わせて大笑いになった。
その夜、一同が帰った後で、勝之助は思い切っておきくに相談することにした。
「おきく。来年も桑名に戻れるかは、わからぬ、真吾の上下着は柏崎でやろうぞ」
「それは真吾も喜びまする」
おきくの返事は意外だった。
（桑名でなくてもよいのかのう）
勝之助は思った。
だが、明るい顔の妻を見て、
「よし、それならば大小だけは江戸に頼もうぞ」
と、江戸の知人で牧岡勝太夫に、十一月までに届くよう真吾の大小を注文することにした。
柏崎にも駒蔵という刀工がいる。
だが、晴れの祝いに備え、奮発したのである。

十一月十一日。
江戸の牧岡から手紙が届く。
「真吾の大小、明日にも着くそうだ」
勝之助が手紙を読み終えて言った。
真吾はもう大はしゃぎだ。これまでも、
「大小はいつ来るのだぇ」
と、一日に何べんも尋ね、届くのを楽しみにしていた。無理もない。
この日、真吾の紋付の寸法直しもどうやら出来上がりそうだった。
家族中で大喜びをしていると、夜五つ（午後八時）ごろ、御横目の触れが陣屋に回った。
「何事だろう」
勝之助が確めたところ、「日光宮が亡くなられ、今夜より鳴り物、高声御停止」という触れだった。
このじぶん、高貴な人が亡くなるとこうした停止触れが幕府や藩庁から出た。
鳴り物とは歌舞音曲のことである。
今でいう「自粛」が、この当時からあったわけだ。

（なに、御停止触れと。しまったぞ。もしかして真吾の祝いも中止せねばならんか）

勝之助は一時、心配した。

だが、停止触れは明十二日までのわずか二日とわかって、勝之助もホッとした。

この夜の柏崎は、夜半から再び風が吹き出し、海鳴りが激しくなった。

翌十一月十二日。

江戸の牧岡に頼んでおいた真吾の大小が届いた。

おろくが、

「おとっさ。ちょっと来ておくんなれ」

と、役所へ知らせに来た。

家では真吾が踊り上がって大喜びの最中だった。

「なんとまぁ、ご立派な差しものでしょう」

竹内のおばさも出て来て褒めた。

『大小鍔は金覆輪、（柄は）白鮫、金目貫縁頭赤銅まがへ、七子金の梅の花付き鞘ろ色黒糸』（弘化3・11・12＝柏崎日記）

「見てくれは一両以上」という刀である。

代金は百疋だった。

一疋は十文、後に二十五文になったというから、二千五百文と計算しても一両（天保13年ごろで銀六十匁＝銭六千五百文と換算された）の半分以下の値ということになる。

「駒蔵に頼んだら二分（一両の半分）もかかったであろう。これならまず十歳ぐらいまでは用いられそうじゃ」

勝之助も満足だった。

十一月十五日は真吾の上下着の祝いの日である。

柏崎は寒気が緩み、雪も解けて、冬の越後にしてはいい日和りになった。

「よい天気になって大幸せじゃ」

出役前、勝之助は珍しく太陽ものぞいた越後の空を見上げた。

真吾は朝から大はしゃぎで、

「きょうはおれの御祝いだ」

と、剽軽回った。

陣屋内の学校で講義を終えた勝之助は四つ（午前十時）ごろには帰宅した。御祝いのため、早引けしたのである。

帰り際、役所の部屋に顔を出したところ、同役の品川が御代官の加勢になったとのことで、部屋中、騒ぎだった。

代官の加勢とは、今の言葉で言えば「代官見習い」とでもなろうか。

（次のお役替えでの品川御代官の誕生は決まりだな）

勝之助はそう思った。

（さりながら、地方調べもやっと半分にかかったところ。同役二人のうち一人が出世したのでは、これから私一人でなんでもやらねばならんのか）

そう考えると勝之助は腹立たしかった。

だが、品川の後任も間もなく決まるであろう。そう考えると気持ちも楽になった。ましてこの日は真吾の上下着の祝いである。勝之助は、腹立たしさをグッと飲み込んで役所を出た。

「おとっさ、お帰りなぇ」

勝之助の帰りを待ち兼ねていた真吾が飛びついてきた。

「真吾、まだ髪を結っておらんのか。ようし、おとっさが結ってやろう」

「うん」

真吾は大喜びで勝之助の袖を引っぱった。

真吾の頭は、ケシの実の殻のように、頭髪を頭上にだけ残し、周囲を剃った「けし坊主」という当時の子供の髪形である。

これでは髪は結えないので、ビンコに残した毛を双方からつまみ寄せて簡単なマゲを結うてやった。

「ややッ、真吾ちゃ、立派になったの。おとっさみたいだ」

この朝、早くから手伝いに来ていた柳橋のおゆきやおきよ、竹内のおばさら女衆が、口々に真吾を褒める。

「うん」

真吾はいよいよ嬉しくなって、

「おとっさ。はようお宮さんへ行きたぇ」

「そうだのう。おろく、お弓と八十七を迎えに行って参れ」

「あい」

おろくは元気に駆け出した。

お弓と兄の八十七が来る。
真吾には、桑名の平太夫が送ってくれた紋付きに上下を付け、大小を差させた。
すっかり宮参りの準備ができた真吾の姿を、おきくがしげしげと見つめ、
「この姿を、ひとめ、桑名のおじいさまとおばばさまに見せとうございます」
つくづく言った。
「ほんとだ、ほんとだ……」
竹内のおばさも目をうるませた。
「八十七。それではすまんがお宮へ連れて行ってくれ」
「はい。さあ、真吾ちゃ。おれの背中に乗れやぁ」
「おれは歩いて行く」
「雪がすっかり解けていて、道が悪いからおんぶして行くぜ」
「真吾、そうしな」
勝之助の言葉に真吾は、少し、不満そうだった。
「刀はおろくに持って行ってもらえ」
真吾は大小を差して歩いて行きたかったのである。
だが、あまりいい天気になり、諏訪神社までの道はすっかりぬかるんでいた。

真吾は仕方なくおろくに刀を持ってもらい、八十七の背に乗って宮参りに行った。
「さあ、戻らぬうちに子供客の迎えを出そうぜッ」
竹内のおばさが、たすきを掛け直して女衆に号令をかけた。
昼の子供客は八人。それに竹内のお民と真吾を加えて十人の膳が座敷に並んだ。
この日は金子征八宅でも末っ子の上下着の祝いがあり、陣屋のあちこちで子供客のもてなしがあった。
品川の家などでは、双方から使いが来たので、子供たちを二手に分けて祝いに出した。
鉢にタラとワラビ、大皿にはのっぺい、丼に数の子、もう一つの丼はダイコンの白和え、大鉢にはカボチャの切り身というご馳走である。
このほか、別の膳に鱒とハタハタ、おぼろ豆腐、こわめし、香のものがついた。
料理の残りは、子供たちの家まで、お膳ごと届けるのが、このじぶんの柏崎陣屋の習慣だった。
諏訪神社から真吾たちが戻るのを待って、子供客の宴が始まった。
が、この年ごろの子供たちは食い気より遊ぶ方が大事である。
食事はそこそこに、子供たちはたちまち騒ぎ始めた。
「いやはや、物音も聞こえぬわい」
あまりもの騒々しさに勝之助も耳を押さえたほどだ。

「真吾が春から楽しみにしていた御祝いですもの。今日は大目に見ましょう」
おきくが言うので、勝之助もうなずいた。
この騒ぎが八つ半（午後三時）すぎまで続いた。

ようやく子供客が終わって、ホッとする間もなく、今度は晩の客の準備である。
この夜の客は、栗本、品川、丸山勝左衛門、吉田、加藤清一郎、運八郎、品川のかか衆、大倉のおみせに役所の下働きの八平といった顔ぶれを招いた。
日ごろ、勝之助がつき合っている役所の同僚と、おきくが親しくしている陣屋の女房たちが晩の客だった。
手伝いの女衆は昼から立ちづくめである。
晩の客には、昼と同じ膳のほか、魚二匹、そうめん、トウナスとかまぼこ入り汁、おぼろが別についた。
夜に入って勝之助宅の座敷は、昼にも増して大賑わいになった。
「勝之助さ。今日は実にめでたい」
「上下を付けた真吾ちゃはなかなか大男に見えたぞ」
「いやぁ、料理もなかなかうまかった、おきくどの」

客はいずれも上機嫌で帰った。
手伝いのおゆきと、お弓、八十七の兄妹も五つ時（午後八時）には帰った。
竹内のおばさとおきよは四つ（午後十時）すぎまで手伝ってくれた。
こたつではおろくが寝息を立てている。
おろくは、この日、ところどころへ使いに出され、疲れたのか五つ（午後八時）すぎには眠ってしまった。
真吾は、
「今日はおれの御祝いだから眠たくなぇ」
と、おきよが帰るごろまで一人、起きていた。
この日は歌を歌うやら踊りのまねをするやら、大はしゃぎの真吾だった。
だが、一人になると折り紙で静かに遊んでいた。
『自分の子を誉めるは大馬鹿ものなれども、真吾は極おとなしき奴じゃとて叔母さ、おきく抔（など）大誉めもの也』（弘化3・11・15＝柏崎日記）

真吾

弘化五年（一八四八）という年は、二月二十八日に「嘉永」と改元された。

日本の近海には、いよいよ外国船の出没が激しさを増した。

三月四日に外国船が対馬の沖を通ったかと思えば、十日には松前（北海道）の沿岸に渡来し、二十五日には外国船五隻の乗組員が津軽国（青森県）の沿岸に上陸、食料を求めて退去した、という記録が残っている。

外国船騒動は遠い南国や蝦夷地（北海道）の話、とばかり考えていた東北、北陸の日本海側の国々でも、現実のものとなった。

四月二日、外国船が松前海岸を測量し、同五日には出羽国（秋田、山形県）の沿岸で大阪・堺の商船から大豆を略奪する事件が起きた。

そしてこの越後にも外国船が姿を現わしたのである。

幕府にもこうした外国の脅威がようやくわかってきた。

この年、品川に砲台を構築する一方で、高島流砲術を西洋流として取り入れ、実弾射撃を許可するなど、外敵に対する防備が少しずつ進められて行った。

越後の柏崎陣屋では、真吾が数えで七つ、弟行三郎二つ、おろくは十歳になった。

桑名で別れて暮らす兄鐐之助は十三歳になる。

元旦。

柏崎は朝方、春を思わせるような青空が広がったが、四つ（午前十時）ごろから急に雪が降り出した。

勝之助が「一転、真冬に戻ったか」、と思ったほどの変わり様である。

ところが、夕方にはその冬空がまた晴れ上がる、という全く妙な天気の一日だった。

二日は寒気が緩み、雨と雪がまじった。

この日、代官品川十四郎宅では、代官主催の正月の宴があった。

品川は、昨弘化四年二月十四日のお役替えで、勝之助の予想通り柏崎詰め代官に出世していた。

勝之助もこの時、地方公事方から柏崎詰め勘定人へ本役になった。

給料も一石一人扶持分がアップされた。

品川と勝之助は、それまで地方係の勘定人だったのが、この時から柏崎の町方の担当の勘定人になったのである。

「勝之助さ。すまんが正月二日の宴はちと手伝ってくれぬか」
品川は内々に、勝之助へ頼みに来ていた。
客は柏崎の町役人や藩の御内用達大肝煎(きもいり)ら総勢三十人ばかりである。
勝之助にとっても毎日のように顔を合わせる町方の顔役ばかりとあって、手伝わぬわけにはいかなかった。
この代官宅での正月二日の宴は、代官になった者が毎年行う恒例行事だった。
町役人や大肝煎たちはこの日、正装で御頭御奉行衆に年賀を述べた後、代官宅へ回りご馳走になった。
この年は、珍しく御頭川崎源太宅でも酒が出たとかで、品川宅に着いた時にはみなかなり酔っていた。
品川宅では先例に従って座敷に膳をズラリ並べ、供の者にまで酒と餅(もち)を出した。
この時ばかりはケチるわけにはいかない。
品川は元々、裕福で、仕事にもこうしたもてなしにも誠意を尽くす男だった。
勝之助にはとても真似ができなかった。第一お膳や器がすごい。
餅も座敷には吹雪餅、下へは砂糖醤油で振る舞った。

正午すぎに始まった宴は七つ（午後四時）ごろまで続いた。
その間、勝之助は餅焼きを手伝だった。
夕方になって、品川宅には勝之助と同役の勘定人が残らずそろった。
この日、二回目の宴会も大賑(にぎ)わいである。
勝之助も改めてご馳走になり、ほどなく帰宅すると品川宅からの土産ものが色々届いていた。
品川の上役としての気配りだった。
この夜には勝之助宅にも、竹内のおばさとお民が遊びに来た。
焼き餅を出し、茶を入れたが、勝之助はすっかり酔って、行三郎を抱いたまま寝入ってしまった。

翌三日。
薄曇りだったが、冬の柏崎では上天気のぶるいである。
勝之助は朝方、品川宅へ昨日の礼に回った。
「おう、勝之助さ。いいところへ来た」
品川代官は上機嫌で出迎えると、
「御郡代より回状が届いたところじゃ」

「お呼び出しでござるか」
「なんでも大守さまが、昨年来、四位に御昇進なされたとのことじゃ。そなたも支度して来るがよい」
勝之助もさっそく上下に着替え、役所に出た。
大守さまとは、桑名藩主のことである。
このじぶんは松平定猷（さだみち）が藩主だった。
定猷は天保十二年（一八四一）九月、わずか八歳で藩主になった。
弘化三年（一八四六）従五位下越中守に任官していたが、前年の弘化四年十二月に従四位下に昇進した。
この知らせが正月早々の吉報として柏崎陣屋に届いたのだった。
陣屋の藩士一同も喜び、帰宅したところへ、この日、御郡代からの二度目の触れが回った。
「これはいったい何事か」
勝之助は不安な気持ちに襲われた。
御郡代からの申し達しは意外なものだった。
『至誠院さま御病気御大切のところ、先月十七日、御逝去遊（あそ）ばされ候に付き、御機嫌伺（うかが）いの御帳、只今（ただいま）差し出され候』（弘化5・1・3＝柏崎日記）
至誠院さま、つまり藩主定猷公の奥方が亡くなったというのである。
郡代のお達しは、陣屋の藩士にもお悔やみの記帳を命じるものだった。
勝之助はもう一度着替えてすぐ役所へ出た。
役所には同役らが次々に押っ取り刀で駆け付けていた。
「なんということじゃ。先刻、殿のご昇進を祝ったばかりだというのに……」
「至誠院さまの御病気は長かったのであろうか」
「いずれにしても正月どころではなくなったわい」
「そうじゃのう。戻ったらさっそく正月飾りの類を片づけねばならん」
正月気分が一辺に吹っ飛んでしまった。
これから一カ月ほど、鳴り物停止のほか、毎日の暮らしもいろいろ「自粛」しなければならなかった。
役所の門松（かどまつ）類はすぐ取り除かれた。
勝之助も帰宅するや、鏡餅（かがみもち）などをすっかり片づけた。
「おとっさ。正月はもう終わったのかい」

真吾が不思議そうに尋ねた。
「奥方さまがお亡くなりになったのじゃ。正月も今日で終わりだのう」
真吾はがっかりした。
昼すぎには、陣屋の風紀を取り締まる横目の口触れも回って来た。
その夜、おろくと真吾の二人だけで、こっそり道中双六を振って遊ぶ姿は哀れだった。
幼心に自粛の意味がわかっているのであろう。
しかし、このじぶんの大人たちは、表向き自粛を続けていても、かなり融通をきかせる心のひろさを持ち合わせていた。
陣屋でも遠来の客にはこっそり酒を振る舞う家があったし、上役を訪ねれば御神酒が出た。
勝之助は二日間、月代を剃るのを止めて喪に服したが、鏡割りはこっそり行うつもりでいた。
現に陣屋では中陰（中有＝死後七日ごとに行う法要）明けの七日には、鳴り物を除いてほぼ平常の暮らしに戻った。
十日にはおきくも内々に両三軒に年始に出かけた。
役所の正月の儀式でも御神酒が出るようになった。
もっとも柏崎は、十四日ごろから寒気が押し寄せ、時おり猛吹雪になった。
吹雪の日は、家にすき間があればそこから粉雪が舞い込み、向かいの家を訪ねるのもままならない。
陣屋はひっそりとした夜が続いた。

一月二十六日。
今日から役所の御座敷で、柏崎学校の早朝の素読が始まった。
教官の勝之助は六つ（午前六時）すぎに起き、真吾も一緒に連れて出た。
真吾には昨年から「大学」を暗唱させていたが、素読へ連れて行くのは初めてだった。
真吾は座敷で始まった素読を、もの珍しげに見学していた。
生徒は真吾よりも年上の者が多い。
五つ（午前八時）前、交代して帰った勝之助に、真吾が真剣な顔で、
「おとっさ。おれも書物読みたい」
と、言い出した。
「真吾も読みたいか」
「うん」
「それじゃ、これを読んで見ろ」
勝之助は、この日、学校の生徒が素読していた「大学」を差し出した。

「おとっさ。これ読めない」
「昨年から真吾が暗唱していたのがこの本だぞ。読めぬわけはない」
「だども、字がわかんない」
「真吾が暗唱したことが、そのまま字で書いてあるんだぞ。おとっさが教えてやるから字をよく見やれ」
「うん」
真吾は「大学」を広げて勝之助の素読に聞き入った。
(真吾め。この歳で書物を自分で求めるようになるとはなかなかの者じゃ)
勝之助は、真吾の意気を買っていた。
真吾は後に、父、勝之助の後を継いで陣屋の向読師(素読師範)になる。晩年は尾張・海西郡極楽寺新田(現在の愛知県一宮市)の時(自)習学校や、桑名・矢田村の走井学校(現在の桑名市立益世小学校の前身)で教壇に立った。
走井学校では初代校長だった。

「渡部どのはご在宅かな」
三日後の二十九日の昼すぎ、御奉行岡権左衛門が伜(せがれ)の鶴尾ら二人の子供を連れて勝之助宅を訪

れた。
「これは御奉行。いかがなされた」
「いやぁ。他でもないがこの者たちに素読を教えてもらいたい」
「素読を……。鶴さはいくつになられました?」
「八つになる」
「うちの真吾は数えで七つ。先日より大学の素読を始めたところです。一緒にやりましょうか」
「そうか頼むぞ」
今でいう家庭教師の願いだった。
岡の伜、鶴尾も、
「おれも精出して習う」
というので、勝之助も気に入った。
何よりも真吾が喜んだ。
「鶴さと一緒なら、おれも負けない。おとっさ、しっかり教えておくんなれ」
真吾の激励に、勝之助は思わず苦笑した。
それから岡の両人と真吾を交じえた素読の教室が始まった。
岡の鶴尾は八歳だけに覚えがよかった。

二月に入った。
七日。鳴り物停止もこの日で終わりだった。
真吾は太鼓を出して久しぶりに叩いた。
勝之助が江戸からの出張帰りに、長野・善光寺で土産に買った例の太鼓である。
歩けるようになった弟の行三郎が、音を聞きつけて真吾にちょっかいを出す。
たちまち兄弟げんかが始まった。
真吾にとってはまだ、たわいない弟だが、お気に入りの太鼓を取られるのは、許せなかった。
「おとっさがおれに買ってくれた太鼓だ。行さのでない」
真吾が言うと行三郎がたちまち泣き出した。
「これ、真吾、お前は行三郎の兄ちゃじゃないかえ。少し貸してやれ」
「おらぁ、やだ」
「大学」を素読する真吾も、この点ではまだまだ子供だった。

二月も十日を過ぎると、柏崎でも春の気配が、少しずつ現われる。
目に見える一番早い春の兆しは、極楽寺境内の梅の開花だった。
極楽寺は陣屋の北東にある古刹である。

開山時は密教と深い縁を持っていたが、今は改宗されて浄土宗の寺になっている。
住職が語るところによれば、この寺は出羽・庄内(山形県)の出羽三山へ通う修験者の休み場だったという。
出羽三山は、月山、湯殿山、羽黒山からなり、古くから知られた修験場である。
昔、この寺の裏山を、西国から出羽三山に通じる山道が通っていた。
この裏山から見る日本海と柏崎海岸の眺望は、実に素晴らしいものだったという。
紀州の大峯山あたりから、旅につぐ旅を重ねて来た修験者たちは、この眺望をしばし楽しみ、旅の疲れを癒したのであろう。やがてこの地に庵を結んで、一夜の宿とした。
今ではこの周りは、切り通しになってJR羽越線が通る。
勝之助のじぶんも、陣屋がある大久保一帯の高台が寺の裏山に続いていた。
高台に残る陣屋跡から、今、極楽寺を訪ねようとすれば、陣屋跡東側の竹林の小道を北へ抜けて、突き当たりの舗装ずみのやや広い道を右へ折れる。その行き詰まったところに羽越線をまたぐ横断歩道橋があり、これを渡らねばならない。
歩道橋手前の道端には石仏が数体並んでいた。これが目印で、歩道橋を上れば山門がすぐ下に見える。
もちろん、勝之助のじぶんにこんな歩道橋はない。

陣屋の人々は、寺の裏山に通じる小道からこの極楽寺をよく訪ねた。
勝之助は、極楽寺の住職とは特に懇意だった。
四季折々、この名刹を訪ね、住職と懇談するのは、勝之助の大きな喜びだった。
極楽寺には勝之助ら陣屋の武士が、
「頼もう！」
と、訪(おとな)いを入れた庫裡(くり)の門や、対座した書院が当時のまま残存している。

二月十一日。
柏崎は上天気で寒気もすっかり緩んだ。
この日、勝之助は味噌の仕込みを行うことにしていた。
昼すぎ、役所から帰宅し、さっそく取りかかった。
手伝いは竹内のおばさと役所の下働きの宇之助である。
「こんな暖かくては、もうすぐ春じゃのう。勝之助さ」
竹内のおばさが嬉しそうに語りかけた。
「うん。ほんとにいい天気だのう」
宇之助とおきくもうなずいた。

「極楽寺の梅もそろそろではないかえ」
おばさの言葉に、
(そうだ。このところの天気でもう咲いたかも知れん)
勝之助は仕込みの後で、子供たちと運八郎を連れて、極楽寺の梅を見に行くことを思い立った。
しかし、陣屋から極楽寺までの細道には、まだ雪が残り、境内には四、五尺もの雪が積もっていた。
「これでは梅の開花どころではないのう」
「勝之助さ。これではとても無理じゃ」
道にはこの暖かさで、小さな川のように雪解けの水が流れていた。
「仕方がない。運公、銭湯でも行くとするか」
子供たちは大喜びである。
大久保村の銭湯までの道には、日がよく当たるためか、雪もなかった。
銭湯に入り、七つ(午後四時)すぎ、陣屋へ戻る。
十三日は陣屋内にあるお稲荷さまの祭りだった。
真吾は何度もお稲荷さまへ、太鼓を叩きに行った。
七つ(午後四時)時、勝之助は役所の泊まりに出る。

六つ半（午後七時）ごろ、真吾が書物と大豆いりを持って泊まりに来た。
勝之助は、真吾のために寝巻きをこたつで暖めてやった。
真吾はほどなく、暖かい夜具の中で眠り着いた。
この夜、越後の海は荒れ、夜中、海鳴りが続いた。

三月の柏崎は、春が遅い北国といえども寒気は随分、緩む。
二日。
勝之助は、おろくのために雛人形を飾った。
おきくは、おろくが正月に着た晴れ着が、あまりにも見苦しかったのを思い出し、洗った後に仕立て直しておいた。
三日には、おゆき、お弓らを招いて雛祭りの祝いを開いた。
勝之助は、昼すぎから子供らをどこぞ連れて行こうと考えていた。
だが、昼すぎ、雨が降り出した。
仕方なく、勝之助宅でグズグス時を過ごすしかなかった。
この日、雛祭り客がすべて帰ったのは暮れ合いになってからである。
雛祭りの主役、おろくも遊び疲れたのか、外から戻ると六つ（午後六時）すぎには、すぐ寝てし

まった。
真吾は、「大学」を復習した後、五つ（午後八時）すぎに寝た。
柏崎は、ようやく白梅が見ごろの季節になった。

明けて四日。
勝之助は泊まり番である。
夕方、いつものように真吾が泊まりに来た。
「おとっさ。泊まりに来たぜ」
「真吾か、よう参った。さぁ、こたつに入れ。おとっさと本を読もうか」
「おとっさ。おれ本、持ってねぇ」
「なに、本を持ってこなかったと……」
「おれ、御門前で遊んで居ったので、そのまま来たから本は取りに行かれん。おとっさ。悪かったかの？」
理路整然と言い訳する真吾に、勝之助は二の句が出ない。
「泊まりに来るなら必ず大学を持って来いと申しておいたではないか。まあ、そんなら、これを空読するか、真吾」

勝之助が差し出したのは、「唐詩選」だった。
「うん。おれ、この書物も覚える」
真吾は大喜びで勝之助の前に座り直した。
真吾は三月に入って勝之助が当直のたびに、役所に泊まりに来るようになった。
父に勉強を教えてもらうのが楽しくてしょうがなかったのであろう。
勝之助は寝る前に大学を七枚八枚と読ませ、朝も六つ半（午前七時）には手水（便所）を済ませて大学を教えた。
真吾は、父親の目から見ても覚えがよかった。
三月七日の夜も勝之助は当直だった。
暮れ合いに真吾が泊まりに来た。
「真吾、参ったか。今日は書物を持参したか」
「うん。ほら持って来たぞ」
真吾が得意気に大学を差し出した。
親の仕事場に子供が泊まりに来るということは、現代ではとても考えられないだろう。
それどころか、職場での父親の顔を知らない子供が大半ではないか。
だが、勝之助は子供たちに役所での姿をよく見せた。

ある時、公事方の調べをそっとのぞかせたことがあった。
盗人の調べで、勝之助はわざと何度か大声を張り上げた。
だが、家に戻った真吾に、
「おとっさ。泥棒、笑ってたぜ」
と、軽くいなされてしまった。
この時は軽いショックを受けた勝之助だが、真吾やおろくには絶えず強い自信を持って接する父親だった。
真吾も晩年、そんな父親を、心から慕い、回顧している。
「真吾、このごろ大学もよく読めるようになったのう」
「うん。おれ、書物覚えるのは好きだ。おとっさは嫌いだったか?」
「おとっさか。おとっさの小さなころは白河じゃった。白河でも片山のおじいさによく叱られながら書物は読んだものだ」
「ふぅーん。片山のおじいさは怖かったかぇ」
「真吾は、どうじゃ。おとっさが怖いかぇ」
「怖くはない!」

「学問は怒られてするもんじゃないぞ、真吾。書物にはおとっさの知らぬこともいっぱい書いてある。そういう知らないことを教えてくれるのが書物だ」

「うん」

柏崎陣屋の初春の夜。

お役所の宿直部屋で、父と子の句読指南が、遅くまで続いた。

この嘉永元年。

極楽寺の白梅が満開になったのは、三月八日のことだ。

勝之助はこの朝、真吾と共に役所の宿直室で六つ半（午前七時）ごろ、目覚めた。

起き抜けの柏崎の空は曇っていた。

だが、天気はよくなりそうな気配である。

勝之助は洗顔を済ませると座卓に向かい、桑名へ送る前日の日記を書き始めた。

『七日、曇り折々風雨。本番早出。九つ（正午）すぎに引き取る。おきく朝の様子（から）天気と存じ、機（はた）ののり致し候ところ、又雨降りに付き、こたつにて干（ほ）す。七つ（午後四時）より泊まり番に出る。夕方、天気になり、明日はよさそう也。暮れ合いに真吾泊まりに来る。大学七枚読み先に寝せる。五つ半（午後九時）ごろ休む』（嘉永1・3・7＝柏崎日記）

（桑名の父上や鐐之助はいかがしたものか）

勝之助は日記を書き終え、桑名を思いやった。

「おとっさ。おれも書物読みたい」

すっかり目覚めた真吾の声で、勝之助はわれに返った。

「おう、真吾。もう眠くはないか。それじゃ、おとっさが教えてやろう」

「うん」

真吾が喜んで「大学」を差し出した。

朝の講釈は四半刻（しはんとき）（三十分）ばかり続いた。

真吾の覚えはいい。

勝之助の教えたことは、たいがい覚えていた。

講釈の後、真吾を先に帰宅させ、勝之助も五つ（午前八時）前には交代した。

それから代官品川十四郎宅をちょっと訪ね、戻ると昼になっていた。

「極楽寺の梅が盛りのようですねぇ。境内には見物客がだいぶ出ているとのことですよ」

月代（さかやき）と髪を剃り終えた勝之助に、おきくが極楽寺の梅見を勧めた。

「そうか。天気もよくなったことだ。子供たちを連れて出かけるとするか」
「おとっさ。おれも行きたい」
おろくもはしゃぎ回っている。
「行三郎は抱いて行くとしよう」
勝之助は三人の子供を連れて、八つ（午後二時）すぎ極楽寺へ出かけた。
極楽寺の境内は、おきくが言った通り梅が盛りだった。
一重桜もツボミが膨らみ、ほどなく咲きそうな様子である。
北国では、いろいろな花が短い間に一斉に花開く。
長い間、雪に閉じ込められていた人々の喜びと解放感を、代弁するように、次々に花を開いて行くのである。
勝之助は子供たちの手を引いて寺の裏山に登った。
それから大窪へ出て銭湯に入ることにした。
子供たちは大はしゃぎである。
北国の春の野辺を行く勝之助親子に、柔らかい日差しが降りそそいだ。
……そのころ、桑名の急変を知らせる使者が、柏崎への道を北へ北へと急いでいたが、勝之助には知るわけもなかった。

平太夫死す

嘉永元年（弘化五年＝一八四八）の正月。
桑名城下は藩主松平定猷の正室、至誠院さまの服喪中だった。
『書院格の面々三日の間、舞台格二日、無格以下は一日月代剃申間敷、普請は三日の間、鳴物高声は御七十七日までの御停止』（弘化4・12・27＝桑名日記）
厳しい服喪規定が出ていた。
上級武士は三日間、下級武士と無格の者は二日から一日の間、当時の武士の身だしなみである月代を剃ってはならぬ、つまり頭にカミソリを当ててはならぬというのである。
その上、騒音を出す工事は三日間、歌舞音曲は七十七日間の停止で、毎日の暮らしの中でも、つき米、薪割り、臼引きなどもこれに準ずるという御触れだった。
元旦。
雑煮を祝いながら平太夫が、

「誠に寂しき正月だのう」
ポツンと漏らした。
「よろしいではございませんか、わずらわしい正月のあいさつ回りもなく、かえって幸せでございます」
女房のおますは、静かな正月が気に入っていた。
大人たちと違って、鐐之助ら子供たちには、服喪中といっても正月はやはり正月だった。
厳しい服喪の規定などそっちのけで、一日中、遊びまくった。
遊びの中でもこの正月、鐐之助のお気に入りは凧揚げだった。
「おじいさ、紙買うてくれ」
「おじいさ、紙張っとくれ」
と、平太夫にせがみ、つきまとった。
凧には厚目の傘紙を使う。
鐐之助はこれに自分で絵や文字を描いた。
その紙で平太夫に凧を作ってくれ、というのである。
平太夫は正月の間、孫のために凧作りに精を出すはめになった。
「おじいさ。おれの凧、傾がって揚がらん」

平太夫が一生懸命作った凧だったが鐐之助は今にも泣き出しそうにベソをかいて訴えた。
「どれ、どれ、もういっぺん、直してやろう」
平太夫があれこれ直したつもりでも、凧はやはり傾がった。
鐐之助が自分で武者絵を写し描きにしたお気に入りの凧である。
九日になってもこの凧は揚がらず、
「おじいさ、この銭で鐐こに凧を買っておくれなされ」
見兼ねたおますが百文を鐐之助に渡した。
平太夫は、苦虫を噛んだような表情でうなずいたが、
(これでは、父親代わりのわしの面目が丸潰れじゃわい)
と、心中は穏やかでない。
だが、鐐之助は大喜びで凧を買いに走った。
この凧がまたよく揚がった。
鐐之助が絵を写し取った武者凧である。
奥方さまの服喪だというのに、桑名の空には子供たちの凧があちこちで揚がった。

平太夫はこの年、六十五歳になった。

本来なら楽隠居もできる歳である。
だが、頼みにした養子の勝之助が遠い柏崎にあり、出戻りの娘おなかやその子を養わねばならぬ身では、とても隠居願いなど出せるものではなかった。
また、算術が巧みな平太夫は、藩の御米蔵にとっても、無くてはならない存在だった。
その平太夫が正月から痔の病に悩んでいた。
正月二日、三日は外へ出ることも出来ず、終日、こたつに暖まって過ごした。
冬場の痔疾は辛い。
二月になっても、平太夫の症状はなかなか回復しなかった。
「平太夫どの、宮参りに参ろう」
と、何度か同役らに誘われたが、
「長く歩くとこのごろ絶えず痔が出る。残念だが……」
いつもあきらめなければならなかった。

二月十一日。
新しい年になって二度目の大きなお役替えが発表された。
「勘定人に大村得之丞。大筒役に堀江繁弥、竹内捨五郎、生野四郎八。御宮次番には村上弥兵衛

……」
(今回も勝之助のお役替えはなかったのう……)
その夜、越後・柏崎へ送る日記に、お役替えになった面々の名を書き連らねる平太夫の胸中は寂しかった。
鐐之助が、おきくの実家である新屋敷の佐藤家へ泊まりに行っていることも一層、寂しさを募らせた。
翌十二日夕。
鐐之助が新屋敷から戻った。
「これはこれは、伯母さまもご一緒でしたか」
佐藤家の親類、飯村の伯母さまが鐐之助を送ってくれた。
「鐐之助さは、佐藤の家でも凧絵を写すのに夢中でしたよ」
「鐐こはこの正月、凧揚げの腕もめっきり上達致しましてな」
「絵もなかなかお上手ですね。写し描きよりざっと習ってみたらいかがです?」
「鐐こ。絵も習ってみるかえ」
「うん。手習いのあい間に行ってもよかろうかねぇ」
「まあ、まあ、なんと賢い子だこと。手習いのあい間に行ってもよかろうか……なんて」

飯村の伯母さまは鐐之助を褒めそやして帰った。
暮れ六つ（午後六時）がすぎたころ、
「おじいさ、おじいさ。湯へ行って来なんか、来なんか」
鐐之助が平太夫にまとわりついた。
「なぜこんな早くから湯へなど……」
「ええから。ええから行って来んなえ」
「もうちっと後でな」
「そうかぇ」
鐐之助は不満そうだったが、平太夫はいつものように遅めに連れて行った。
湯から戻ればたわいなく寝つく鐐之助である。
四つ（午後十時）すぎ。
平太夫も寝る時刻となった。
（寝る前に小便をさせておくのを忘れたわい）
と、平太夫は鐐之助を起こした。
「鐐こ。もう出ないかぇ」
「……」

「そうか。それなら寝なえ、寝なえ。おじいさも寝るぞ」
「おじいさ……久しぶりだねぇ」
何を思ったのか、鐐之助が寝ぼけまなこでいう。
「たった一晩、向こうに泊まって来て久しぶりだとは……。どういう訳じゃ、鐐こ」
「……それでもさッ」
鐐之助はニコッとした。
平太夫にも思わず笑いがこみ上げる。
「そうか、そうか。久しぶりだったのう。さぁ、自分の家でゆっくり寝やれ、寝やれ」
「うん」
再びたわいなく眠りについた孫の寝顔に、
（一夜も百夜の心持ちと見える）
平太夫は思った。

三月になった。
桑名では草摘みの人々が、何組も山へ入った。
このじぶんは三日の上巳（じょうし）の節句（桃の節句）に草餅（もち）を食べ、白酒を飲む習わしがあった。

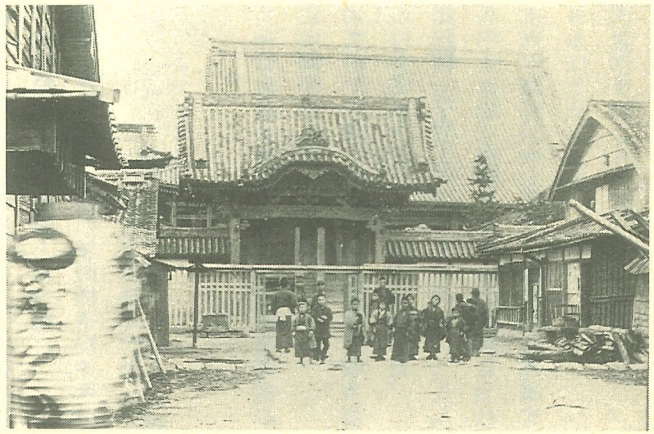
山へは草餅をつくるヨモギを摘みに行くのである。
平太夫宅でも二日、草団子をつくった。
三日は雨になった。
この日、藩士はすべて上下姿で城に上がる。
雨は平太夫らが城にいるうち、大降りになった。
下城時は、傘や下駄を借りる者、はだしで駆け出す者、相傘で帰る者らで下城口は大混雑になった。
平太夫は下城後、御郡代衆、御奉行衆と同役ら六軒ばかり、雨の中を節句のあいさつに回った。
(やれやれ。とんだ一日になったわい)
平太夫が帰宅した時、下駄の花緒がすっかり水びたしになっていた。

さて、嘉永元年三月四日。
桑名は終日、どんよりとした曇り空だった。
この日も米渡しがあり、早朝から御米蔵に出ていた平太夫が帰宅したのは、七つ(午後四時)を回っていた。
いつもよりやや遅い帰宅だった。

途中、この度のお役替えで昇進した同僚宅二軒へ、歓びに回っていたのである。
この夜、桑名日記は絶筆となった。
最後の一行は、鐐之助の昼の様子だった。
『愛宕の貸座敷へ若手風呂立て、入りに行候よし。鐐之助も昼より行候よし』(嘉永1・3・4＝桑名日記)

この一行を書いて間もなく、平太夫は倒れた。
突然の脳卒中と思われる。
手当てのかいなく平太夫が息を引き取ったのは三月七日のことである。
亡骸は桑名城下萱町の法盛寺に葬った。
「速證院釋心了居士」
享年六十五歳。在勤五十三年の生涯だった。
平太夫の墓は、今も桑名・法盛寺に残存する。

「平太夫死す」
との悲報が柏崎の勝之助に届いたのはこの月の二十二日ごろである。この知らせは一家を大い



父・渡部平太夫の眠る桑名・法盛寺（明治の頃・不破直幹氏蔵）

子・勝之助の墓（柏崎・極楽寺）

に驚かせた。

「おじいさが……死んだなんて……」

一家の心の痛手は大きかった。

「……具合いが悪いなんて……日記には少しも書いていなかったのに……」

おきくは三月五日に届いたばかりの桑名日記を胸に、涙にくれた。

生前の平太夫から届いた最後の桑名日記がこれになった。

日記は平太夫がこの年の正月に送り届けたものだ。

勝之助がこの日記を手にした前日、平太夫が倒れたということになる。

勝之助は平太夫の死を知らぬまま、三月二十二日まで柏崎日記を書き続けた。

柏崎日記もこの日をもって終わる。

桑名から柏崎は遠かった。

十年目

平太夫の突然の死から半年過ぎた嘉永元年九月。

桑名から鐐之助とおますが柏崎に到着した。
桑名の渡部家を継ぐはずだった鐐之助は数えで十三歳になっていた。
おますは五十九歳である。
二人の荷駄の中に、勝之助が十年にわたって桑名へ書き送った柏崎日記が、大事にしまい込んであった。
「足掛け十年か……。長かったのう鐐之助」
積み重ねた日記の厚さに、勝之助は鐐之助と別れていた歳月の長さをしみじみ感じた。
「おとっさ。おれは寂しくはなかったさ。おじいさが何でも作ってくれたし……」
「鐐こは、ほんにおじいさん子でのう。このおばばにはちっとも寄りつかなんだ」
おますが笑いながらおきくに告げた。
「鐐之助は柏崎までの道中、疲れはしなかったか」
「おれは大丈夫だった。途中で馬にも駕籠にも乗って来た。おばあさの方が足痛い、痛いって道中、うなり通しだったぇ」
「まあ、この子は……」
やっと一家七人が一つ家に揃った。勝之助宅の炉端は、いっきに賑やかになった。
おろくと真吾も、

「桑名の兄ちゃが来る、兄ちゃが来る」
と、大はしゃぎで待っていた。
柏崎に到着したその日こそ、初めおろくと真吾は柱や襖の陰に隠れていたが、たちまち、
「おれが兄ちゃの脇へ行く」
「いやッ。あたしが座る」
のと、けんかを始める始末だった。
「真吾とおろくはいつもこうなのかい」
鐐之助が兄貴ぶって言った。
「兄ちゃ。真吾の名前をどうして知ってるのだ?」
「それはおとっさが毎日、真吾のことを日記に書いておくれなさったからだ」
「おれも兄ちゃの名前を日記で覚えた」
「なんという」
「桑名の兄ちゃだ」
大人たちは顔を見合わせて大笑いになった。
「兄ちゃは鐐之助というんだ」
「鐐之助って誰だ?」

真吾が不思議そうに尋ね返した。
「だから兄ちゃの名前だ」
「やっぱり兄ちゃにも名前があったぇ」
「でも兄ちゃは兄ちゃだ」
おろくが口をはさむ。
（行三郎を入れて兄妹四人とも、離れて暮らしていたことが苦にはならぬと見える。なによりだ）
勝之助は兄妹のやり取りに心中、ホッとした。
この時、真吾は数えで七つ、おろく十歳、行三郎は二つだった。

それからしばらく勝之助宅は千客万来の日々が続いた。
竹内のおばさや運八郎は毎日のように顔を出して鐐之助を褒めた。
「鐐之助さの手習いはこの陣屋一だ。この年でよくあれだけの字が書けるもんだ」
「おばさはおれの字を見たことあるんか？」
「おお、あるともあるとも。桑名のおじいさが日記と一緒にいつも送って来たからの」
「ふぅーん。おれの手習いがあるのか。ちっとも知らなかった」
「真吾もおろくも兄ちゃに負けねぇと頑張っておるんだ」

運八郎が真吾とおろくの頭をなでた。
「時に勝之助さ。桑名では鐐之助が跡目を継ぐのはダメじゃったのじゃのう？」
「御頭御奉行衆にお頼みしてはいかが、と勧めてくれる同役の者もおったわ」
「それなら頼めばよかった。鐐之助さの歳を二つ三つ上だといってもよかったんではないか。そんなことはよくあるこった」
「そうよなあ。それも考えては見たがやめた」
「どうしてじゃ」
「このようにまだ元服前では如何ともしがたかった。これが書院格の家ならばそうもしたであろうが……」
「渡部の家は鎮国公（松平定綱）以来の家柄だぞ」
「そういうな運八郎。柏崎でわしがきちんと禄をいただいておるというのに、まだ元服前の鐐こを押し立て、お家相続を願い出たとあっては他の同役も面白かろうはずがない。養子願いを出しても入れられず、断絶した家はたくさんあるのだ」
「それにしてものう、おばばさま」
運八郎はおますに救いを求めた。
「……」

おますは運八郎に同意はしなかった。
ゆっくり勝之助の顔を見やったおますは、
「たとえ、たとえ鐐之助に捨て扶持を賜わったとしても、この歳で一家を支えるのはかなわぬことじゃ。そなたたちも鐐こと別れて暮らすようになってはや十年たつ。この間、一日たりとも鐐こを案じない日はなかったろうよ。のう、おきくさん」
おきくも台所から振り返ってうなずいた。
「運八郎。それは暮らし向きは少し苦しくなるやも知れん。だがなぁ、こうして親子が一緒に暮らせることが一番じゃ、母上」
おますも目頭を押えながらうなずいた。そばで聞いていた竹内のおばさが、
「勝之助さ。こりゃあ、早いとこ子供振る舞いをせねばならんの」
「そうだ、そうだ勝之助さ」
運八郎も手をうった。
「それに女客も致さねば……」
そういうおきくに、
「おますさの歓迎も兼ねてだの、おきくさん」
竹内のおばさが腕をまくって見せた。

勝之助とおきくがこの十年、夢にまで見た家族揃っての暮らしが、それから一年、二年と続いた。
そして嘉永三年（一八五〇）を迎えた。
この年、勝之助一家には春と秋に吉事があった。
春四月。
勝之助が故平太夫の名を継ぎ、渡部平太夫政醇（まさあつ）を名乗った。
渡部家の系図では八代目当主である。
この年は鎮国公（松平定綱）没後の二百年祭の年にも当たった。
勝之助は鎮国公の時代に召し出された舞台格の者二十一人と協力して、桑名城内の鎮国守国神社に、石手水鉢一基を献納した。
これに対し翌四年正月、褒賞として松竹梅と鶴の扇子（せんす）、鶴の模様入りの朱塗り木盃を賜わった。
秋の吉事は、数えで十五歳になった鐐之助の番組み入りである。
九月十一日。
鐐之助は二人扶持新郷足軽に召し出された。

新郷足軽は陣屋の武士としては最も軽輩である。
しかし、一人前の男として認められることには間違いなく、鎌之助は渡部多助政得と改名した。
「勝之助さ。これで渡部家は安泰だのう」
運八郎もおばさも心から祝ってくれた。
（十年もの長きの間、手元に置けなかった鎌こだが、立派になったものよのう）
勝之助とおきくの思いはひとしおだった。
しかし、この世は喜びばかりが続くわけではない。
翌嘉永四年五月十日。
五つになった行三郎が亡くなった。
それから三年後の安政元年（一八五四）十月二十五日のことだ。
前日の二十四日、三女てつを出産したばかりのおきくも急死する。
おきくにはお産の直後、「たらつき」というショック症状に陥るくせがあった。
この時も「たらつき」に襲われたと考えられる。
あっけない最期だった。
嘉永元年に平太夫の突然の死でやっと親子が一緒に暮らせるようになったというのに……。
その幸せはたった三年も続かなかった。

おきくの亡骸は行三郎が眠る柏崎での菩提寺、西永寺に埋葬された。

翌安政二年（一八五五）。
この年一月五日、幕府はアメリカ使節アダムスと和親条約の本書を批准交換した。
二年前の嘉永六年（一八五三）夏、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが浦賀に来航して以来、日本の開国の気運が一日、一日と高まっていた。

この安政二年の秋十月二十六日。
鎌之助は禄高三石取りの足軽になった。
父、勝之助に似た精勤ぶりが認められたのであろう。
しかし、悲劇はあまり間をおかずにやって来た。
それから一年もたたない安政三年（一八五六）八月十九日。鎌之助も急死した。
死因はわからない。
まだ二十一歳という若さだった。
勝之助と祖母おますの嘆きは大きかった。
（おきくに先立たれ、今、鎌こにも先に逝かれるとは……）

勝之助は悲嘆にくれた。
渡部家では長男錠之助の急死で、二男真吾が嗣子となった。
この時、真吾は数えの十五歳である。
真吾は渡部清蔵政敏と改名し、翌安政四年（一八五七）正月十五日、二人扶持の新郷足軽に召し出された。
真吾はその後、一時清介と名乗った。万延元年（一八六〇）閏三月三日、禄高三石となり御番入りを果たした。
そのうえ八月には、
「学問会得せし」
として藩主松平定敬に表彰された。
桑名松平藩最後の藩主となった定敬は、美濃（岐阜県）高須藩主松平義建の七男である。
先代藩主定猷の嫡子尚之助（後の定教）が幼かったため養子となり、定猷の娘、初姫を奥方にした。
尾張藩主の徳川慶勝、茂徳、会津藩主で幕末の京都守護職松平容保は実兄だった。
この翌年、改元されて文久元年となった二月九日、勝之助が代官格に列せられた。
係りは公事方もそのままだったが、代官格ともなれば陣屋の顔の一人である。

正月ともなれば、柏崎の町役人たちが正装で年賀にやってくる身分だった。
翌文久二年（一八六二）二月二十四日。
この日は真吾の婚礼が行われた。
真吾数えの二十一歳。
妻は同じ勘定人の地方係田中忠蔵政直の三女藤といった。
藤は天保十二年二月二十八日、桑名の生まれで、真吾より一つ年上の女房である。
父親の忠蔵が嘉永三年六月、お役替えで柏崎に赴任した時、一緒にやってきた。
桑名表で暮らしたことがある藤に、真吾の桑名への思い入れがダブッたのであろうか。
勝之助もまだ幼顔の残る若夫婦に目を細めた。
しかし、柏崎の渡部家の不幸はまだ続いた。
真吾の婚礼が行われたたった二日後のことだった。
この日、二月二十六日。
祖母のおますが七十三歳で亡くなったのである。
柏崎で暮らすようになって十四年の歳月が流れていた。

勝之助は妻おきくに先立たれた後も、後妻を迎えることもなく役目に励んだ。
公事方として勝之助の名裁きは、陣屋の内外に知れ渡って、町役人の信頼も大きかった。
もめ事があると、町役人は勝之助の自宅まで訪ねてくることも多かった。
だが、勝之助も安政六年（一八五九）の夏ごろから、少しずつ体の不調を覚えるようになっていた。
公事方、教育係として勘定人の役務を、誠意をもって務めて来た勝之助である。
しかし、文久元年二月、代官格に列せられた後、めっきり体力が衰えてきた。
それから三年後の元治元年（一八六四）二月九日、勝之助は十石三人扶持の禄高と代官格の待遇はそのままで、寄合番を命じられた。
寄合番とは無役のことである。つまり勝之助はようやく楽隠居の身分になったわけだ。
この時、勝之助六十三歳である。
すでに常（つね）という孫娘が真吾と藤の間に生まれていた。
勝之助が乳飲み子の孫と、悠悠自適の日々を送ったのは、わずか十か月ばかりしかない。
この年十二月十二日、勝之助は自宅で倒れ、息を引き取った。
桑名への帰参はかなわぬまま、勝之助はついに柏崎の土になったのである。
その翌日、勝之助は遺言により生前に住職と親交があった極楽寺の裏山に埋葬された。

「淳厚院釋貢齋居士」
勝之助の墓は今も極楽寺の境内に、当時のまま残っている。
墓には真吾が心を込めて刻んだ父を慕う碑文が、左右と背面をギッシリと囲んでいる。
「不戮一民（ふりくいちみん）」の文字はその中にある。

維新の嵐

勝之助が病死した翌元治二年は、四月八日から「慶応元年」（一八六五）に改元された。
真吾は数えで二十四歳である。
この年の三月十一日。
真吾は家督相続を認められた。
しかし、禄高は勝之助には及ばなかった。
七石二人扶持寄合番というお沙汰である。
父、勝之助の勤勉ぶりをそのまま受け継いだ真吾だった。しかし、元治元年（一八六四）に藩主定敬が京都所司代を命じられ、ひっ迫財政の藩の中では致しかたなかった。

無事に家督相続ができただけでも幸せである。

この頃、柏崎では米の値がどんどん上がり始めていた。

町方ではその日暮らしの者が増えて、翌慶応二年に柏崎の町の豪商が民衆に襲われるという事件も起きる。

慶応元年という年は、維新の嵐が柏崎にもジワジワと押し寄せつつあった。

だが、真吾は自分がその嵐の真っただ中へ立たせられようとは、夢にも考えてはいなかった。

家督相続から三か月後の六月八日、真吾夫婦に待ち兼ねた長男が誕生した。

後に陸軍士官候補生となり、士官学校で病死した第一郎である。

第一郎は晩年の真吾がよく自慢した息子だった。

軍人としての未来も輝かしいものだった。第一郎は書画も上手だった。

渡部家の系図で第一郎の項を読むと、

『五歳のころより紙筆を好み、画を描くをもって玩戯(がんぎ)とし、或いは市、店を過ぎ商牌(しょうはい)（招牌＝看板のこと）の文字を認め、その字形を諳書（音書(いんしょ)＝たより）せり。八歳の時、初めて習字をなす。筆の掌握、運筆の自在なる事、已(はなはだ)に成人の如し』

つまり八つのころにはもう大人顔負けの文字を書いたというのである。

さらに第一郎は明治十五年四月、京都に出て中西耕石という画家に、「支那画法」を学んだ、ともある。

十六、七歳から屏風や唐紙(からかみ)などに、求められるままに書画を書き、その上、隷書(れいしょ)、篆刻(てんこく)もよくした。

真吾はこの第一郎の才能を、高く買っていた。若死したことは真吾の人生でも一大痛恨事だった。

翌慶応二年（一八六六）二月。

真吾は渡部家代々の名である「平太夫」を継いだ。

渡部平太夫政敏と改名したのである。

この年の六月十九日、平太夫こと真吾は禄はそのままで郷手代に抜てきされた。

「平太夫どの。よかったのう」

舅の田中忠蔵がことのほか喜んでくれた。

「ありがとうございます。義父(ちち)上」

田中忠蔵はこの時、すでに御代官に昇任していた。

父、勝之助と特に親交があった御勘定奉行品川十四郎が、五月に桑名勝手になって柏崎を去っ

たのは真吾にとって残念なことだった。
だが、御帳部屋の勘定人には三輪久右衛門、広田領助がいたし、同役の郷手代にも手塚甚太夫など父の友人がまだ残っていた。

慶応三年（一八六七）正月の柏崎町会所御用留の公用録に、この年の陣屋の役職名が残されていた。
それによると、

『郡代平松多門、勘定頭山脇操、勘定奉行岡弥藤治、佐藤久兵衛、横目川村此面（四月に川村直三郎に交代）、代官手塚甚太夫、田中忠蔵、御頭元締川澄金次郎、御帳部屋広田領助、三輪久右衛門、公事方水谷善六、吉田八十右衛門、郷手代阿部庄太夫、五十嵐久之介、添田助司、渡部平太夫、同三島係藤岡八郎、内山雅之介』（慶応3・1・1＝柏崎町会所御用留）

といった面々である。

この慶応三年も米の高値が続いた。
町方では米の貸し付けをめぐる争いが後を絶たず、陣屋からの注意が何度も出た。

こうした伝達も真吾ら郷手代の役目だった。
また、町方の火事や事件の取り締まりも重要な任務である。
この年の三月には、郷手代の下で働く郷使の一人に、おろくの夫だった山田行蔵が配属されている。
おろくはその半年前の、慶応二年七月六日に、二十八歳という若さで亡くなっていた。
行蔵との間に子供は生まれなかった。

この慶応三年十月十四日、徳川十五代将軍慶喜は大政奉還を上奏した。
もちろん越後・柏崎では、このような政情とはまだまだ無縁の日々が続いていた。
慶喜の大政奉還は、討幕を図る勢力の、機先を制する狙いがあった。
しかし、皮肉にもこの日は薩長両藩に対し、「討幕の密勅」も下された。
あくまで武力討幕を狙う薩長両藩は十二月八日、慶喜が議長を務める列侯会議を、慶喜を抜きにして開き、翌九日の王制復古を決定した。
京都を守る桑名、会津の両藩に対しては、大政奉還の後、朝廷がその任務を解いた。御所周辺の警備は、薩長二藩が取って代わった。
桑名、会津両藩の兵を中心にした幕軍は一時、慶喜と共に京都二条城に退いた。

だが、慶喜を無視した列侯会議による王政復古といい、官位剝奪（はくだつ）といい、薩長のあまりもの強引なやり方に怒りが高まった。

慶喜は桑名、会津兵の怒りが爆発寸前にあることを察し、十二月十三日、さらに大坂城へ兵を退いた。

ところが、討幕の密勅がすでに下ったことを知って、

（このままでは朝敵の汚名を甘んじて受けねばならぬ。なんとかして天皇に真意を訴え、朝敵の汚名だけは避けねばならん）

慶喜はこう考えて年が明けた慶応四年（一八六八）正月三日、桑名、会津両藩の兵を先鋒に、一万五千の兵を京都に繰り出した。

鳥羽伏見の戦いである。

桑名藩は鳥羽街道で薩摩兵と衝突、これが戊辰戦争の開始でもあった。

こうした中央の情勢が柏崎の真吾らの耳に入ったのは、慶応三年の師走も押し迫ってからのことだ。

十二月二十九日昼。

柏崎陣屋から二丁の早駕籠が出た。

「乗り手はどなたじゃ」

「小林忠太夫どのに石井佳蔵どののことだ」

「して、行き先は」

「お二方とも桑名表のようじゃ」

「京都表が緊迫しているようだのう」

「さよう、大守さまはいかがなされておることやら」

陣屋の藩士たちにも異変の前触れが感じられた。

大晦日の柏崎は風雪が強く、雪が三寸（十センチ）ほど積った。

（はて、諸方から早飛脚が到来しているようだが、京で何か異変でもあったか）

真吾は急にあわただしくなった役所の動きに注意をはらった。

しかし、この柏崎では何事もなく慶応四年の元旦を迎えた。

元旦の朝は寒気も少し緩ぎ、日中、太陽もものぞいた。

まず、穏やかな正月日和だった。

柏崎では恒例の正月行事が七日の松の内まで続いた。

京都では三日の鳥羽伏見の戦いの情勢が、夜までに幕軍不利と判明した。

さらに五日に大阪の淀藩、六日には桑名の隣藩の津藩が裏切り、幕軍の敗退は決定的になった。
翌六日、徳川慶喜は桑名、会津侯や老中らと共に秘かに大坂城を出て、海路江戸へ逃走した。
十二日、江戸に到着した慶喜は、上野寛永寺に入り、ひたすら謹慎の態度を示した。
桑名藩主松平定敬も深川の霊巌寺に入って慶喜に倣った。

同じ十二日。
柏崎陣屋から桑名表へ早駕籠で出た小林忠太夫と石井桂蔵が帰陣した。
その夜更け。会津藩の早打ちが柏崎を走り抜けた。
翌十三日ごろから、京都の異変が真吾らの耳にも入り始めた。
「なんでも正月三日。京で戦があったようだ」
「大守さまの兵は薩州の兵と鳥羽口で戦われたらしい」
「して、勝敗は？」
「よくわからんが、当藩に利あらずとのことじゃ」
「薩州と長州の兵が、錦旗を奉じて諸街道より攻め上る、とのうわさもあるようだ」
「それではわが藩は朝敵か」
「朝敵！」

真吾は「朝敵」との言葉に、胸を刀物か何かで突かれたような痛みを覚えた。
（朝敵となれば、この柏崎でも戦が始まるやも知れん。町方や在郷の衆もやがてこのうわさを知ろう。その際の動揺をいかにしたらよいものやら……）
真吾が心配した町方や在方へ、藩の通達が出たのは十五日になってからだ。
「薩州勢の仕掛けに余儀なく戦争になったとのことで、町方でも一統、動揺致さずに見回りを厳重に、怠りなきよう」
という内容だった。

そのころ、桑名表でも藩主定敬敗走の事実が知れていた。
桑名表の重臣酒井孫八郎の元へ、江戸からこの事実が正式に知らされたのは一月十六日のことだ。
『中将様（定敬のこと）御儀、去る十二日四つ時、上様御一同、西（の）丸へ御着の旨、江戸より申し来る』（慶応4・1・16＝酒井孫八郎日記）
この知らせの前に桑名表では、藩論を「謝罪恭順」に統一していた。
いったん「抗戦」と出たクジを激論の末、酒井孫八郎らの力でひっくり返し、十二日付で定敬

の実兄、尾州侯を頼って嘆願書を出していたのである。

一月二十三日。

孫八郎らは十二歳の松平萬之助（先代藩主定猷の遺児）を奉じて、四日市まで官軍の本営へ謝罪に出向いた。

官軍の桑名征討軍は、総督橋本実梁卿、副総督柳原前光卿である。

二卿は桑名藩の謝罪に好意を示し、藩士はすべて四日市の法泉寺に入って謹慎した。

桑名城は一月二十八日、官軍に無血開城したが、恭順に不満を持った藩士の多くは武装し、東上した。

二月までに柏崎にも藩主定敬の謹慎が知れわたり、陣屋の藩士もそれに倣った。

二月五日。

真吾に上役から勅書（天皇の命令を布告する公文書）下向の警備の命令が出た。

「御勅書の当地御通行は、明六日早朝のことじゃ。今夜は鉢崎にお泊まりのよし、当藩は謹慎中ゆえ、大事があってはならぬ」

「御勅書はどちらへ下向なさるのでありますか？」

「町役人どもへもこの事を知らせ、粗そうのないようにお迎えすればよいのじゃ」

「……」

「よいか、くれぐれも頼むぞ」

勅書下向の警護には、公事方水谷善六、吉田八十右衛門、郷使吉田久三郎も同行した。

勅書の下向は二十六日にもあった。

三月に入って江戸では将軍徳川慶喜が水戸に引退した。

桑名藩主松平定敬も倣い、飛び領地の柏崎に引き籠って、さらに恭順の意を表わすことにした。

定敬は品川沖からロシア船に乗った。

津軽海峡を抜けて日本海に入り、三月二十七日、小雨の新潟に上陸した。

従う家臣は約二百人である。

定敬らはそれから海岸沿いに南下し、柏崎に向かった。

柏崎陣屋では藩主を迎える準備に大わらわだった。

大庄屋中村雄右衛門ら町役人にも、定敬の新潟上陸が知らされ、町はずれまで出迎えるように陣屋から指示が出た。

町役人らはおっとり刀で市川新田町、外山六蔵方に集まった。

大庄屋の雄右衛門以下、町年寄、御内用達一統が顔をそろえた。

だが、定敬らの柏崎着は二、三日後となり、六蔵宅で控えていた雄右衛門らには、
「改めて出迎えるように」
との指示があった。

三月三十日、定敬ら一行が、晴れ上がった柏崎の町に入った。
陣屋の武士のほか、町からは郷士、同席格、御目見(おめみえ)医師、大庄屋、町年寄、同見習い、浦方支配、御内用達一同が、平服で市川新田の先で、定敬の駕籠を会釈で迎えた。
しかし、定敬はこの日、柏崎陣屋には入らなかった。
謹慎する身で官軍をはばかったのであろう。定敬らは陣屋の近くの勝願寺に入った。
町役人たちは、ここを「御本陣」と呼んだ。
定敬はこの寺でひたすら恭順の態度を示すつもりだった。
ところが、薩長の桑名藩や会津藩に対するにくしみは、予想以上に強かった。
四月二十九日、会津藩に対し、官軍となった仙台、米沢藩が降伏を勧めている。
だが、薩長は、仙台、米沢藩が会津藩の降伏条件として示した城明け渡し、削封、責任ある家臣の切腹——などを全く受け付けなかった。
会津藩の取るべき道は抗戦しかなかった。

官軍との衝突の危険が、一日ごとに高まっている気配は、桑名藩主が謹慎する柏崎でも、日を追って感じられた。

閏(うるう)四月三日夜。
柏崎で大事件が起きた。
恭順派の指導的役割を果たしていた家老職の吉村外記(権左衛門)が、何者かに斬り殺されたのである。
「平太夫どの、一大事でござる」
真吾は同僚に呼び出された。
「外記さまが切られた！」
「吉村さまが……。どこでじゃ」
「陣屋から勝願寺へ行く途中だったようじゃ。やられたのは栗島小路端の細道じゃ」
現場には代官のほか、勝願寺から藩の重役も集まっていた。
「不意討ちを食らったようじゃ」
重役の一人が吐きすてるようにいった。
「いったい何者が……」

間もなく定敬に従って柏崎に来ていた二十代の若い藩士二人が、姿を消していることがわかった。

この二人について、真吾らに厳しい探索が命じられた。

その夜のうちに手配書まで出た。

しかし、二人の行方はわからなかった。

会津へ逃げ込んだという説がもっぱらだった。

柏崎に謹慎した桑名藩の藩論はこの暗殺をさかいにして、抗戦へ急激に片向いた。

閏四月十六日。

定敬は本陣を勝願寺から会津寄りの加茂町へ移す。

真吾はこの移動の街道の警備と町方役人の指図を命じられた。

「渡部さま。御本陣のご移動はいったいどういう理由なのでございましょうか」

「いよいよ戦争になるのでございましょうや」

柏崎町を代表する豪商でもある星野藤兵衛や、西巻荘左衛門、大庄屋中村雄右衛門らが、町会所へ出張した真吾に尋ねた。

「柏崎の町が戦場になるのを避けられたとも考えられる。藩論は恭順と定まっておる。予断は許さぬが、陣屋の指示に従い、くれぐれも動揺せぬように」

そうは言われたものの、藤兵衛らには不安が残った。

この日、定敬が加茂町へ移ると同時に、北陸道の柏崎口になる鯨波駅へ見張りの兵が立った。

十八日には北條口、妙法寺口、宮川口といったところへ、続々、兵が配備された。

柏崎の町ではいよいよ緊張が高まった。

真吾はこの日も町会所へ出張し、

「町方の者、動揺致さぬよう組々への申し渡しを徹底せよ」

と、町役人の間を駆け回った。

柏崎には幕軍の兵が続々、繰り込んだ。

町方ではそのたびに夜具だ、米だと大騒ぎになった。

夜具調べも真吾ら郷手代に回ってきた。

(できれば戦争にならぬことを祈るのだが……)

恭順派の真吾らの願いも空しく閏四月二十七日早朝、桑名藩兵は鯨波駅で官軍と開戦した。

この鯨波戦争の戦況は、陣屋には次々と伝えられた。

「東軍優勢！　味方は要所を押さえ、死傷も少ないとのことだ」

「味方の勝利間違いなし」

早い時間に伝えられた戦況は陣屋の者にとっても嬉しいものだった。

だが、官軍は薩摩、長州、加賀、高田藩の兵が、三国街道松之山口、北陸本道黒岩口、谷根口、本隊は米山峠を越え青海川へと三大隊に分かれて攻撃した。

片や東軍は桑名藩兵二百五十人が北陸本道、会津藩士松田昌次郎が率いる衝鋒隊二百人が黒岩口、会津、水戸、幕臣の混成隊である浮撃隊百人は谷根口に備えた。

桑名藩兵はこの時、一番「雷神隊」、二番「致人隊」、三番「神風隊」、それに「大砲隊」の四隊に分かれて奮戦した。

だが、時間が経つにつれて物量に物を言わせた官軍が押し返した。

夕方までは小千谷口を守っていた会津兵が敗走し、桑名藩兵は左右に敵を抱えることになった。

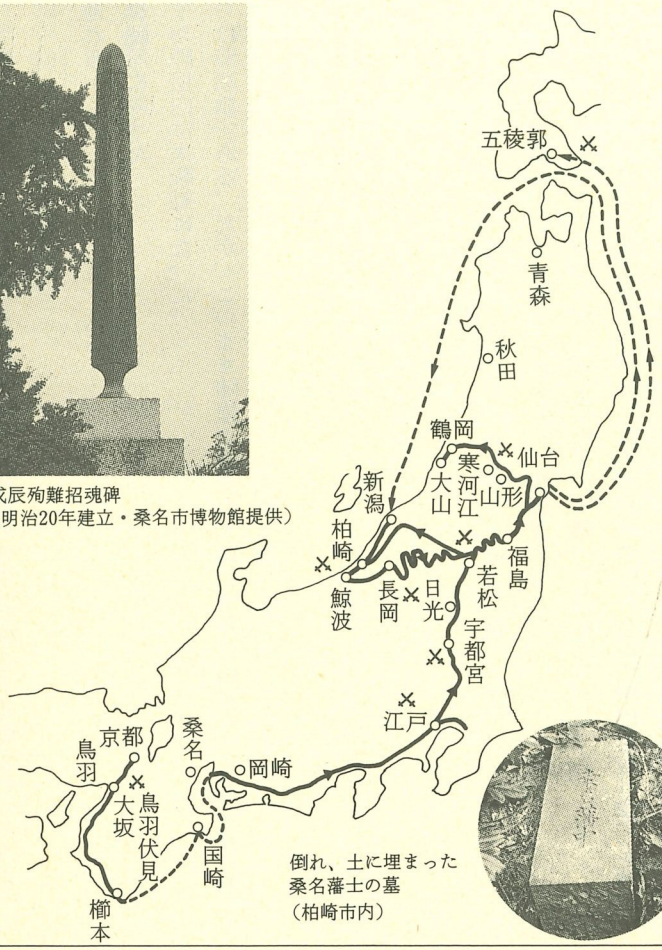
このため桑名藩兵は陣屋に近い番神堂まで退き、その後、北陸道椎谷駅と長岡街道妙法寺駅方面へ散り散りになり、泥沼の東北戦争へ突入して行った。

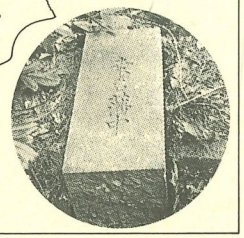
桑名藩主定敬は会津兵といったん合流し、会津若松に向かった。

だが、実兄、松平容保が籠城を拒んだため、やむなく米沢を目指した後、近臣だけを伴って榎本武揚の軍艦で箱館（現・函館）へ渡った。

「戊辰戦争」桑名藩士の行動

戊辰殉難招魂碑
（明治20年建立・桑名市博物館提供）





倒れ、土に埋まった
桑名藩士の墓
（柏崎市内）

真吾ら陣屋の藩士六十人余りは、この戦争には直接参加せず、定敬とも行動を共にしなかった。

夕刻。

「味方敗れる」

の報が陣屋に入った。

たちまち陣屋内は大騒動になった。

「われらは恭順派である。だが、このまま陣屋に居たのでは、官軍にはむかうものと見られてしまうのは必定(ひつじょう)だ」

「どうするのだ」

「陣屋を立ち退く」

「しかし、黙って立ち退いても官軍は追ってくるぞ」

「謹慎の事を上申する」

陣屋では激論の末、その夜の内に、にわかの立ち退きが始まった。

柏崎の町方でも、官軍が入って来ることを知り、大騒ぎになった。

荷車に家財道具を積んで避難する者が跡を絶たず、一時、大混乱となった。

しかし、この夜、官軍は鯨波まで引き返したため、柏崎の町はやがて平穏を取り戻した。

真吾ら陣屋の藩主は、柏崎から約三里（十二キロ）離れた刈羽郡野田村の願竜寺に入って、ひたすら恭順謹慎の意を表わした。

真吾がこの時、藩士と別行動を取ったのは、

『君を軽しとし、社稷(しゃしょく)を重んじとする』（渡辺家系図）

を、大義名分にしたからである。

社稷とは、土地の神と五穀の神のことである。

古代の諸侯はこの二神を宮殿に祭った。

いずれも国を治めるのに欠くことのできない神で、転じて「国家」の意味になった（『角川漢和中辞典』）。

真吾は、臣下のとる道として、主君よりも国家の安泰が重いと判断したのである。

桑名へ帰る

慶応四年閏(うるう)四月二十七日深夜。

柏崎の南約三里の田舎村、野田の願竜寺に入って謹慎した陣屋の者たち六十余人は、子供に女

房たちも加えての数である。
真吾は、妻の藤、長女常、長男第一郎と二つになったばかりの二女鋼を伴っていた。
真吾と藤は生涯に五男五女をもうけている。
子だくさんだったが、この時はまだ五人家族である。
一家は官軍への不安を抱きながら願竜寺に入った。
「わたくしたちはいったいどうなるのでありましょう」
藤がすがるように真吾を見上げた。
「……わからん……」
その時、
「ワァーッ」
というかん高い泣き声があがった。
藤の袖をしっかり握っていた鋼が、突然、泣き出したのである。
「これッ！　子供を泣かせてはならん」
緊張の中に鋭い声が飛んだ。
官軍への不安は大人たちばかりではない。
まだ、歩くこともままならない幼い子たちでも、ただならぬ事態を敏感に感じとった。

願竜寺に入った陣屋の者たちすべてが、わが身の行く末がどうなるか、わからなかった。
この日の鯨波戦争は、桑名藩兵を中心にした東軍の戦いぶりが目覚ましかった。
洋式銃に、洋式の大砲を備えた官軍に対し、桑名兵の武器はまだ旧式の銃が多かった。
大砲は柏崎陣屋の地元、大久保村で鋳造したものを使った、といわれる。
当時の記録では、この日の戦死、負傷者は長州兵が戦死二、負傷七人、高田兵戦死三、負傷八人、加賀兵戦死三、負傷二十四人とある（『柏崎市史』）。
これに対し、東軍は討死一、負傷八、脱走一人である。
東軍の戦死は桑名藩致人隊駒木根元（三十六歳）とある。この後、負傷者の中から雷神隊平野吉五郎（二十三歳）と同隊の三宅厚（十七歳）が落命した（『桑名市史』）。
鯨波ではこの他に雷神隊の一人が重傷を負い、切腹したのを村人が目撃したと伝えられる。この人物が脱走した兵だったとする説もある。

翌閏四月二十八日朝方。
もぬけの殻となった柏崎陣屋は略奪の場となった。
昼すぎ、町役人星野藤兵衛らが見回った時も、略奪は続いていた。

あまりのことに藤兵衛らが止めさせたほどである。支配されていた者たちの屈折した不満をまざまざと見る思いだった。

この日の午後、官軍が柏崎に入った。

陣屋の藩士がことごとく退去したため、出迎えたのは藤兵衛ら町役人たちだった。

官軍は柏崎に、陣屋に代わる役所として「民政局」を置いた。

柏崎は、桑名藩に支配されてはいたが、町民の自主、独立性、民度の高いところである。

民政局の実務的な役務は、大庄屋中村雄右衛門や藤兵衛らが当たった。

刈羽郡野田村の願竜寺に謹慎中の真吾ら陣屋の武士たちには、翌二十九日になっても官軍からの沙汰はなかった。

願竜寺には、鯨波戦争の余波ともいえる緊張した話が次々に伝わった。

「官軍が柏崎に入った二十八日のことだという。早駕籠で問屋場まで乗り付けた歩兵があった。すぐ官軍に見つかり逃走したとのことじゃが、官軍はその夜、とうとう柏崎の町に陣を張らなかったそうだ」

「して、どこに陣を張ったのじゃ？」

「なんでも中浜、下宿あたりらしい」

「なんと腰抜けどもめ。歩兵一人に臆したか」

「これッ。滅相なことを口にするものではない」

年嵩の者が若者をたしなめた。

「昨二十九日にも鵜川橋あたりで水戸藩の兵と官軍が一戦交じえたらしい」

「町方では大騒ぎになったようじゃ」

「そうよ。その晩は町方の者がほとんど浜や田んぼに出て一夜を明かしたとも……」

「まるで先年の信濃国の大地震の時を思い起こす。のう真吾さ」

すっかり年老いた竹内運八郎が真吾に語りかけた。

信濃国大地震。

それは弘化四年（一八四七）三月二十四日午後十時すぎのことだった。

柏崎陣屋に四つ（午後十時）の火の用心を告げる拍子木の音が鳴り終わった後のことだ。

突然、陣屋は大きな地鳴りと共に、激しい揺れに襲われた。

真吾はこの時、まだ数えで六つだった。

ちょうど父勝之助が役所の当直で、真吾も一緒に泊まりに来ていた。

「真吾！　起きろッ」

勝之助の大声で、寝ついたばかりの真吾もハッと目覚めた。

「おとっさ。なんだ、なんだ。揺れてる！」
勝之助は、はね起きたばかりの真吾を布団の上に座らせて、身支度を整えた。
だが、揺れは次第に強くなり、勝之助は足元が定まらないまま宿直部屋の障子と雨戸を、やっとの思いで開けた。
「真吾、外へ出ろ！　地震じゃぞッ」
真吾はこの時、勝之助に抱きかかえられるようにして役所の庭に飛び出たことを覚えている。
その夜は余震が続き、陣屋の人たちは外に戸板などで板囲いをして夜を明かした。
柏崎陣屋でこの地震が、長野・善光寺あたりを震源地にした大地震とわかったのは、三月二十六日になってからだ。
真吾の父勝之助はこの地震で大被害が出た信州松代藩へ、桑名藩からの御見舞いの米を贈る使者に選ばれた。
その時の模様を勝之助は、桑名へ送った「柏崎日記」に詳しく記録していた。
真吾も、兄の故鐐之助と一緒に柏崎に戻ったこの日記を、何度か読み返している。
『兼て御聞き及びもこれ有る信州地震変に付き、松平様へ御見舞いとして御米三百俵被進候に付き、道中聞合に先日、岩下、間瀬の手代両人遣し候得ども、なお宿々取り糺しあわせて高田様、飯山様、松代様御役人応対のうえ、懸け合いの筋これ有り候間、貴様御人指しにて御内用御出張仰せ付けられ候旨御達しなり。誠に仰天致し候得ども是非も無し。御さし人なれば御請仕る』（弘化4・6・11＝柏崎日記）
松代藩十万石の真田信濃守と桑名藩松平越中守は、このじぶん、親類であった。
真吾の父、勝之助は、名指しで藩の御用を仰せつかったのである。
「勝之助さのあん時の姿は、今でも忘れん」
運八郎がいった。
「なにせ名指しの大役じゃった。松代までの道中、何度か余震があってのう。陣屋でもその都度、外に飛び出したが、勝之助さは道中で継ぎたての人馬も少なく、苦労したそうじゃ」
運八郎の昔話しに、陣屋の人たちはちょっとの間だが、自分たちが置かれている境遇を忘れることが出来た。
月が替わって慶応四年五月。
柏崎を放棄した桑名藩は、主従が散り散りとなって東北各地を転戦した。

藩主松平定敬は、兄、会津容保の兵と籠城を望んでいた。
だが、容保にこれを拒否され、わずかの近臣を伴っただけで、幕府の海将榎本武揚の軍艦で箱館へ入った。
その他の桑名藩兵は、長岡藩や、庄内・鶴岡（山形県鶴岡市）の酒井藩を頼った。

戊辰戦争の終末を迎え、五月から六月にかけては柏崎への官軍の往来が、いよいよ激しくなった。
五月二十二日には薩長の軍艦二隻が柏崎浦に入った。
六月には長州の毛利内匠が総督、前原彦太郎（一誠）が副総督となった千城隊が上陸した。
七月になると、陸軍将の西園寺公望ら維新の重臣もやってきたが、この北越戦争を指揮するのは長州奇兵隊の山縣狂介（有朋）だった。

同藩の兵が、近くでなお抗戦している間、刈羽郡野田村の願竜寺に謹慎中の柏崎陣屋詰めだった桑名藩士たちには、いよいよ不安が募った。
真吾は、祖父の先々代平太夫と、父の勝之助が残した桑名、柏崎の両日記など、身の回りの品々を、いつでも持ち出せるよう準備だけは怠らなかった。

「もしもの場合は、この日記を持って行くことはできぬかも知れん。だが、おとっさとおじいさが残してくれた何よりの財産だ。もしものことがあったら、この日記をわしに代わって子供たちへ伝えることを忘れるではないぞ」
真吾は妻の藤に厳しく言い聞かせた。
「私どもへの御沙汰はいったいどのようになるのでございましょう?」
藤は毎日のように不安を訴えた。
「柏崎の民政局には、すでに嘆願書を星野藤兵衛を通じて差し出しておる」
「嘆願の筋はいかがなったのでしょうか」
「わからぬ。この柏崎の近辺では絶えず戦争が続いておる。薩長の兵もまだ続々上陸しておるのことゆえ、われらの処分まではそう簡単に手が回らぬのかも知れぬ」
謹慎中とあって毎日の暮らしは辛かった。

真吾ら旧陣屋の藩士へ民政局の内々の沙汰があったのは六月十日のことだ。
この日、民政局に出勤した柏崎の大庄屋中村雄右衛門は、官軍幹部の安井から陣屋の衆への沙汰が決まったことを知らされた。
「安井さま。旧陣屋の衆はいったいどういうご沙汰になりましたので?」

「うむ、この近辺はまだ穏やかならぬ情勢じゃ。それで桑名へ戻してしまおうということになった」
「桑名表へでありますか」
「その方が何かと面倒が起きなくてよい」
「それで出立は？」
「七月になろう。船で行かせるようじゃ」
「船で？　……でございますか」
「船の方が安心じゃ。なにせ海の上じゃ。海の上ではもしもの場合の対応も便利じゃからな」
柏崎にはこの前日の十九日、長州の千城隊が上陸していた。
旧陣屋の者たちの処置は、同隊総督毛利内匠や副総督前原彦太郎あたりも話し合ったのだろう。
この沙汰が真吾らに知らされたのは、それから一か月も後の七月十六日のことだ。
官軍総督府名で、
「家族残らず、海路桑名へ送られる」
との沙汰だった。
この総督府の沙汰は、真吾らには実に急なものだった。
出発は十九日未明。船は越前藩（福井藩）の船が準備された。

「ようやく桑名に戻れるか」
陣屋の人たちは、まずは胸をなでおろした。
しかし、死の恐怖から完全に逃れたわけではなかった。
それでも国表へ帰参できることは、いったん、賊軍となった身には格別の沙汰である。
「誠に急な出立になるが、まずはご沙汰に従うが大事。真吾さも支度を急げ」
運八郎は上機嫌だった。
真吾の妻藤も喜びを隠さなかった。
藤にとっては嘉永三年六月、九つの時、父、田中忠蔵と一緒に柏崎へ赴任して以来の桑名である。
「あれから十八年ぶりの桑名です。……このような形で戻るとは少しも考えていませんでしたが……」
藤はため息まじりにいった。
「わしにとっては初めての桑名じゃ。父上が生きていたら、なんと思われたことだろう」
「勝之助さは桑名に必ず戻れると思ってお役目に励んでおられた。親ごの悲願を子のそなたが果たすことになったのう」
運八郎が目をうるませた。

小雨がシトシトと願竜寺の境内を濡らした。
「親の悲願を子が果たすか……。それもこのような捕らわれ同然の身でか。父上が存命じゃったら、どうなさったろう」
真吾は大事にこん包した形身の日記を見やった。

旧柏崎陣屋の衆の立ち退きは、官軍の監視の中であわただしく行われた。
この十九日未明、まだ暗いうちに六十余人が柏崎の浦から越前の船に乗船した。
真吾は極楽寺の裏山に眠る父勝之助や母おきく、兄鐐之助、祖母おますら肉親の墓参りもままならなかった。
「せめて墓参なり」
と藤も思ったが、謹慎中の者に許されるはずがなかった。
ようやく東の空が白みかけたころ、真吾らを乗せた船は番神崎をかなり遠くに見た。
(父上、柏崎ともこれでお別れです。墓参りもできぬことになり申し訳なく思っておりますが、真吾は父になり代わってこの日記を桑名へ持ち帰りますぞ。父上があれほど帰参を望んでいた桑名へ。この日記を父上、母上、兄上と思い、子供たちの子孫までも大事に、伝えます。不肖の子をお許しあれ)

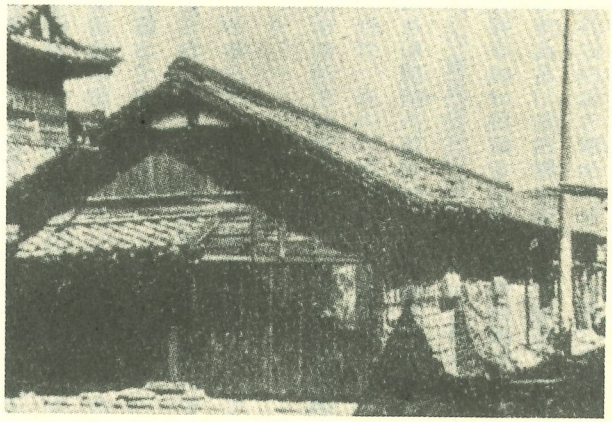
真吾は船中からそっと手を合わせた。
そばではすっかり疲れ切った第一郎ら三人の子が、軽い寝息をたてている。
父勝之助が柏崎に赴任した天保十年(一八三九)から、実に二十九年が過ぎていた。
船上からは、柏崎の山々が煙りのように消えて行く。

その後の真吾

真吾とその家族が桑名に到着したのは、慶応四年(一八六八)八月十一日である。
北海道や東北ではなお、各地で戊辰戦争が続いていた。
桑名藩主松平定敬も箱館に在った。
旧柏崎陣屋の人たちの旅は、官軍の厳しい監視下に置かれていた。
慶応四年八月二日。
柏崎から北陸の海岸沿いに航海を続けた船は、能登半島を回り、越前国敦賀の港に入った。
桑名藩柏崎陣屋詰めだった藩士とその家族ら六十余人は、長い船旅を終えて、太平洋側の桑名を目指して出発した。

このじぶん、敦賀から桑名へは「北国脇往還」と呼ばれた街道が便利だった。
中仙道の関ヶ原から日本海へ通じる道である。
敦賀からは木之本（滋賀県木之本町）を経て伊吹山の裾野を回って関ヶ原へ出る。
真吾らの一行がこの道を通ったか、はっきりはしない。
だが、この街道なら関ヶ原から養老へ出るのもよし、大垣へ出るのにも都合がいい。このあたりからは揖斐川に沿って桑名までの船便も利用できた。
一行は、途中、若狭藩兵の護衛を受け、八月十一日、故郷・桑名に到着した。
真吾の一家は最初、かって祖父の平太夫が住んだ桑名八幡瀬戸庚申堂北に近い矢田村の馬道に住んだ。
「ここならおじいさが日記で書き送って下さった走井山にも近い」
真吾は九月八日に「明治元年」と改元されたこの年の十二月、明治政府に統治された桑名藩の寄合番になった。
明治政府はこのじぶん、各藩に取りあえず旧藩主を知事として置いていた。
桑名藩は、先君の遺児松平萬之助が支配した。明治二年のことである。
真吾はいわば捨て扶持で暮らしていた。
だが、明治三年三月二十九日、七等準士族に列した。名も清蔵と改めて、家禄二十俵を受けた。

その翌明治四年八月十六日、士族になった。
真吾の桑名藩士としての身分は、明治五年三月、桑名県から転じた安濃津県が三重県と改称された時に終わった。
真吾は系図に、
「廃藩まで在勤十五年」
と、自ら記入している。
この年一月、住居を矢田磧寺ノ町に移していた真吾は、この後、教員になって各地を転々とする。
まず明治六年十一月、尾張国（愛知県）海西郡極楽寺新田で、時（自）習学校開校とともに教壇に立った。
ここを明治八年十一月に辞職し、再び桑名へ戻り、桑名郡益生村走井学校（現在の桑名市立益世小学校）の教員になった。
走井学校は民家を借用しての開校だった。
同年九月、矢田村に新校舎を建て、真吾は明治九年十月から同校の初代校長に就任した。
走井学校には明治十七年十一月、真吾の後に伊藤甲子五郎が校長に就任した。だが、真吾は明治二十年四月の学制改正までここで教員を続けた。



真吾が教壇に立った走井学校（現・桑名市立益世小学校の前身）

兄・鐐之助が遊んだ桑名・走井山観音（現在）

この後、税務署の職員に転じ、対島、長崎に住んだ。

明治三十五年十月、今の愛知県一宮市となる一宮町に移った後、同三十六年五月、三度目桑名に戻った。

この間、桑名で二男辰夫、三男鉄三郎、四男源四郎、三女時、五男五郎、四女多美、五女久良の順で子供たちが生まれた。

真吾は五男五女と子だくさんではあったが、晩年は成人した子供たちと離れて暮らすことが長かった。

男子は長男第一郎が病死したほか、二男辰夫と三男鉄三郎、四男源四郎が共に警察官になって東京、長崎などに散らばったため、父親とは一緒に暮らせなかった。

中でも三男、鉄三郎は長崎で巡査をした後、明治二十四年九月、京都・粟田口の青蓮院で剃髪し、貫應と改名した。

鉄三郎はこの後、京都・八瀬村妙伝寺に住んだが、明治三十年ごろから諸国を流浪している。

娘たちは桑名に嫁いだ者が多く、晩年の真吾は桑名で娘たちやその家族と行き来しながら、和歌や漢詩をつくって過ごした。

しかし、父、勝之助同様に息子たちと離れて暮らした日々は本当に寂しかった。

真吾が残した晩年の和歌がある。

題・お笑い草。

「ゆめに迄君のかへりを待ちわびし　其かいなきぞかなしかりける」

「今日あすを待ちゐし君は今もなほ　おなじ千里をへだつかなしさ」

真吾は明治四十一年五月十日、桑名で死んだ。

享年六十七歳。

「宏智院釋清哲居士」

祖父平太夫と同じ桑名・萱町の法盛寺に埋葬された。

この時は、各地に散らばった息子たちも桑名に集まったという。

元桑名藩士渡部平太夫政敏。幼名真吾。後に清介、清蔵と改名し、柏園と号す。

漢詩、和歌集『柏園遺稿』がある。

あとがき

桑名日記と柏崎日記を残した渡部家三代の親子には、今から七年ほど前、この日記に出会った時から強く魅了されていた。

「転勤による家族の別離」というテーマは、現代サラリーマン社会にも重くのしかかっている。

それを百五十年も前の父と子が、体験していた。

一枚のお切り紙（辞令）で、桑名と柏崎に引き裂かれた父と子は、生きて再び相まみえることは、ついにできなかった。

父と子ばかりではない。

その子孫たちも、一つ家で共に暮らす日々はなかった。

だが、この父と子らのえらいところは、家族の絆を、日記を交換することで大事に保ったことである。

孫たちは、祖父と父の日記から、人の生きざまを学び、それを心の支えにして明治維新の嵐を乗り切った。

真吾が、父、勝之助の墓の碑文に刻んだ「不羈一民」という文字は、渡部家の人々の生きざまを、みごとに言い当てていると思う。

この世に類いまれな父と子の日記から、現代社会にも通じる渡部家三代の親子関係を書くことができたら、どんなに素晴らしいものか、と思っていた。

それが叶ったことは、思いがけない喜びである。

渡部家の子孫は、明治以降、さらに散り散りになった。

この日記が世に出て、百年以上を経た子孫たちの顔と顔との出会いが、最近になって何度かあった。

これは、私を指導して下さった日記研究の先駆者で、民俗学者の堀田吉雄氏(三重県桑名市在住)、全文を活字化して発表した前鈴鹿短期大学助教授澤下春男氏とご子息の能親氏の研究発表があったればこその出会いだった。

それに真吾の二男辰夫(政典)の子孫に当たる袖野治子氏(福島県いわき市在住)、長女常の子孫に当たる古橋昌幸氏(三重県桑名市在住)の、ルーツを求めたご努力が感激の出会いを次々に生んでいった。

「百五十年もの長い時間を経て、家族の絆というものを改めて知った」と、いう袖野さんの言葉には、深くうなずくものがあった。

「幕末父子傳」には、渡部家の系図が伝わる鹿児島県志布志町在住の渡辺勇氏をはじめとするご子孫の皆さまと、堀田、澤下氏の全面的な支援をいただいた。

心から感謝している。

また、装画は、前作に引き続いて三重県上野市在住の濱邉萬吉氏に、大変なご苦労をおかけした。

お三方ともご高齢をも顧みず、お力添えをいただき、重ねてお礼を申しあげたい。

エフエー出版の永井社長と藤田編集長には、再び、このような出版の機会を与え、遅い原稿を辛抱強く待っていただいたことに、深く感謝申し上げる。

最後に拙文が、この「乾いた時代」にこれから父や母となる若者たち、子育ての渦中にある世代の皆さまにも読まれ、心に「親と子」の関係を考える機会を与えることになれば、これ以上の幸せはない。

本間　寛治

〈参考文献〉

堀田吉雄「桑名日記・柏崎日記抄」「同補註」『日本庶民生活史料集成15巻』〈三一書房〉

澤下春男・澤下能親共訳『桑名日記（全4巻）』『柏崎日記（全3巻）』『同解題』『同付録旅日記』〈自家本〉

桑名市教育委員会『目で見る桑名の江戸時代』桑名市立文化美術館編集・発行

堀田吉雄・水谷新左衛門・堀哲・土肥久代編著『桑名の民俗』〈桑名市教育委員会〉

新沢佳大『柏崎編年史（上巻）』〈柏崎市文化財調査委員会〉

柏崎市編纂委員会編『柏崎市史料集（近世1～5、近現代1、民俗編）』

関甲子次郎『柏崎文庫13』

山田良平『柏崎のいしぶみ（第一集）』〈柏崎中央公民館図書刊行会〉

稲垣史生編『三田村鳶魚江戸武家事典』〈青蛙房〉

小嶋秀夫『桑名・柏崎日記に現われた児童発達と家族生活(1)・(2)（名古屋大学教育学部紀要―教育心理学科―第33、34巻）』

「渡邉氏系図」写し　鹿児島県志布志町、渡邉勇氏所蔵。

「桑名日記」「柏崎日記」の原本は三重県多度町、伊東春夫氏所有（桑名市博物館蔵）。「旅日記」の原本は、桑名市、不破正人氏所蔵。

桑名市博物館刊『明治維新の桑名』

鈴木芳雄『戊辰の挽歌―桑名藩士情熱の奮戦録』〈新日本法規出版〉

『桑名市史』（近藤本・平岡潤編纂・桑名市教育委員会）

『柏崎市史』（柏崎市史編さん委員会）

不破義幹『桑名昔話』

不破義幹『続桑名昔話』

年表

西暦	年号	渡部家関係	国内関係
一七八四	天明4	第7代渡部平太夫政通（以下、平太夫）、奥州白河で生まれる。	若年寄田沼意知、江戸城中で刺される。
一七八七	7		松平定信老中となる。寛政の改革始まる。
一七九三	寛政5		松平定信老中を辞す。
一七九六	8	平太夫、白河藩用米蔵番になる（禄高5石2人扶持）。	
一八〇〇	12		伊能忠敬、蝦夷地測量。
一八〇二	享和2	渡部勝之助（第8代平太夫政醇、以下勝之助）白河で生まれる。	
一八〇八	文化5		間宮林蔵ら樺太探検に出発。
一八〇九	6		間宮林蔵東韃靼を探検し帰る。
一八一四	11	平太夫、越後・村松藩の一揆警戒のため柏崎陣屋に出張（大筒役）。	
一八一七	14	勝之助、平太夫の養子になる。	イギリス船浦賀に来航。
一八一九	文政2	勝之助、白河藩先手組に召し出される（禄高5石2人扶持）。	

西暦	年号	渡部家関係	国内関係
一八二三	6	白河藩主松平定永、桑名に転封。平太夫と勝之助も移住。この時、平太夫、自筆の御触留を残す（桑名市・不破直幹氏蔵）	ドイツ人シーボルト、蘭館医として着任。
一八二五	8		異国船打払令（無二念打払令）を指令。
一八三四	天保5	11月、勝之助、おきくと結婚。	水野忠邦老中となる。
一八三六	7	12月8日、鐐之助（長男）生まれる。	この年、諸国大飢饉。
一八三七	8	勝之助、桑名藩下横目になる。	大塩平八郎、大坂に乱を起こす。
一八三九	10	勝之助、正月のお役替で柏崎陣屋詰めの勘定人を命じられる（禄高9石3人扶持）。 2月24日、単身で柏崎へ出発。平太夫、桑名日記の執筆始める。 3月5日、勝之助、柏崎着。学問所係を命じられる。 同月19日、おろく（長女）誕生。5月末、勝之助、おきくとおろくを連れて柏崎へ再出立。 6月12日、柏崎着。勝之助、道中記を残す。	蛮社の獄起こる。
一八四〇	11		天保改革本格化。
一八四一	12		徳川家斉没。幕府の天保改革始まる。
一八四二	13	4月11日、柏崎で真吾（二男）生まれる。	老中水野忠邦罷免。
一八四三	14		フランス船琉球に来て通商を求める。
一八四四	弘化1		

西暦	年号	渡部家関係	国内関係
一八四五	2	9月5日、柏崎でおりん（二女）誕生するも、12月20日死亡。柏崎・本竜寺に葬る。	幕府、オランダ政府の開国の勧めを拒絶。
一八四六	3	正月・平太夫御破損奉行格になる。	
一八四七	4	1月19日、柏崎で行三郎（三男）生まれる。	オランダ人再び開国を勧める。
		2月、勝之助柏崎陣屋の勘定人を仰せつけられる。	3月24日、信濃国大地震。
		3月28日、勝之助、善光寺地震の後、検見に出る。	
一八四八	嘉永1	3月4日、平太夫の桑名日記絶筆。	この年外国船渡来頻繁。
		同7日、平太夫死す。同22日、柏崎日記終わる。	
		9月、祖母おますと長男鐐之助、柏崎に移る。	
一八四九	2	片山恒斎（理助）病死、墓は円妙寺。	
一八五一	4	5月10日、勝之助の三男行三郎死す（5歳）。	
一八五三	6		ペリー浦賀に来航。
一八五四	安政1	10月24日、勝之助の三女てつ生まれる。	ペリー再来。日米和親条約調印。
		同月25日、妻おきく死す（39歳）。	
一八五五	2	10月26日、鐐之助3石扶持を賜わる。	江戸大地震（大政大地震）。
一八五六	3	8月19日、鐐之助柏崎にて死す（21歳）。二男真吾、嗣子となり清蔵と改名する。	
一八五七	4	1月15日、真吾、柏崎陣屋の新郷足軽に召し出される。	下田条約調印。

一八五八	5		井伊直弼大老に就任。日米修好通商条約に調印。
一八六〇	万延1		井伊直弼殺される（桜田門外の変）。
一八六一	文久1	2月9日、勝之助柏崎陣屋の代官格になる。	
		9月26日、長女おろく、柏崎陣屋の藩士山田行蔵に嫁ぐ。	
一八六二	2	2月24日、真吾、お藤と結婚。	松平容保、京都守護職となる。
		同月26日、祖母おます柏崎で死す（73歳）。	
一八六三	3	10月3日、真吾の長女常生まれる。	薩英戦争。
一八六四	元治1	2月、勝之助寄合番となり隠居す。	池田屋事件。禁門の変。
		12月12日、勝之助柏崎にて死す（63歳）。	
一八六五	慶応1	3月、真吾家督を継ぎ寄合番になる（禄高7石2人扶持）。	
		6月8日、真吾の長男第一郎生まれる。同月、真吾柏崎・極楽寺に父勝之助の墓を建立す。	将軍徳川慶喜。薩長同盟成る。この年世直し一揆最もたかまる。
一八六六	2	6月、真吾御手代になる。7月、おろく死す（28歳）。	大政奉還。坂本龍馬、中岡慎太郎暗殺される。
一八六七	3	3月8日、真吾の二女綱生まれる。	戊辰戦争開始（鳥羽・伏見の戦い）。年号を明治と改元し一世一元制とする。会津藩降伏。旧幕府軍、蝦夷全地を占領（総裁榎本武揚）。
一八六八	明治1	8月11日、真吾、妻子と共に桑名に戻る。	
		9月18日、真吾の二男辰夫生まれる。	五稜郭の戦終わり戊辰戦争終結。
一八六九	2		

西暦	年号	渡部家関係	国内関係
一八七二	5		学制を制定し学区制を布く。
一八七三	6	2月3日、真吾の四男源四郎生まれる。	徴兵令を布告。内務省設置。
一八七五	8	10月、真吾、桑名走井学校（現桑名市立益世小学校）の教員になる。	
一八七六	9	11月22日、真吾の三女時、生まれる。	
一八七七	10		西南戦争起こる。
一八七八	11	9月2日、真吾の五男五郎、生まれる。	
一八八一	14	2月26日、真吾の四女多美、生まれる。	自由党結成。日本鉄道会社設立。
		8月14日、勝之助の三女てつ、桑名で病死。	
一八八三	16	9月4日、真吾の五女久良、生まれる。	官報発行開始。
一八八九	22		大日本帝国憲法公布。
一八九〇	23	8月12日、真吾の長男第一郎、病死す（26歳）。	第一回衆議院総選挙。教育勅語発布。第一帝国議会召集。
一八九一	24	8月、真吾、対馬・厳原へ移住し、税務署員となる。	濃尾地方大地震。
一八九二	25	11月、真吾長崎県へ転居する。	
一八九四	27		清国に宣戦布告（日清戦争）。
一八九五	28		日英同盟調印。
一九〇二	35	11月、真吾愛知県へ転居する。	
一九〇三	36	5月、真吾桑名に戻る。	
一九〇四	37		ロシアに宣戦布告（日露戦争）。
一九〇八	41	5月10日、真吾死す（67歳）。桑名市法盛寺に埋葬する。	
一九一一	44	9月3日、真吾の妻藤、死す（70歳）。法盛寺に埋葬する。	通商航海条約改正調印（関税自主権回復）。

この本は、澤下春男・澤下能親氏共訳「桑名日記」（全四巻）、「柏崎日記」（全三巻）から、日記原文を引用した。原文の旧字、旧仮名づかいは、現代の表記に改め、一部句読点を入れて読み下した。自家本の引用を快諾いただいた澤下氏に感謝する。

著者

本間寛治（ほんま・かんじ）
1949年山形県生まれ．
1971年から新聞記者．
著書「幕末転勤傳」（エフエー出版）
現在，名古屋市東区在住．

◉読者の皆さまへ

この本についてのご意見、ご感想をお待ちしております。
お便りは、左記へお送り下さい。

エフエー出版　編集部

幕末父子傳（ばくまつおやこでん）
柔名・柏崎を結ぶ家族日記

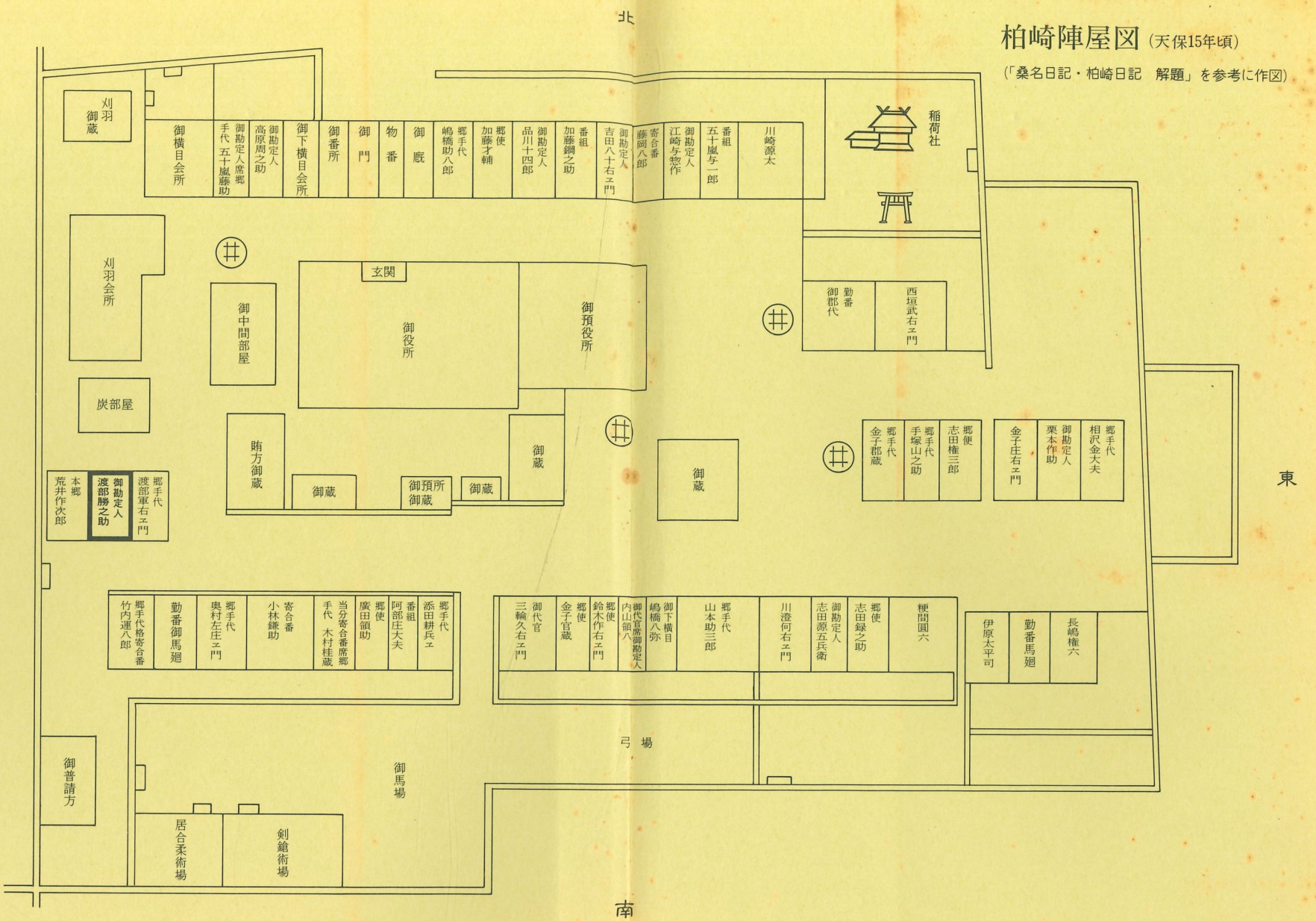
定価　一〇三〇円
（本体一〇〇〇円＋税三〇円）

一九八九年四月二九日　発行

著者　本間寛治
発行者　永井晴彦
発行所　有限会社　エフエー出版
〒460　名古屋市中区栄一丁目22―16
電話　〇五二―二三二―一九三五
振替　名古屋五―六一四五一
印刷　K W I X
製本　飯島製本

© 1989

ISBN4-900435-77-5 C0021 P1030E

柏崎陣屋図（天保15年頃）

（「桑名日記・柏崎日記　解題」を参考に作図）